

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第16集

船越高原 A 遺跡 III

福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在遺跡の調査

2002

福岡県教育委員会

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第16集

船越高原 A 遺跡 III

福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在遺跡の調査

2002

福岡県教育委員会



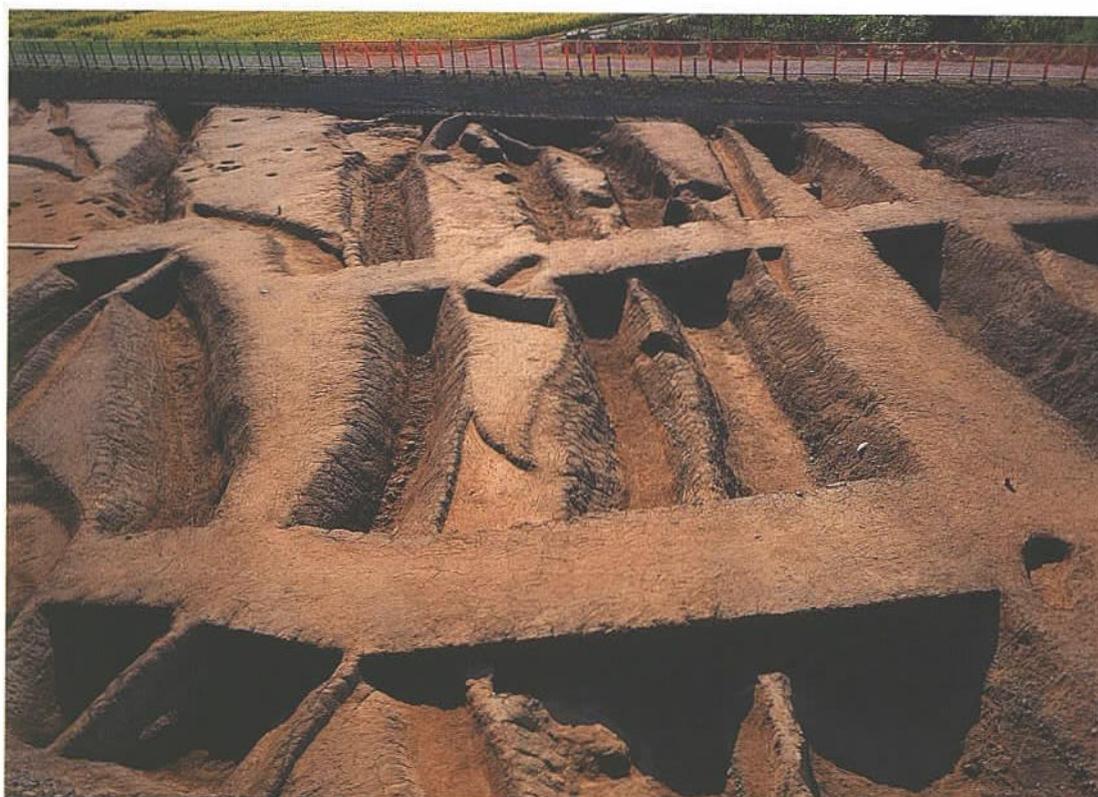
浮羽バイパス全路線（西から）



浮羽バイパス10地点（西から）



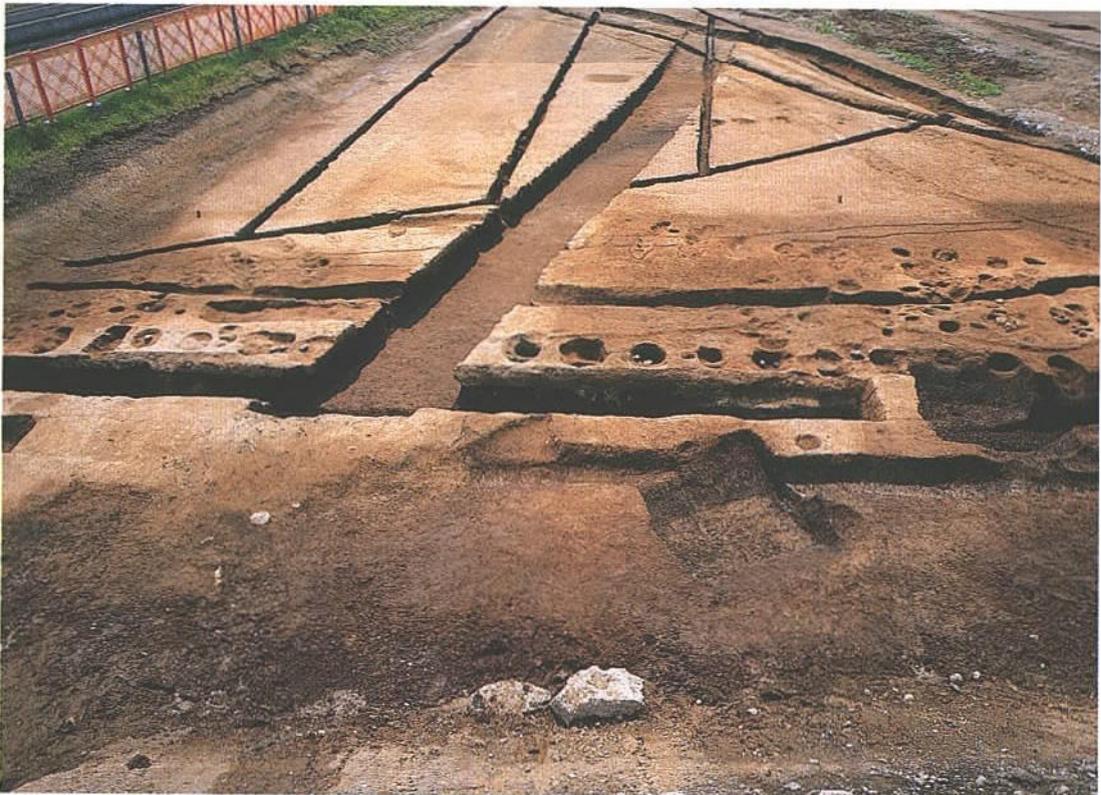
浮羽バイパス10地点Ⅱ区（西から）



浮羽バイパス10地点Ⅱ区（北から）



道路状遺構（北から）



道路状遺構（東から）

序

福岡県教育委員会では、建設省九州地方建設局（現 国土交通省九州地方整備局）の委託を受け、一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。昭和54（1979）年に調査を開始して以来、9遺跡の調査を完了し、既に一部が一般供用されています。

この報告書は、平成8～12（1996～2000）年度に発掘調査を実施した浮羽郡田主丸町大字船越、吉井町大字長栖に所在する船越高原A遺跡の記録です。

本遺跡は筑後川と耳納山脈に挟まれ、自然の恩恵を受けた緑豊かな場所に位置しています。今回の調査では弥生時代から中世までの集落遺跡を確認し、この地で連綿と営まれ続けた人々の生活の新たな一面に触れることができました。

本書が地域文化の研究や文化財愛護思想の普及及び学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査及び出土遺物の整理作業や報告書作成に当たって、多くの方々に御協力、御助言いただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成14年3月29日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. この報告書は、平成8（1996）年度から平成12（2000）年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局（現・国土交通省九州地方整備局）の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査の記録で、一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第16集である。
2. 本書に掲載した船越高原 A遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財調査第10地点にあたり、浮羽郡田主丸町大字船越・吉井町大字長柄他に所在する。
3. 船越高原 A遺跡の報告は平成11年以降、3ヵ年に分けて実施し、平成11・12年度はⅠ区の遺構・遺物について報告した。平成13年度はⅡ・Ⅲ区の遺構・遺物について報告する。
4. 本書に掲載した遺構図は、齋部麻矢・吉田東明・進村真之が作成した。なお作成にあたり、飯田澄江、石橋丸子、上村智美、江田裕子、河内享子、原紀代、山口由美子らの協力を得た。掲載した遺構図の方位は全て座標北（G.N）である。
5. 本書に掲載した遺構写真は齋部・吉田・進村が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は空中写真企画に委託した。
6. 出土遺物の整理・復元作業は九州歴史資料館で行った。
7. 出土遺物の実測は調査担当者その他、平田春美・棚町陽子・久富美智子・若松三枝子・坂田順子・田中典子らの協力を得た。
8. 遺構・遺物の製図は豊福弥生・原カヨ子が行った。
9. 出土遺物・写真・図面については、すべて九州歴史資料館及び福岡県文化財保護課太宰府事務所に保管している。
10. 本書の執筆は齋部・進村が分担し、編集は進村が行った。

本文目次

序

例言

I	はじめに	
1.	調査の経過	1
2.	調査の組織	2
II	遺跡の地理・歴史的環境	4
III	発掘調査の記録	
1.	基本層序	8
2.	竪穴住居跡	8
3.	掘立柱建物	17
4.	土坑	17
5.	溝	36
6.	道路状遺構・橋脚状遺構	65
7.	ピット・包含層出土土器	67
8.	補遺	78
IV	おわりに	83
参考	吉井町上古賀集落内出土土器	84

図版目次

巻頭図版-1	1	浮羽バイパス全路線（西から）
	2	浮羽バイパス10地点（西から）
巻頭図版-2	1	浮羽バイパス10地点Ⅱ区（西から）
	2	浮羽バイパス10地点Ⅱ区（北から）
巻頭図版-3	1	道路状遺構（北から）
	2	道路状遺構（東から）
図版-1	1	Ⅱ区第一遺構面東端部（西から）
	2	Ⅱ区第一遺構面（西から）
図版-2	1	Ⅱ区第一遺構面（南から）
	2	水路部分第一遺構面（西から）
図版-3	1	水路部分第一遺構面（西南から）
	2	Ⅱ区第一遺構面西端部全景（東から）
図版-4	1	水路部分第一遺構面（東から）
	2	Ⅲ区第一遺構面東端部（南から）
図版-5	1	Ⅲ区第一遺構面中央部（東から）
	2	Ⅲ区第一遺構面西端部（東から）
図版-6	1	114号竪穴住居跡（東から）

	2	115号竪穴住居跡（東から）
	3	116・119号竪穴住居跡（北から）
図版-7	1	117号竪穴住居跡（東から）
	2	118号竪穴住居跡（北から）
	3	120号竪穴住居跡（南東から）
図版-8	1	121号竪穴住居跡（南から）
	2	121号竪穴住居跡貼床除去後（南から）
	3	121号竪穴住居跡カマド（南から）
図版-9	1	122号竪穴住居跡（南から）
	2	122号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	123号竪穴住居跡（南から）
図版-10	1	123号竪穴住居跡カマド（東から）
	2	7号掘立柱建物（南から）
	3	8号掘立柱建物（北東から）
図版-11	1	65号土坑（南から）
	2	66号土坑（北東から）
	3	73号土坑（西から）
図版-12	1	74号土坑（東から）
	2	75号土坑（南から）
	3	76号土坑（西から）
図版-13	1	77号土坑（西から）
	2	78号土坑（北西から）
	3	79号土坑（南から）
図版-14	1	80号土坑（北から）
	2	81号土坑（南から）
	3	82号土坑（北から）
図版-15	1	83・84号土坑（西から）
	2	86号土坑（南から）
	3	87号土坑（南から）
図版-16	1	88・92号土坑（南西から）
	2	89号土坑（北西から）
	3	94号土坑（南から）
図版-17	1	96号土坑（北西から）
	2	97号土坑（東から）
	3	98号土坑（北西から）
図版-18	1	99号土坑（北西から）
	2	100号土坑（南東から）
	3	101号土坑（北から）
図版-19	1	102号土坑（西から）

	2	103号土坑（北から）
	3	104号土坑（西から）
図版-20	1	119号土坑（南西から）
	2	Ⅱ区溝集中部分（北から）
	3	72号溝断面（北西から）
図版-21	1	76号溝断面（北西から）
	2	77号溝断面（北西から）
	3	96号溝（北東から）
図版-22	1	96号溝断面（東から）
	2	118号溝断面（北から）
	3	121号溝断面（北から）
図版-23	1	122号溝断面（北から）
	2	123号溝断面（北から）
	3	124号溝断面（南から）
図版-24	1	125号溝断面（南から）
	2	129号溝断面（南から）
	3	132号溝断面（南から）
図版-25	1	133号溝断面（南から）
	2	134・135号溝断面（南から）
	3	162号溝土器出土状況（北東から）
図版-26	1	195号溝断面（東から）
	2	213号溝断面（南東から）
	3	213号溝土器出土状況（南から）
図版-27	1	214号溝断面（南東から）
	2	214号溝土器出土状況（北から）
	3	232号溝（北から）
図版-28	1	道路状遺構（西から）
	2	道路状遺構（南から）
	3	道路状遺構（東から）
図版-29	1	道路状遺構断面（北から）
	2	橋脚状遺構（北西から）
	3	橋脚状遺構（南東から）
図版-30	1	橋脚状遺構完掘後（南東から）
	2	長野水神社
	3	五庄屋に関する石碑
図版-31		114・117・122・123号竪穴住居跡，73・76・78・81・82号土坑出土土器
図版-32		83・84・103・119号土坑，69・118号溝出土土器
図版-33		121・122・124・125・129・132・134号溝出土土器
図版-34		144・148・213・214・232号溝，包含層出土土器

図版-35		包含層出土土器
図版-36	1	出土石庖丁
	2	出土石製品①
図版-37	1	出土石製品②
	2	出土石製品③
図版-38	1	出土石製品④
	2	I区出土土製品
図版-39	1	I区出土石製品①
	2	I区出土石製品②
	3	I区出土石製品③
図版-40		I区出土石製品④

插图目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/50,000).....	5
第2図	調査区周辺図 (1/10,000).....	6
第3図	調査区配置図 (1/3,000).....	7
第4図	船越高原A遺跡基本層序模式図 (1/60).....	8
第5図	114~116・118・119号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	9
第6図	114・115・117・118号住居出土土器実測図 (1/3・1/4).....	10
第7図	117・120号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	11
第8図	121号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30).....	12
第9図	121~123号住居出土土器実測図 (1/3).....	13
第10図	122号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30).....	14
第11図	123号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30).....	15
第12図	7・8号掘立柱建物実測図 (1/60).....	16
第13図	58・65・66号土坑実測図 (1/40).....	18
第14図	67・68号土坑実測図 (1/40).....	19
第15図	69~72号土坑実測図 (1/40).....	20
第16図	73~77号土坑実測図 (1/40).....	22
第17図	58・73・75~78・80・81号土坑出土土器実測図 (1/3・1/4).....	23
第18図	78~83号土坑実測図 (1/40).....	25
第19図	82~84・119号土坑出土土器実測図 (1/4).....	26
第20図	84~89号土坑実測図 (1/40).....	28
第21図	89・90・93・96~99・101・103号土坑出土土器実測図 (1/3・1/4).....	30
第22図	90~95号土坑実測図 (1/40).....	31
第23図	96~101号土坑実測図 (1/40).....	34
第24図	102~104・119号土坑実測図 (1/40).....	35
第25図	69・72・75・76・96・114・118~122・164・166・167号溝土層断面図 (1/40).....	38

第26図	72及び164・75～78・80・85・96号溝出土土器実測図 (1/3・1/4).....	39
第27図	69・118・121～123号溝出土土器実測図 (1/3・1/4).....	40
第28図	72・76～78号溝土層実測図 (1/40).....	41
第29図	79・80号溝土層実測図 (1/40).....	42
第30図	123～125・129・132～135・162・165・166号溝土層断面図 (1/40).....	46
第31図	124・124及び125・125・129号溝出土土器実測図 (1/3・1/4).....	48
第32図	130・132・134・135・138・139号溝出土土器実測図 (1/3・1/4).....	52
第33図	144・148・152・159・162・184・185・201・203・208・213号 溝出土土器実測図 (1/3・1/4).....	54
第34図	185・208・213・214・232号溝土層断面図 (1/40).....	60
第35図	214・232号溝出土土器実測図 (1/3・1/4).....	62
第36図	道路状遺構実測図 (1/100).....	66
第37図	道路状遺構出土土器実測図 (1/3).....	65
第38図	道路状・橋脚状遺構実測図 (1/60).....	67
第39図	ピット出土土器実測図 (1/3・1/4).....	67
第40図	遺構面・包含層出土土器実測図① (1/4).....	69
第41図	遺構面・包含層出土土器実測図② (1/4).....	70
第42図	遺構面・包含層出土土器実測図③ (1/4).....	71
第43図	遺構面・包含層出土土器実測図④ (1/4).....	72
第44図	遺構面・包含層出土土器実測図⑤ (1/3).....	73
第45図	遺構面・包含層出土土器実測図⑥ (1/3).....	74
第46図	出土土製品・鉄製品実測図 (1/2).....	75
第47図	出土石製品実測図① (1/2).....	76
第48図	出土石製品実測図② (1/2・1/3).....	77
第49図	出土石製品実測図③ (1/2).....	78
第50図	I区出土土器・土製品・石製品・鉄製品実測図 (1/2・1/3).....	79
第51図	I区出土石製品実測図 (1/2・1/3).....	80
第52図	上古賀集落内出土土器 (1/3).....	84

表目次

出土土製品観察表.....	81
出土鉄製品観察表.....	81
出土石製品観察表.....	81
I区出土遺物観察表.....	82

I はじめに

1. 調査の経過

一般国道210号は、福岡県久留米市を起点とし大分県日田市を經由、大分市に至る産業、経済、観光を中心に利用される重要な幹線道路である。しかし、道路の幅員が狭いため、近年、交通量の増加に伴い混雑が著しくなり、交通事故も増加している。この混雑の緩和を図るために浮羽郡田主丸町を起点とし、現在ある210号線の北側の田園地帯を通り浮羽郡浮羽町山北までの延長約14km、幅員16～25mの浮羽バイパスの建設が昭和48年度に事業化された。用地買収は昭和52年度から着手され、現在、浮羽町と吉井町の一部で暫定二車線の供用が開始されている。

浮羽バイパスの建設に先立ち、福岡県教育庁管理部文化課（以下、県教委とする）は昭和47年2月3日付で「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」という文書で建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（以下、福岡国道事務所とする）から調査を委託された。県教委では路線予定地内の分布調査を行い、昭和49年に回答し、これに基づき昭和54年度から4カ年に亘って、吉井町塚堂遺跡の調査を行った。

その後、昭和61年4月2日付けで、福岡国道工事事務所から「埋蔵文化財の分布調査について」と再度、調査依頼があり、県教委では、再び分布調査を行った。その結果、すでに調査の終了した塚堂遺跡を除く、16箇所の埋蔵文化財の調査が必要との回答を行った。発掘調査予定面積は約200,000㎡であり、発掘調査は現在、随時協議を行いながら、継続中である。

第10地点は平成7年度、試掘調査が行われ、東側には弥生時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡を中心とする集落、それより西側には複数の溝と全面的に遺構の存在が確認され、調査が必要となった。なお、調査区によっては複数の遺構面が存在する可能性があった。そこで平成8年度に行われる周辺の県営圃場整備事業に合わせ、発掘調査が実施されることとなった。この圃場整備事業に伴い、田主丸町教育委員会においても、近接地を調査することとなり、福岡県教育委員会による調査地点をA地区とし、田主丸町教育委員会調査地点をB～D地区とした。本調査は平成8年度から開始し、平成12年度に終了している。

福岡県教育委員会の調査範囲を便宜上、東からⅠ～Ⅲ区に分け、平成8年度、Ⅰ区の第一遺構面とⅡ区、Ⅲ区の水路となる部分の調査が先行して行われた。平成9年度、10年度は引き続きⅠ区の第二遺構面、第三遺構面の調査が行われた。平成11年度はⅡ区、Ⅲ区の一部の調査を行い、平成12年度はⅢ区の調査を終了している。

残るⅠ区西南部に未買収部分があり、今後、調査が必要である。

2. 調査の組織

発掘調査関係者及び報告書作成関係者は以下のとおりである。

建設省九州地方局福岡国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所）

	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
所 長	佐竹 芳郎	藤本 聡	藤本 聡	藤本 聡	森 将彦	森 昌文
副 所 長	藤浪 元生	兼武征二郎	兼武征二郎	兼武征二郎	兼武征二郎	有働 伸幸
建設監督官	緒方 良一	別府 五男	別府 五男	新開幸一郎	田中 義高	田中 義高
調査第二課長	松尾 義信	有家 信義	有家 信義	有家 信義	有家 信義	浅井 博海
調査第二係長	山川 武春	柴田 智	柴田 智	中島 浩二		
建設技官	田中 義高	田中 義高	赤星 文生	赤星 文生	赤星 文生	久野 隆博
工務課長	瀧 敏信	沓掛 孝	沓掛 孝	沓掛 孝	大榎 謙	大榎 謙
工務第一係長	島田 隆一	島田 隆一	田中 博明	柳橋 孝博	松山ひろみ	佐藤 博信
工務第三係長	黒木 俊彦	梶原 俊之	梶原 俊之	古木 英昭	古木 英昭	山口 隆
	田口 仁	斉藤 啓嗣	斉藤 啓嗣	斉藤 啓嗣	川内 学	川内 学

福岡県教育委員会（平成10年度より教育庁総務部文化財保護課）

総括

教 育 長	光安 常喜					
教 育 次 長	松枝 功	松枝 功	藤吉純一郎	藤吉純一郎	榊原 英夫	森山 良一
指導第二部長	丸林 茂夫	竹若 幸二	富永 勲			
総 務 部 長				岩本 誠	岩本 誠	三瓶 寧夫
文 化 課 長	松尾 正俊	石松 好雄	石松 好雄			
文化財保護課長				柳田 康雄	柳田 康雄	井上 裕弘
参 事 兼 文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄				
参 事			柳田 康雄	井上 裕弘	井上 裕弘	
課 長 補 佐	清水 圭輔	元永 浩士	城戸 秀明			平野 義峰
課長補佐兼 管 理 係 長				角 伸幸	平野 義峰	
参事補佐兼 室 長 補 佐	井上 裕弘	井上 裕弘				

課長技術補佐		井上 裕弘	橋口 達也	橋口 達也	橋口 達也	橋口 達也	川述 昭人	川述 昭人
参事補佐兼 調査班総括	橋口 達也	橋口 達也						
参事補佐兼 調査第一係長			橋口 達也	児玉 真一	佐々木隆彦	佐々木隆彦		
参事補佐兼 調査第二係長			佐々木隆彦	佐々木隆彦	児玉 真一	児玉 真一		
参事補佐		木下 修 新原 正典 中間 研志	中間 研志	中間 研志				
庶務								
管理係長		黒田 一治						三笠ひとみ
事務主査		久保 正志	鶴我 哲夫		吉武 祐二			
主任主事		田中 利幸	田中 利幸	田中 利幸				秦 俊二
調査報告 主任技師	斎部 麻矢		秦 憲二	吉田 東明	秦 憲二	進村 真之	吉田 東明 森井 啓次 今井 涼子 進村 真之	
技師		吉田 東明 森井 啓次	今井 涼子 進村 真之	進村 真之				
九州歴史資料館 主任技師					斎部 麻矢			
北九州教育事務所 主任技師								斎部 麻矢
甘木歴史資料館 副館長								吉田 東明

現場作業に当たっては地元田主丸町をはじめ、吉井町、浮羽町、杷木町、甘木市、朝倉町から御参加いただいた。酷暑、厳寒の中、熱心に作業にあたられた皆様に心から感謝申し上げます。

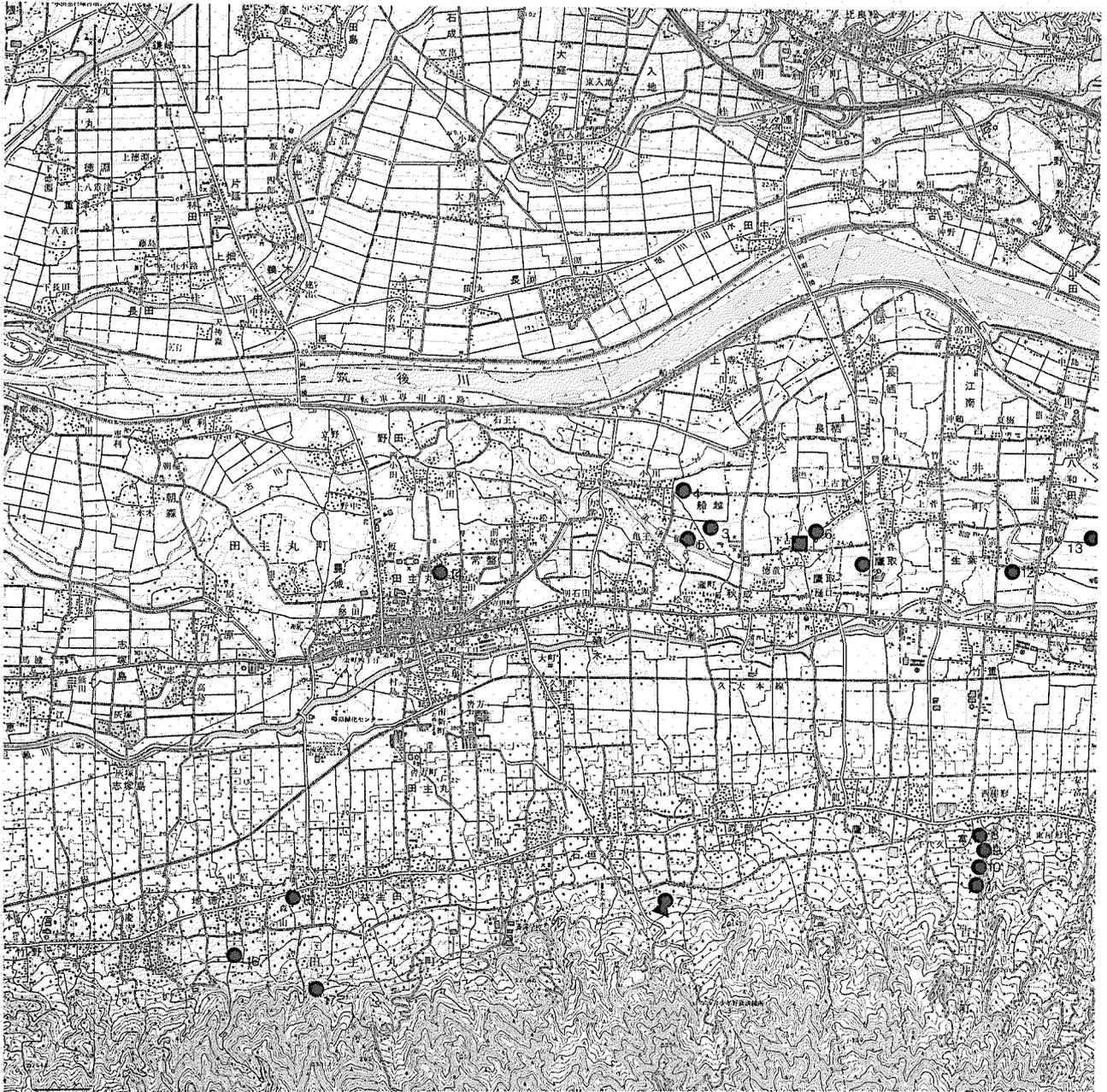
Ⅱ 遺跡の地理・歴史的環境

船越高原（FUNAKOSI-TAKAHARA）遺跡（1）は、福岡県浮羽郡田主丸町大字船越および吉井町大字長栖他に所在する。

遺跡の所在する浮羽郡は、福岡県の中央やや南寄りに位置し、筑後川によって形成された広大な扇状地上にある。郡は筑後川の南側に位置し、北は甘木市、朝倉郡、西は久留米市、北野町、南は八女郡、東は大分県とも接する。筑後川の恩恵を受けたこの一帯は大規模な穀倉地帯で水田耕作が盛んに行われる。また、山麓においては葡萄・柿・梨をはじめとする果樹や植木の生産が盛んに行われる。また、浮羽町の棚田は近年、全国的にも有名となっている。江戸時代には天領日田への街道として栄えた吉井町に残る白壁造りの建物群は往時の繁栄を偲ばせる。多くが保存されており、国の重要伝統的建造物群保存地区となっている。

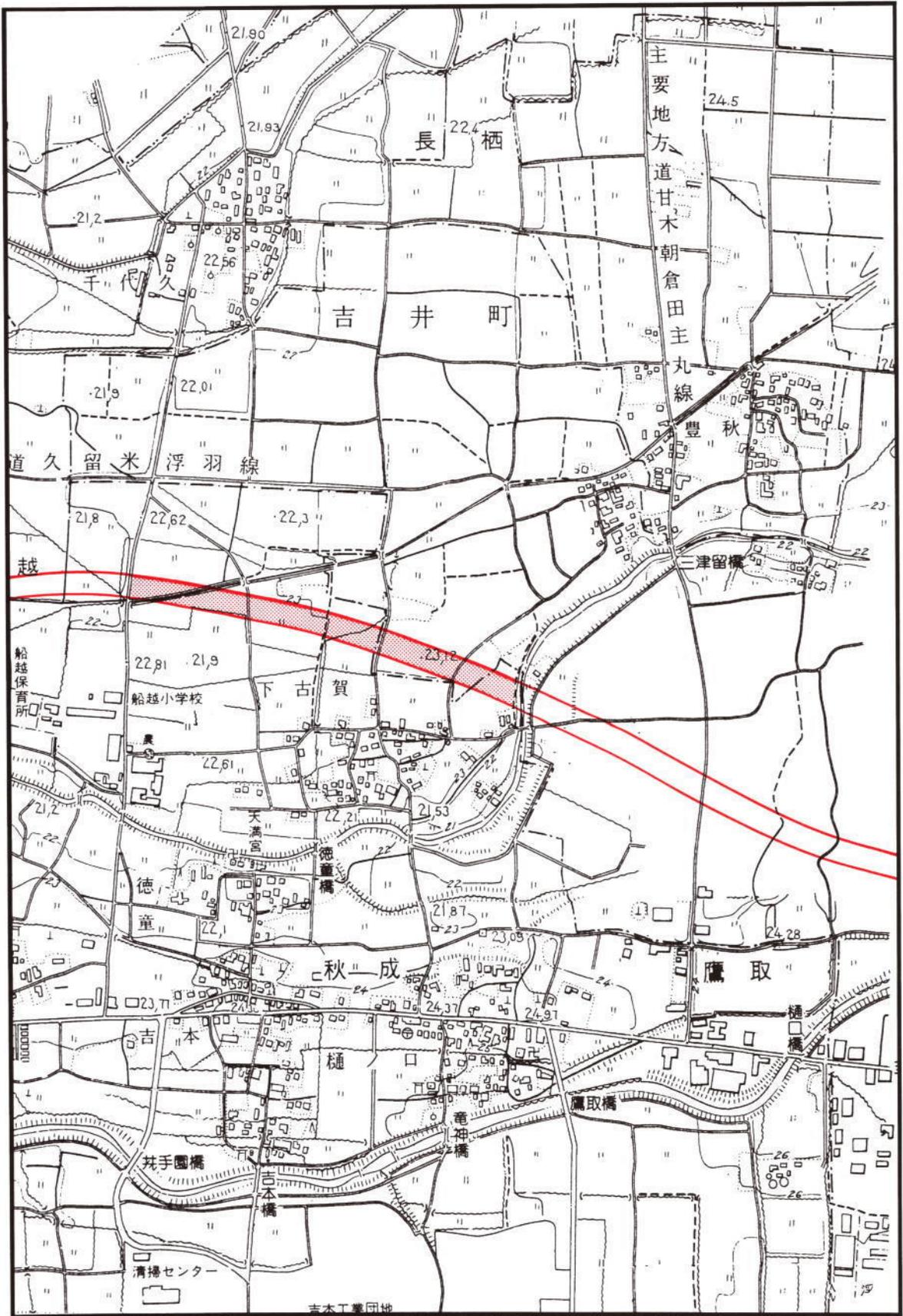
近年、船越高原遺跡の周辺においても県営圃場整備事業等に伴い盛んに発掘調査が行われおり、ここで紹介する。美津留川を挟んで当遺跡東側の吉井町鷹取五反田遺跡（2）、西側の田主丸町船越二ノ上遺跡（3）は浮羽バイパスの建設に伴い、発掘調査が行われた。鷹取五反田遺跡は弥生時代中期後半から奈良時代にかけての集落および弥生時代中期後半から後期前半にかけての甕棺墓が検出されており、同時期の集落と墓地のセットを検出した浮羽郡内でも稀有な例である。船越二ノ上遺跡は東端部と西端部に僅かに集落が見られるが、集中することは無い。中央部は多数の溝が検出されており、水田耕作に関するものと考えられている。周囲には水田が広がり、わずかな微高地に小集落を形成していたものであろう。船越高原B地区は、圃場整備に伴い田主丸町教育委員会によって調査された。A地区北側の高まりに位置し、古墳時代前期・後期の竪穴住居跡、掘立柱建物等が比較的まとまって集落を形成している。同じく圃場整備で調査されたC地区は古墳時代前期・後期の竪穴住居跡等がわずかに見られるほか、A地区から溝の続きが検出されている。おそらく、水田耕作地として使用されていた地域であろう。同様に圃場整備で調査されたD地区は北西部にあり、溝多数が検出されているのみである。同じく圃場整備で調査された船越一ノ上遺跡（4）は船越二ノ上遺跡の北側約200mに位置し、弥生時代中期中葉から後期前半にかけての竪穴住居跡が23棟検出されており、集落の中心は南側、船越二ノ上遺跡との中間に展開するものと考えられている。船越宮ノ前遺跡（5）は船越二ノ上遺跡の南側に古墳時代後期の竪穴住居跡が68棟検出されている。西端部の住居群は二ノ上遺跡の西端部の集落と一連のものであると考えられる。また、船越高原B遺跡に近接する吉井町長栖前畑遺跡（6）では古瓦がかなり検出されている。

これらの連綿と続いている集落を治めたと考えられる首長墓が田主丸大塚古墳（7）と考えられ、そのほかにも耳納山麓には1,000基以上といわれる群集墳が築かれていた。珍敷塚古墳（8）をはじめ、原古墳（9）、鳥船塚古墳（10）、古畑古墳（11）と多くの装飾古墳が含まれている。しかし、多くの古墳が近年の畑地の造成、盗掘により破壊されてしまい、ごく一部が往時を偲ばせるのみである。

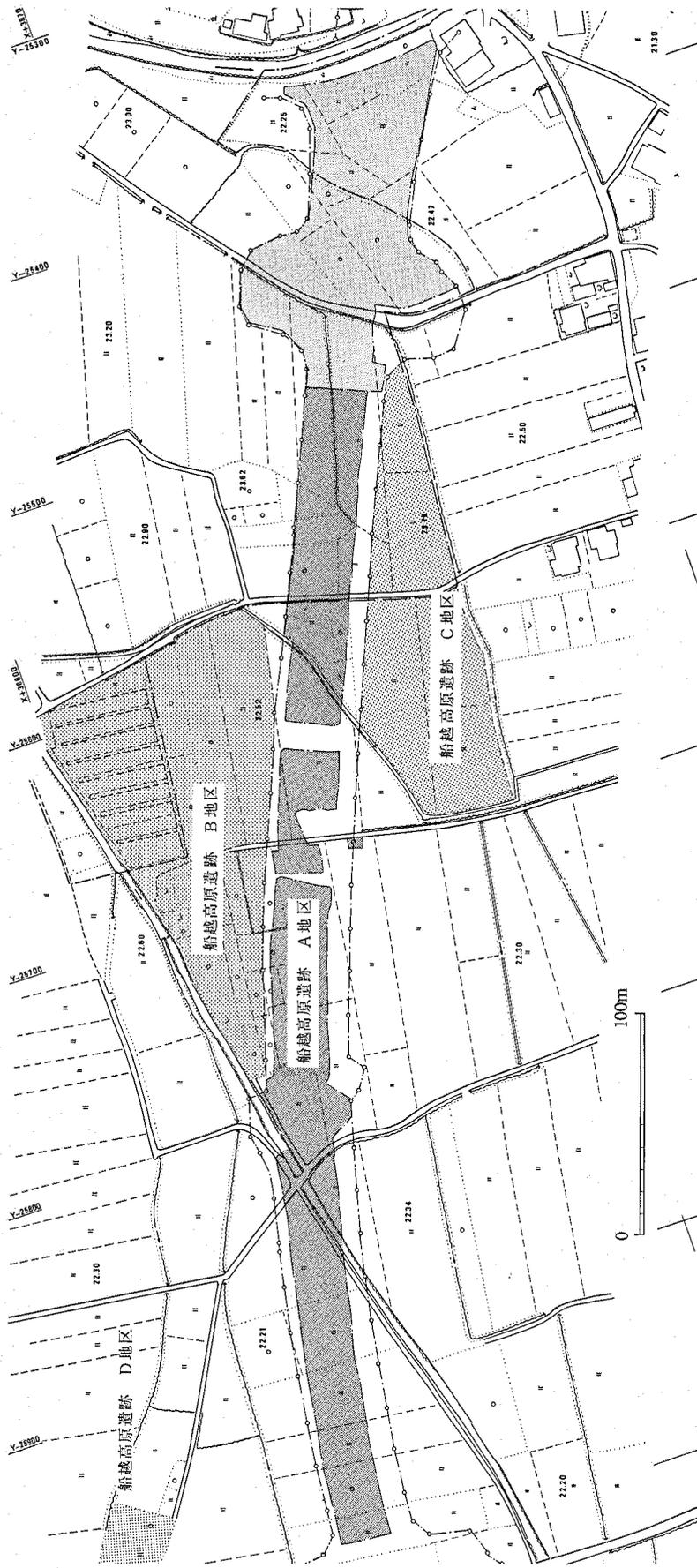


第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- | | | |
|------------|------------|----------|
| 1. 船越高原遺跡 | 8. 珍敷塚古墳 | 15. 寺徳古墳 |
| 2. 鷹取五反田遺跡 | 9. 原古墳 | 16. 狐塚古墳 |
| 3. 船越二ノ上遺跡 | 10. 鳥船塚古墳 | 17. 西館古墳 |
| 4. 船越一ノ上遺跡 | 11. 古畑古墳 | |
| 5. 船越宮ノ前遺跡 | 12. 生葉地区遺跡 | |
| 6. 長栖前畑遺跡 | 13. 女塚古墳 | |
| 7. 田主丸大塚古墳 | 14. 水分遺跡 | |



第2図 調査区周辺図 (1/10,000)

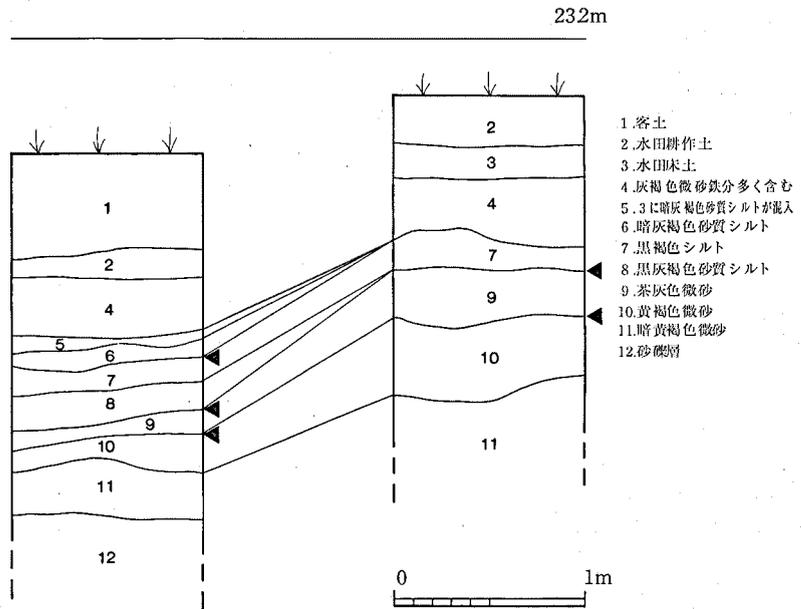


第3図 調査区配置図 (1/3,000)

Ⅲ 発掘調査の記録

1. 基本層序

船越高原遺跡は美津留川によって形成された自然堤防および後背湿地上に位置する。調査区が東西に長いため、自然の起伏や人為的な削平、客土により、上層が失われていた場合やさらに別の層が存在することがあるが、基本的には土壌の堆積はシルト、微砂、砂礫となる。



第4図 基本層序模式図 (1/60)

114号竪穴住居跡 (図版6-1、第5図)

調査区の第二遺構面東側で検出した。平面プランは東西3.1m、南北32m + aの長方形プランを呈するものと考えられる。壁は深い部分で約10cm残存する。中央に直径約45cm、深さ約5cmの円形の炉が付設される。長軸上北側に主柱穴を検出しており、直径15cm程の柱痕を確認している。北東隅付近では炭化材が検出された。床面下は全体に一段掘り込まれる。遺物は弥生土器の椀がやや浮いた状態で出土している。

出土遺物 (図版31、第6図)

弥生土器

椀 (1) No.1の土器である。内湾し、口縁端部が直立に近い。底部はやや上底気味である。

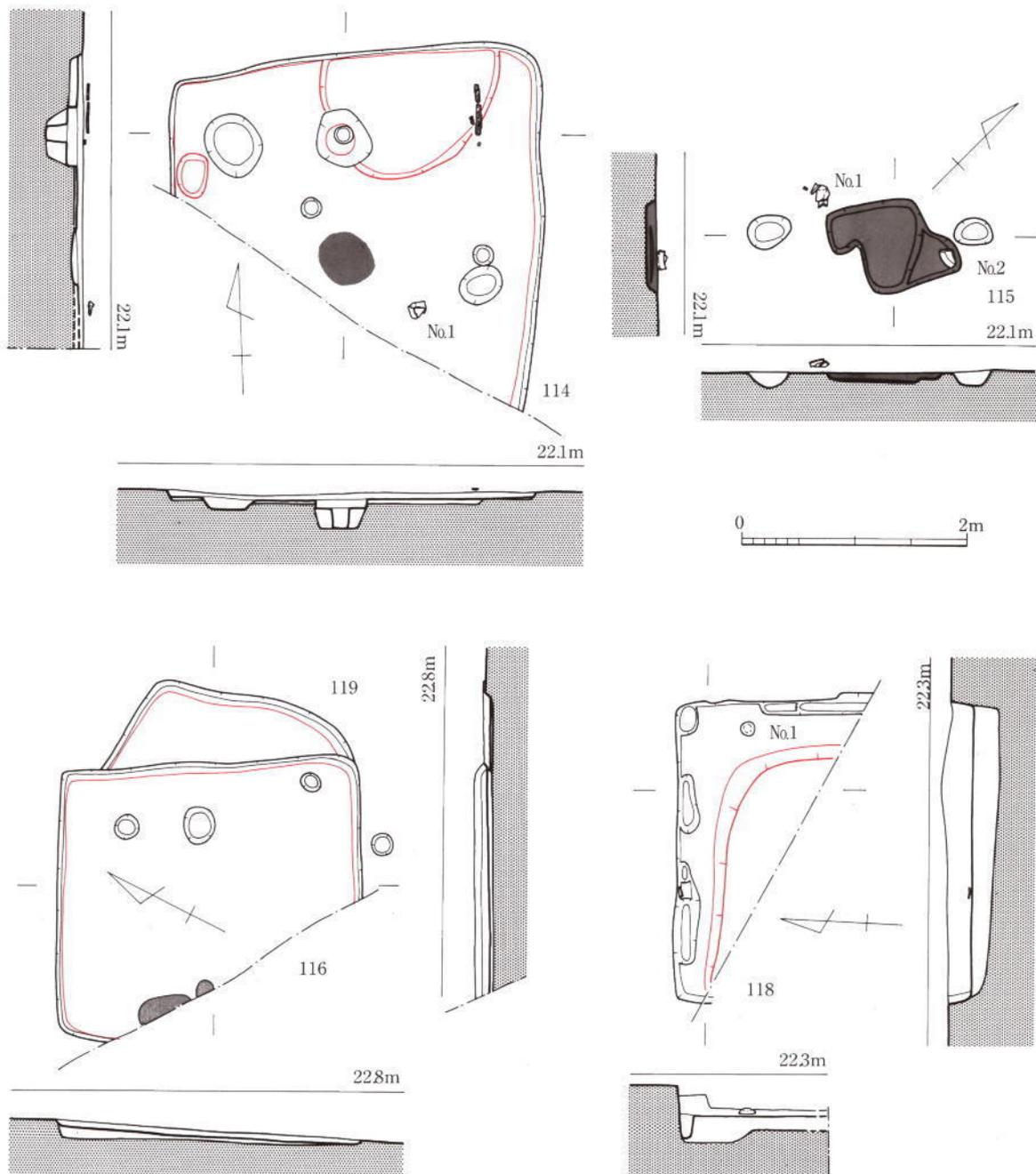
115号竪穴住居跡 (図版6-2、第5図)

調査区の東側で検出した。削平により炉及び2本の主柱穴のみが残存する。炉は約12m × 0.8mの不整形な菱形を呈し、約10cm程度掘り込む。内面は火を受け赤変する。その東西両脇、約30cm離れたところに主柱穴2本が検出された。約15cm掘り込むが、柱痕は検出できなかった。遺物は炉直上で弥生土器の高坏口縁部 (6) が出土している他、磨石 (25) が出土している。

出土遺物 (第6図)

弥生土器

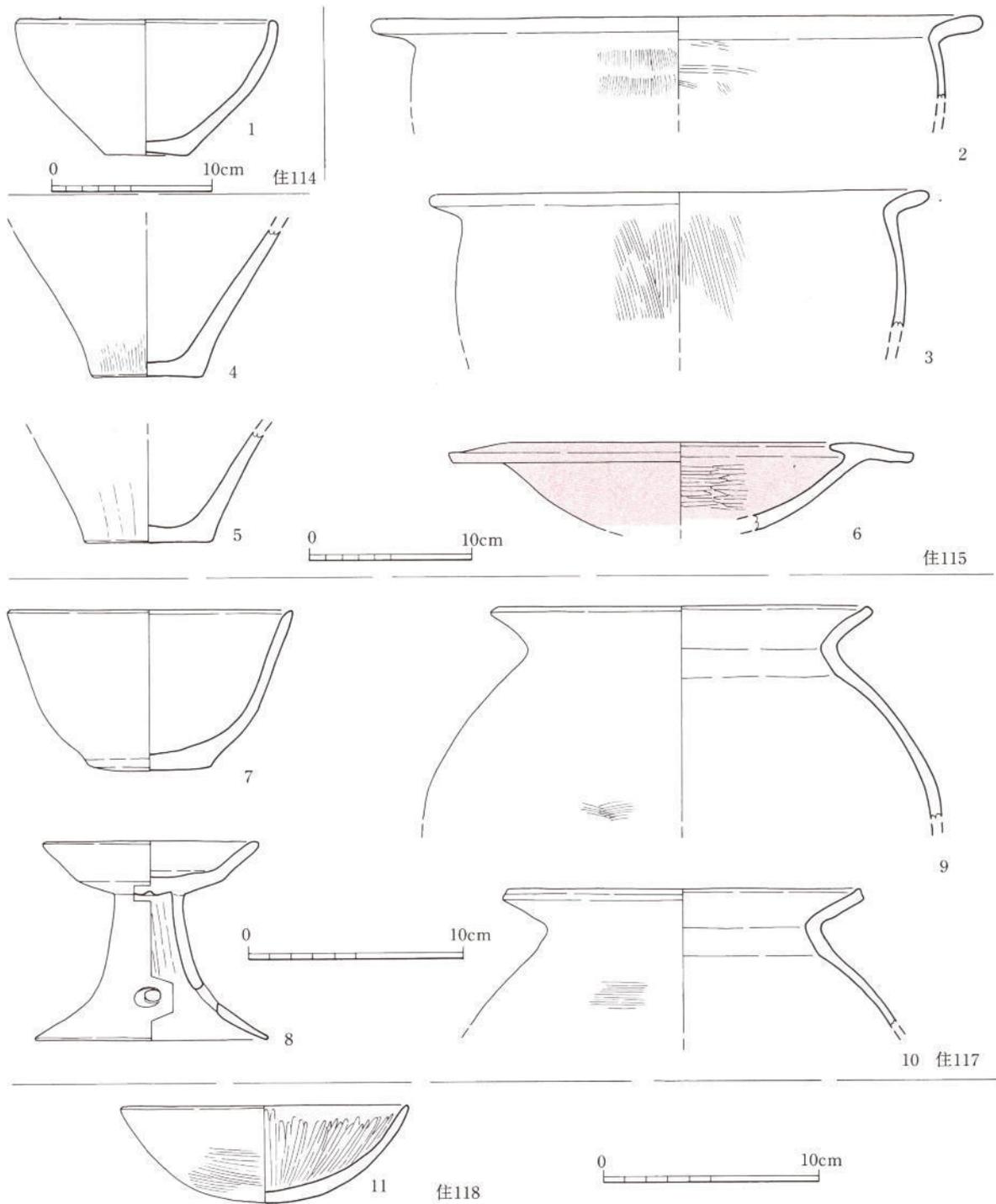
甕 (2~5) 2~4はNo.1の位置で出土した。2・3いずれも口縁端部を丸く仕上げる。2の内面は粗いハケメ。3の外表面には煤が付着している。5の外表面は板状工具によるナデ。底部付近に黒斑あり。



第5図 114～116・118・119号堅穴住居跡実測図 (1/60)

高坏 (6) No2の位置で出土した。鋤先口縁を呈する。内外面ミガキ調整の後に丹塗りを施す。
116号堅穴住居跡 (図版6-3、第5図)

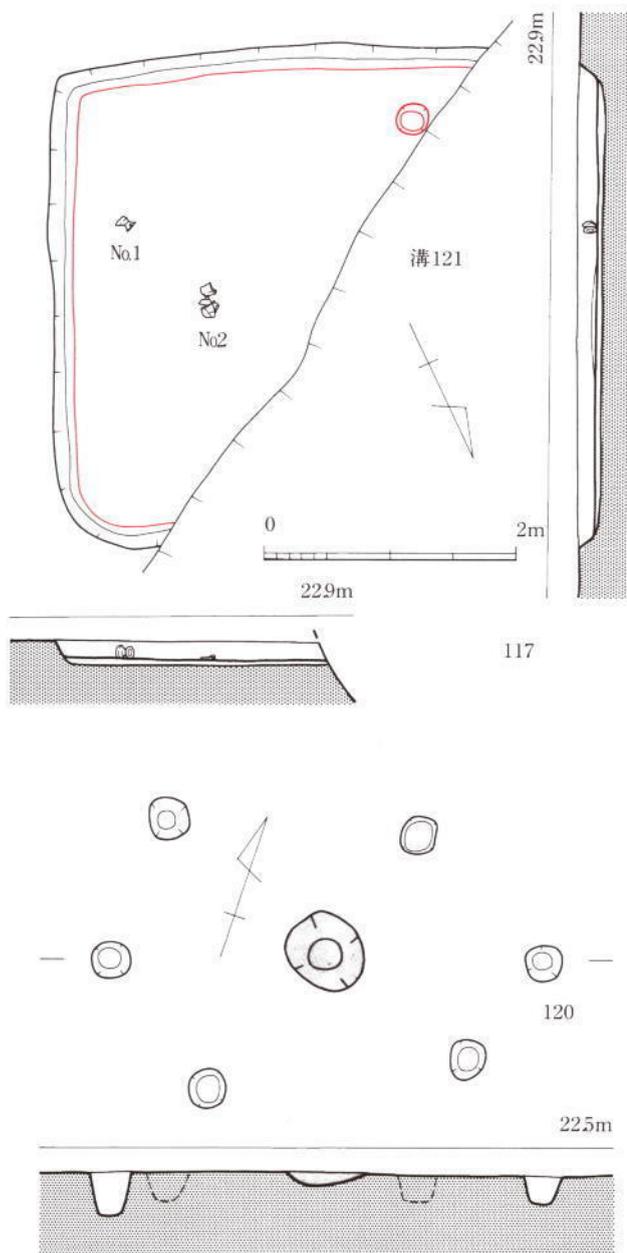
調査区の東側で検出した。119号住居と重複し、これより新しい。平面プランは東西2.5m×南北2.7mの正方形プランを呈する。壁の深さは5cm程である。北壁付近に焼土ピットが存在するが調査区外へ延びており、カマド等の有無は不明である。床面においていくつかのピットを検出しているが、支柱穴は不明である。床面は全体に一段掘り下げられている。遺物は出土していない。



第6図 114・115・117・118号住居出土器実測図 (1/3・1/4)

117号竪穴住居跡 (図版7-1、第7図)

調査区の東側で検出した。平面プランは東西35m + a、南北38mの方形プランを呈すると思われる。礫層を掘り込んでおり、壁の深さは約15cmである。炉や主柱穴等は一切検出されなかった。床面下層は全体に5センチ程度掘り込まれている。遺物は床面直上で器台(8)他が出土している。



第7図 117・120号竪穴住居跡実測図 (1/60)

浅い。床面で柱穴等は確認できなかった。床面下層は全体を平坦に僅かに掘り込んでいる。遺物は出土していない。

120号竪穴住居跡 (図版7-3、第7図)

調査区の東側で検出した。大きく削平されており、中央の炉とそれを取り囲む6本の支柱穴のみが検出された。円形のプランを呈するものか。中心の炉は径60cm程の略円形で、深さ10cm程である。内面は焼成により赤変し、炭化物が堆積していた。柱穴は東西約15mの距離を2本、その他の柱穴とともに炉を楕円形に囲むように配される。遺物は出土していない。

121号竪穴住居跡 (図版8、第8図)

調査区の西側で検出した。平面プランは東西39m、南北42mの不整な方形を呈する。北辺

出土遺物 (図版31、第6図)

土師器

椀 (7) 底部がやや膨らみ、胴部から口縁にかけ直線的に広がる。見込みに黒斑あり。

器台 (8) No1の位置から出土した。脚部内面には絞り痕が残り、4箇所円形の透かしを開ける。

甕 (9・10) 9はNo2から出土した。いづれも布留系の甕である。口縁端部をわずかにつまみあげる。

118号竪穴住居跡 (図版7-2、第6図)

調査区の東側で検出した。平面プランは東西2.8m、南北1.7m + aである調査区外へ延びる。壁の深さは約20cmで部分的に壁小溝がめぐる。床面で柱穴等は検出できなかった。床面下層は全体に20cm程掘り込む。遺物は古墳前期の椀 (11) が床面からやや浮いた状態で天地を逆にして出土している。

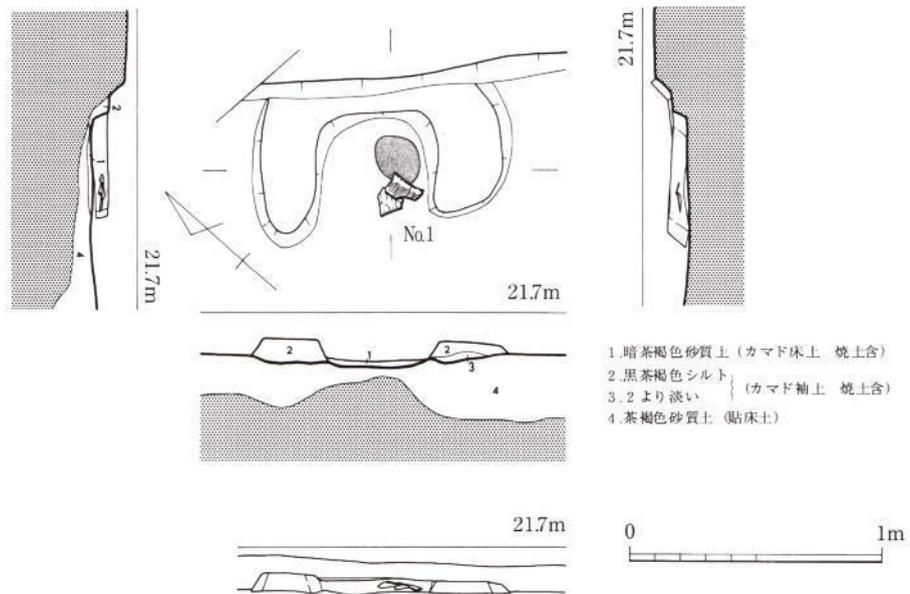
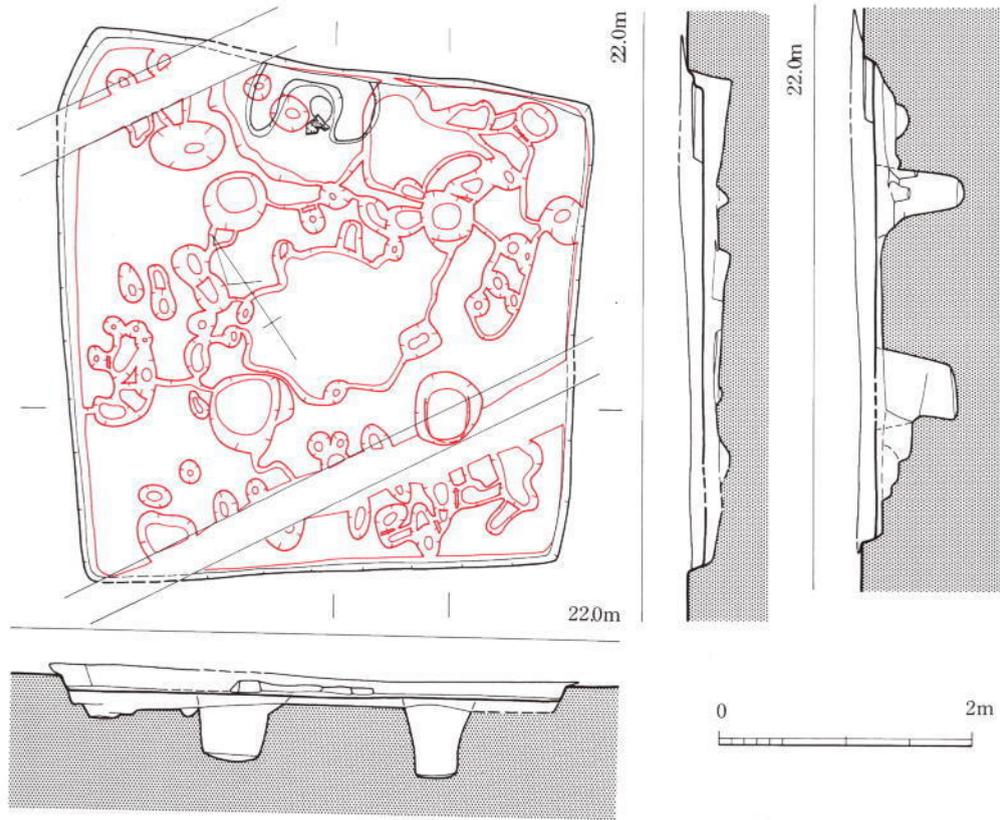
出土遺物 (第6図)

土師器

椀 (11) No1の位置で出土した。外面はハケメの後、ナデ調整を施す。内面は縦方向のミガキを行う。

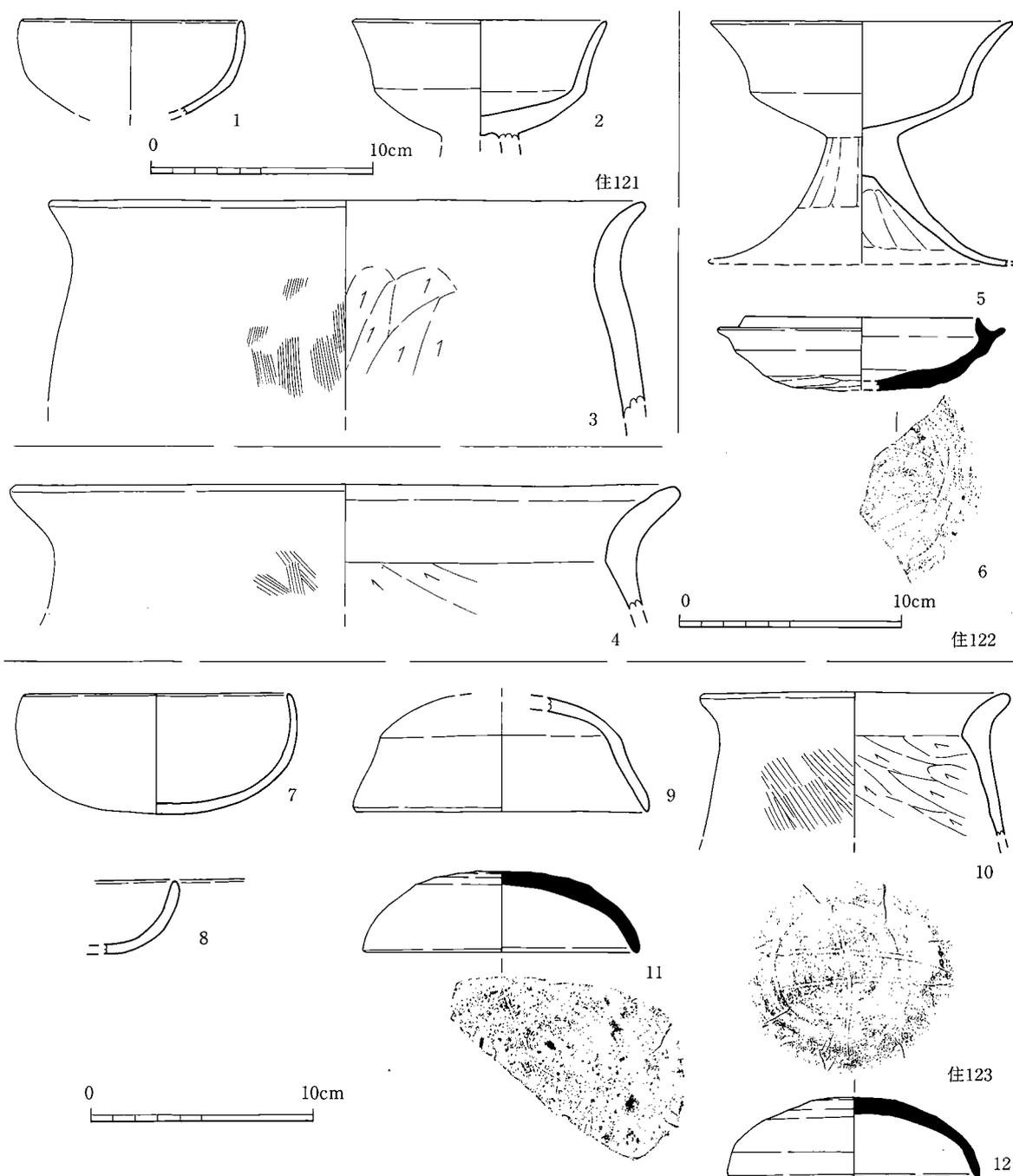
119号竪穴住居跡 (図版6-3、第5図)

調査区の東側で検出した。116号住居と重複し、これより古い。平面プランは東西0.9m + a、南北1.8m + aで、やや隅丸気味のコーナーをもつ。壁は5cm程と



第8図 121号堅穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

中央にカマドを付設する。壁の深さは20cm程である。現代の耕作用の溝に切られており、その断面により床面を確認した。この床面において柱痕を検出することはできなかった。また、カマド対面土坑等の施設も無い。床面の下層は複雑に掘り込まれており、この段階で、4本の支柱穴を検出できた。何れも直径40cm、深さ50cm程度である。柱痕は確認できなかった。遺物は土師器が



第9図 121～123号住居出土土器実測図 (1/3)

出土している。

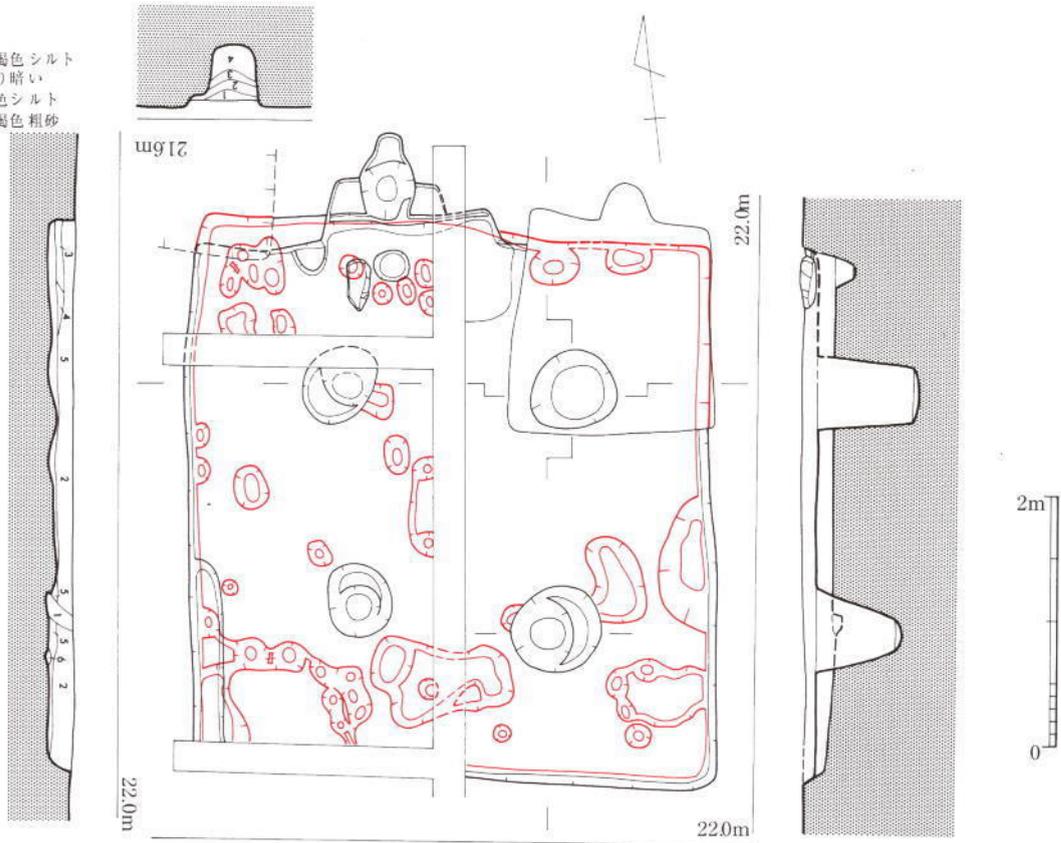
121号住居カマド

北辺中央に付設するカマドで、貼床の上から黒茶褐色シルトにより構築される。支脚等の痕跡は検出できなかった。内部には被熱により赤変し、炭化物が溜まる。内部から土師器甕 (3) が検出されている。

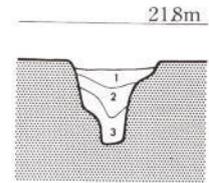
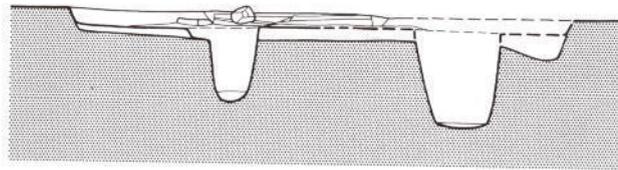
出土遺物 (第9図)

土師器

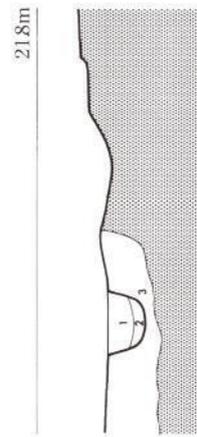
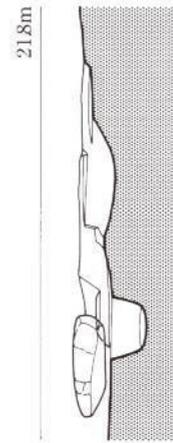
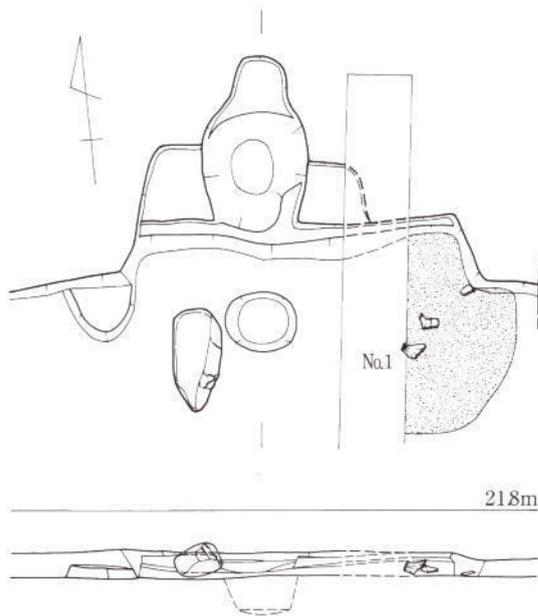
- 1. 暗茶褐色シルト
- 2. 1より暗い
- 3. 暗褐色シルト
- 4. 暗茶褐色粗砂



- 1. カクラン
- 2. 淡黒褐色シルト
- 3. 明赤褐色シルト
(焼土ブロック)
- 4. 3より明るい
- 5. 淡黒茶褐色シルト
(貼床)
- 6. 淡灰褐色シルト



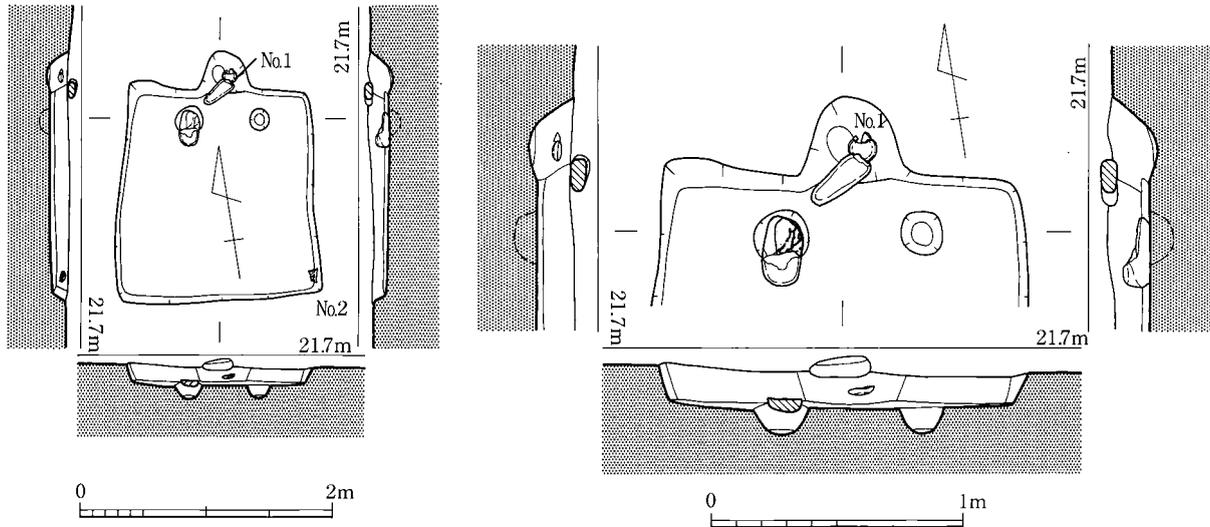
- 1 暗茶褐色シルト
- 2 1より暗い
- 3 1より暗い粗砂含む



- 1 淡暗茶褐色シルト (焼土ブロック 炭化物含む)
- 2 淡茶褐色砂質土
- 3 淡黒茶褐色シルト (貼床)



第10図 122号堅穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第11図 123号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

椀 (1) やや深めで口縁は直立する。外面はミガキ。内面はナデ調整。

高坏 (2) 口縁部はわずかに外反しながら広がるもの。内外面の調整はナデ。

甕 (3) カマド内から出土した (No.1)。胴のあまり張らない甕。頸部と胴部の境は明瞭でない。口縁部はナデ、外面はハケメ。内面は縦方向のケズリを施す。

122号竪穴住居跡 (図版9、第10図)

調査区の西側で検出した。123号住居と重複し、これより古い。平面プランは東西4.1m、南北4.3mのはほぼ正方形を呈する。北辺中央にカマドを付設する。壁の深さは10cm程である。現在の農耕用の溝に切られており、その断面により貼床の床面を確認した。貼床面では4本の支柱穴を検出した。直径40~50cm、貼床面から50~60cm程度掘り込まれている。柱痕は確認できなかった。床面の下層は全体を約5cm程度、周囲をやや深めに掘っている。遺物は土師器と須恵器が出土している。

122号住居カマド

北辺中央に付設するカマドで外側に約0.9m突出する。左袖は僅かに検出できたが、右袖は耕作用溝に切られる。カマド右端には炭化物の堆積層があり、カマドの灰を掻き出したものであろうか。支脚の抜き痕を確認している。その右脇には長めの川原石が検出されており、支脚に使用されていた可能性もある。遺物は高坏脚部 (5) がカマド右端から出土している。

出土遺物 (図版31、第9図)

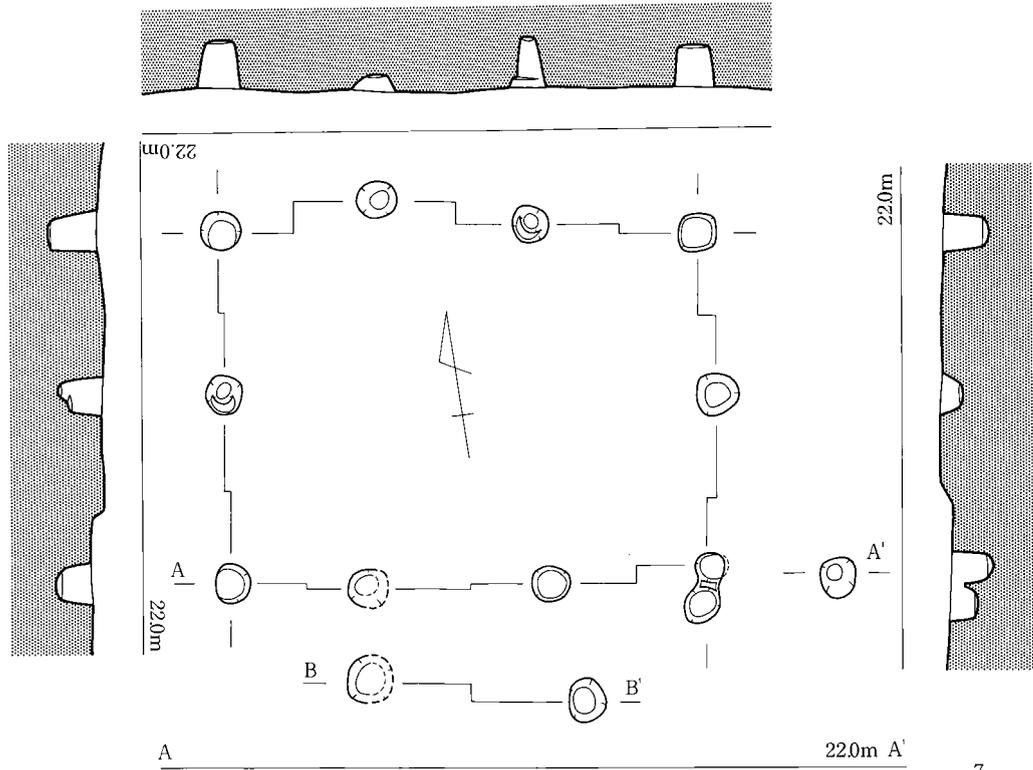
土師器

甕 (4) 口縁がやや開くの甕。口縁部はナデ、外面はハケメ。内面は縦方向のケズリ。胎土は2~3mmの砂粒を含み粗い。

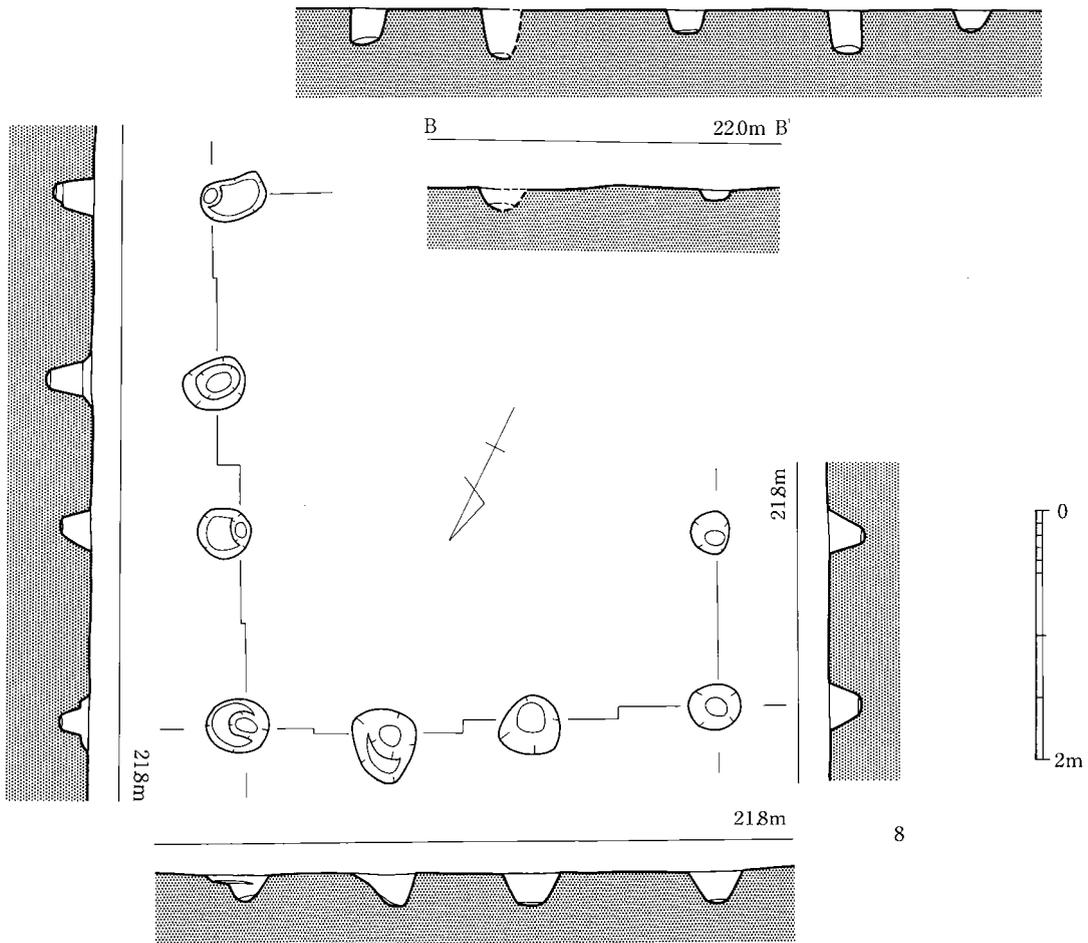
高坏 (5) カマドのNo.1から出土した。坏部は口縁が外反しながら大きく開く。脚部も大きく広がり内外面ケズリによる調整を行う。胎土は密である。

須恵器

坏身 (6) 床面下層から出土した。立ち上がりは小さく、内傾する。外面底部は手持ちヘラケズリを行い、ヘラ記号がある。受部の痕跡から蓋と合口で焼成されたことがわかる。



7



8

第12图 7·8号掘立柱建物实测图 (1/60)

123号竪穴住居跡（図版9・10、第11図）

調査区の西側で検出した。122号住居と重複し、これより新しい。平面プランは東西1.5m、南北1.6mの正方形を呈する。北辺中央部にカマドが付設される。主柱穴は検出できなかった。床面下層の掘り込みはない。遺物は土師器と須恵器が出土している。

123号住居カマド

北側中央に付設される。30cm程掘り込まれる。袖は検出できなかったが、ピット2基を検出しており、袖石の抜き痕と考えられる。また、カマドから袖に用いられたと思われる被熱した川原石2個検出した。住居廃絶時にカマドを壊したものであろうか。また、カマド内から坏蓋が出土している。

出土遺物（図版31、第9図）

土師器

椀（7・8）口縁がやや内湾するものである。7の外面の調整はミガキ、内面はナデである。

坏（9）口縁が大きく開くもの。内外面の調整はナデ。胎土は密である。

甕（10）No.2の位置で出土した。小形の甕。外面は粗いハケメ。内面は斜めのケズリを行う。胎土は1～2mmの砂粒を含む。

須恵器

坏蓋（11・12）11はカマド内から出土した。内面に「×」のヘラ記号を施す。12はNo.1の位置で出土した。外面天井部にヘラ記号を施す。

3. 掘立柱建物

7号掘立柱建物（図版10-2、第12図）

調査区西側で検出した2間×3間の東西棟建物である。主軸方位は北に対して5° 東を向く。柱間は1.3m間隔で柱穴掘り方は30cm程度の円形である。南側に2基、東側に1基の建物に付随するであろうピットを検出している。いずれも柱痕は検出できなかった。遺物は出土していないが、埋土が121～123号竪穴住居跡のものと同様であることから、それに近い時期であると考えられる。

8号掘立柱建物（図版10-3、第12図）

調査区西側で検出した2間×3間+ a の南北棟建物で、調査区外へ延びる。主軸方位は北に対して25° 東を向く。柱間は1.3～1.5mと一定しない。柱穴掘り方は30～50cmの円形である。いずれも柱痕は検出できなかった。遺物は出土していないが、埋土が121～123号竪穴住居跡のものと同様であることから、それに近い時期であると考えられる。

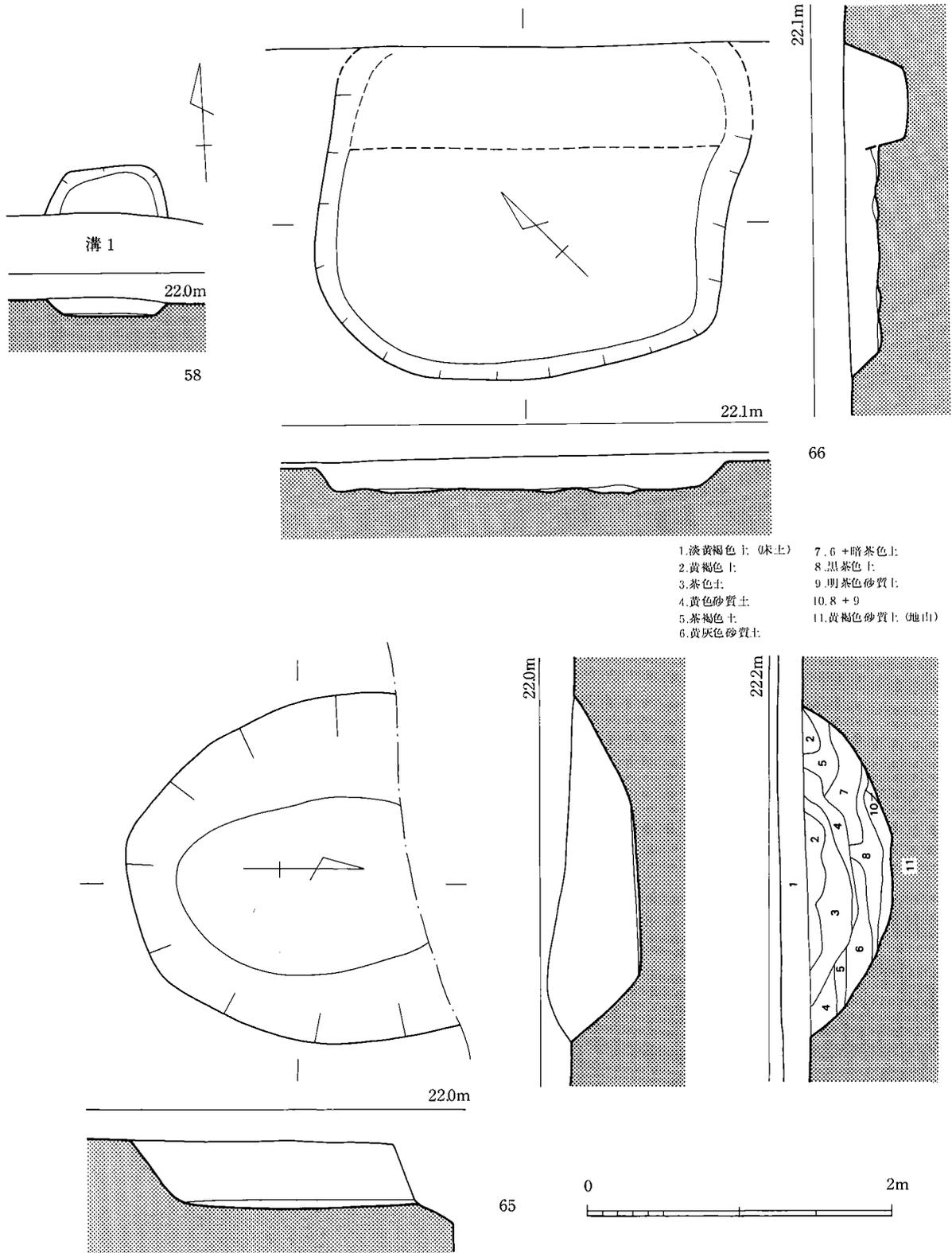
4. 土坑

58号土坑（第13図）

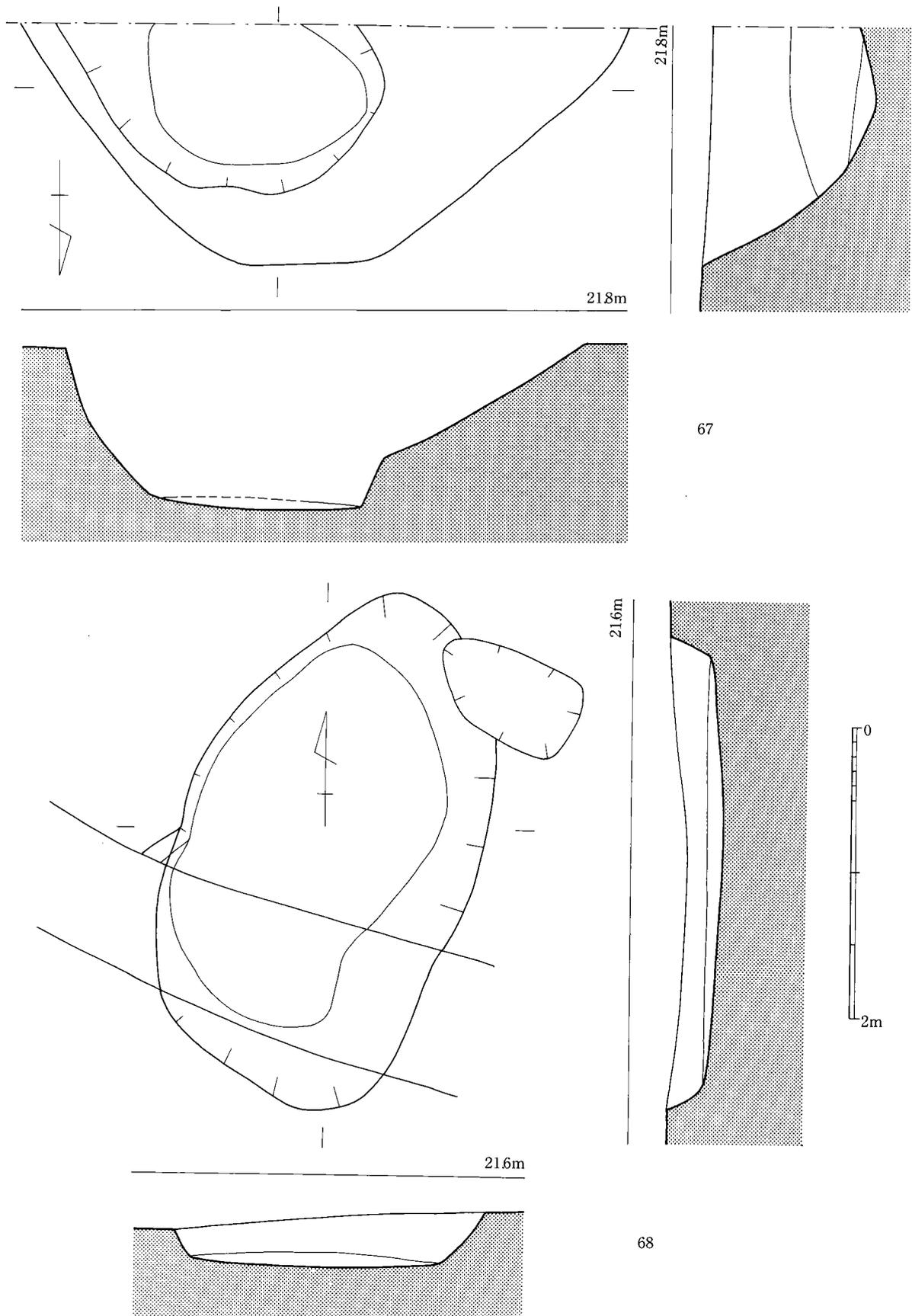
調査区第一遺構面の東よりで検出した。72号溝と重複し、これより古い。深さ0.1mで、隅丸方形になると思われる。埋土中位から土師器が出土した他、鉄鏝が出土している。

出土遺物

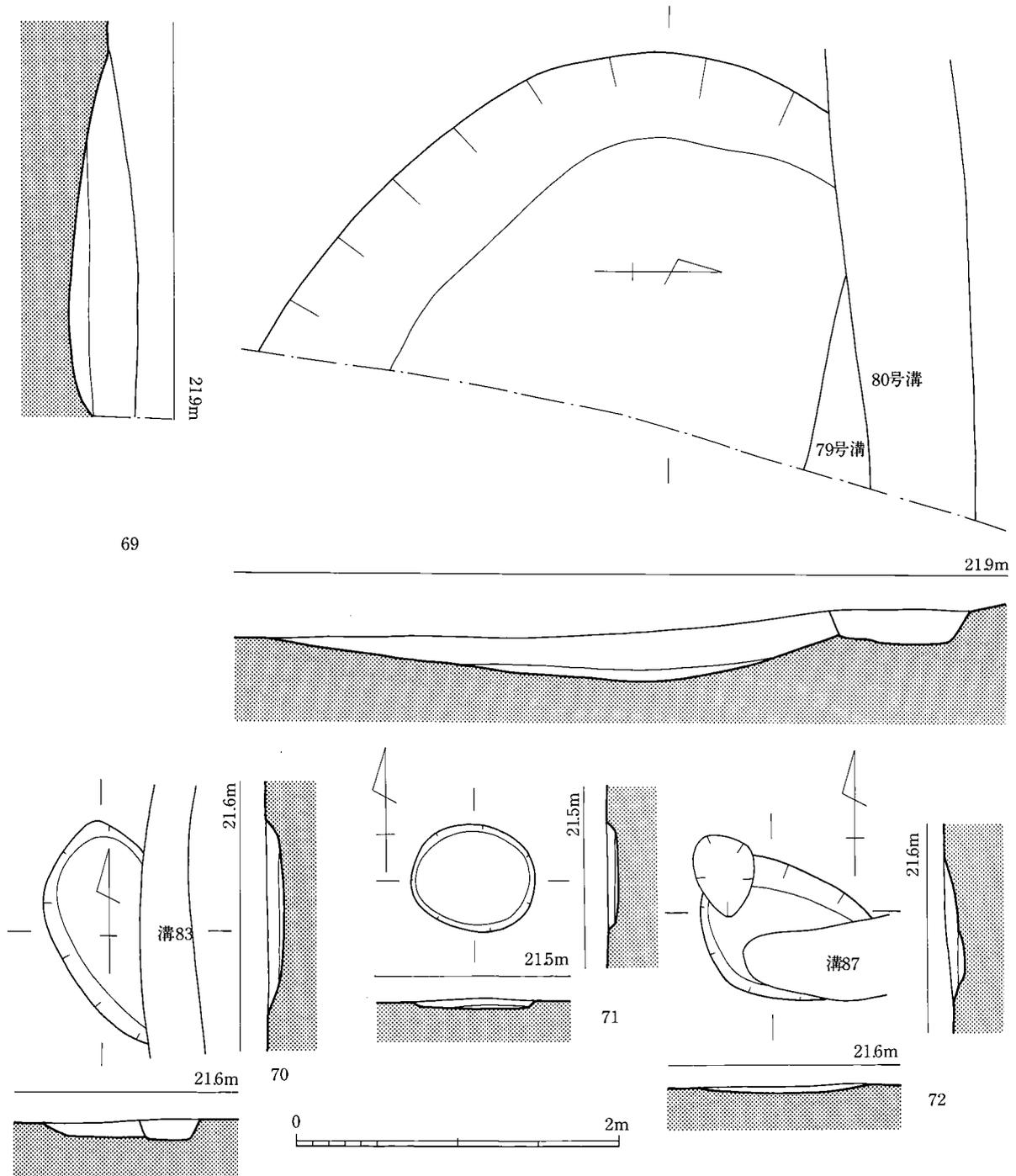
土師器（第17図）



第13图 58·65·66号土坑实测图 (1/40)



第14图 67·68号土坑实测图 (1/40)



第15図 69～72号土坑実測図 (1/40)

甕 (7) くのとに屈曲する口縁部小片で、復元口径18.4cmを測る。内面中位に稜が付き、これ以下はケズリ、他はナデ調整し、端部を玉縁状に丸く作る。暗茶灰色を呈する。

鉄製品 (図版35、第46図)

鉄鏃 (5) 篋被部から茎にかけての破片である。銹化が激しく本来の形状は不明である。中央部やや下位に沓巻らしい痕跡がある。

65号土坑 (図版11-1、第13図)

調査区第一遺構面の東よりで検出した。調査区外に延びるため全容は不明である。残存長軸長

18m、短軸長2.3m、深さ0.6mで楕円形になると思われる。底部はレンズ状で下端も明瞭でない。自然堆積である。遺物は小片のため図示できない。

66号土坑（図版11-2、第13図）

調査区第一遺構面の東よりで検出した。75号溝と重複し、これより新しい。長軸長25m、短軸長22m、深さ0.15mの隅丸長方形のプランを呈し、底部は平坦面に断面レンズ状の浅い窪みが多い数あるような状態で、凹凸が激しい。埋土は暗茶色土の単一層で遺物は出土していない。

67号土坑（第14図）

調査区第一遺構面の東よりで検出した。77号溝と重複し、これより古い。調査区外に広がるため全容は不明である。残存長軸長4.2mの楕円形で段掘りになる。最深部が1.2m前後になると思われる。遺物は小片のため図示できる物はない。自然堆積と思われる。

68号土坑（第14図）

調査区第一遺構面の東よりで検出した。73号溝と重複し、78号溝より古く、73号溝より新しい。長軸長3.6m、短軸長2.0m程の楕円形になり、深さ0.35mである。遺物は小片のため図示できる物はない。

69号土坑（第15図）

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。79・80号溝と重複し、これらより古い。立ち上がりの緩やかである。残存長軸長3.7m、短軸長2.4m、深さは最深で0.25mである。埋土は黒茶色粘質土の単一層で遺物を含まない。土坑というよりは溜まり状の遺構と思われる。

70号土坑（第15図）

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。83号溝と重複し、これより古い。残存長軸長1.4m、深さ8cmである。埋土は暗茶色土で出土遺物はない。

71号土坑（第15図）

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。90号溝と重複し、これより新しい。直径0.7m、深さ4cmのほぼ円形プランを呈する。出土遺物はない。

72号土坑（第15図）

調査区北寄りに位置する土坑で、87号溝とピットに切られるため全体のプランは不明である。深さは0.1mである。出土遺物はない。

73号土坑（図版11-3、第16図）

調査区第二遺構面の東端部で検出した。東西1.1m、南北1.0mの楕円形を呈する。深さは約20cmで浮いた状態で弥生土器がまとまって投棄された状態で出土している。

出土遺物（図版31、第17図）

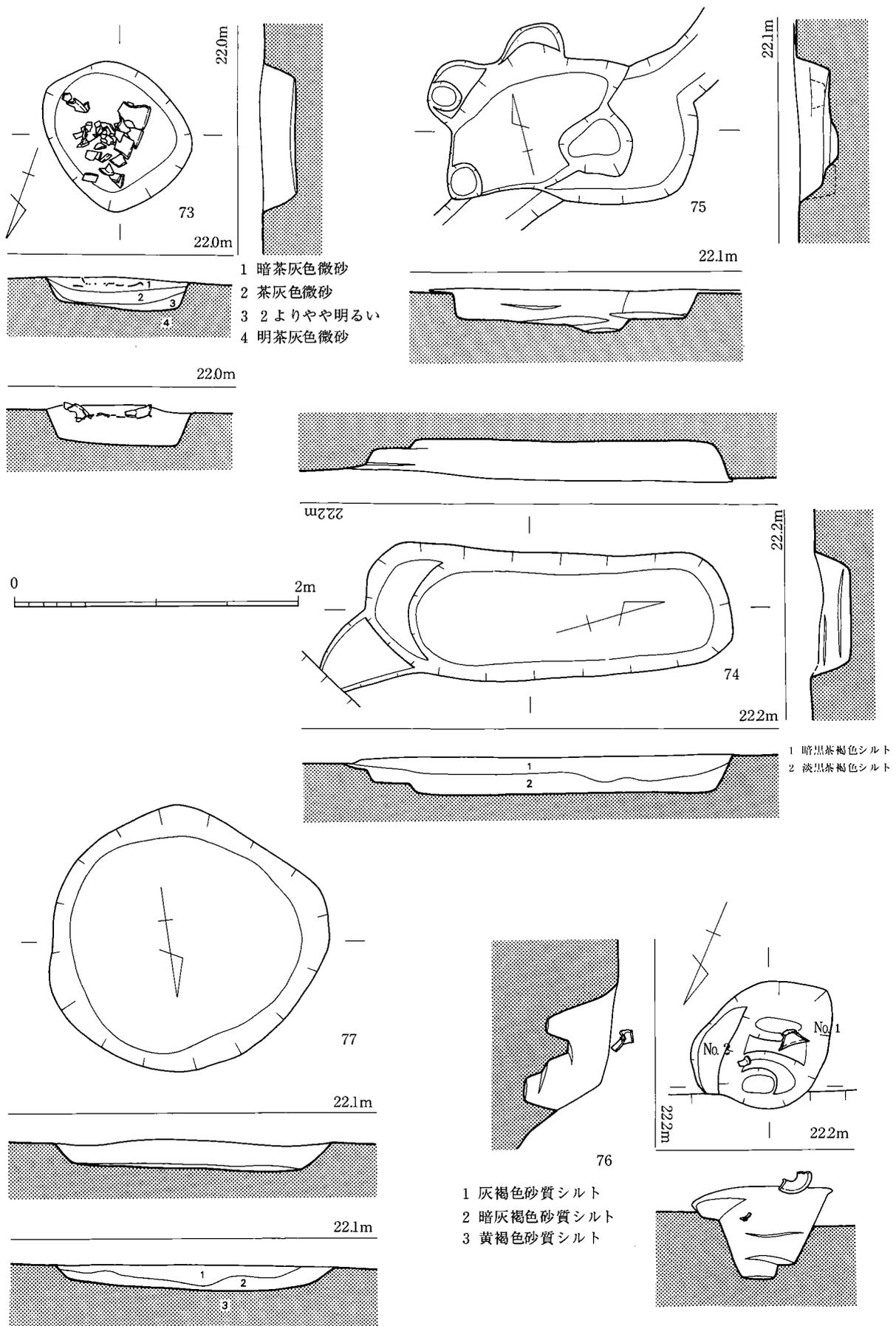
弥生土器

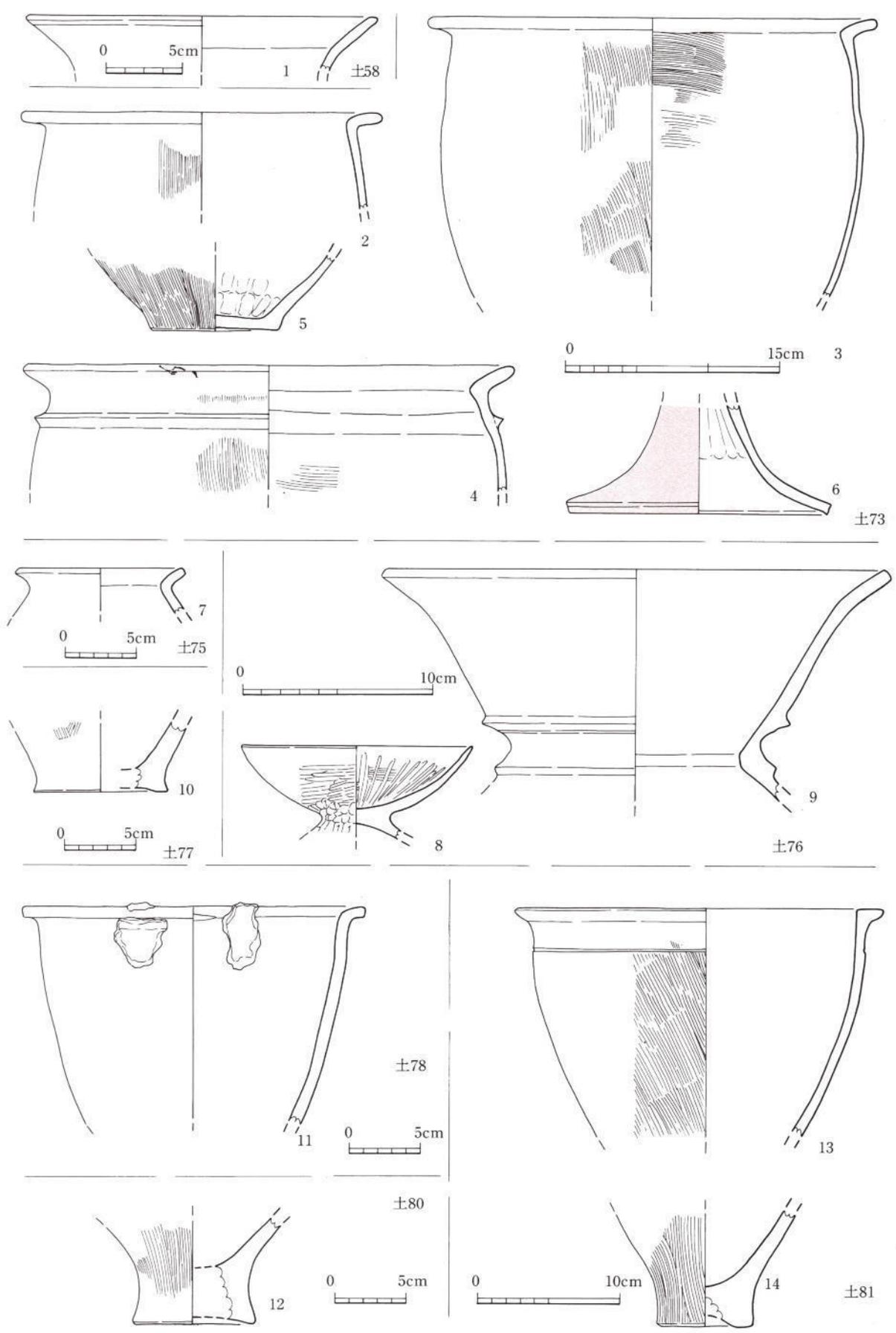
甕（2～5）2は小形の甕で外面の調整はハケメである。3は内外面ハケメ調整。4の外面はハケメ調整の後、肩部に三角突帯を貼り付けるもので、内面には貼り付け時の膨らみが見られる。内面には横方向のハケメが残る。5は胴部の張る甕の底部で内面に指頭圧痕が強く残る。

高坏（6）小形の高坏の脚部である。脚端部はつまむ様に仕上げる。外面はナデ調整の後、丹塗を施す。内面は絞り痕が残り、端部付近一部に丹が付着している。

74号土坑（図版12-1、第16図）

調査区第二遺構面の東側で検出した。96・109号溝と重複し、109号溝より新しく96号溝より古





第17图 58·73·75~78·80·81号土坑出土土器实测图 (1/3·1/4)

い。東西0.9m、南北3.0mである。深さは0.25mで南側で2段、段が付き次第に高くなっている。埋土はレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

75号土坑 (図版12-2、第16図)

調査区の第二遺構面東端部で検出した。102号溝と重複しこれより古い。東西1.7m、南北1.2mの不整形を呈する。深さは0.3m。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物 (第16図)

弥生土器

甕 (7) 口縁が「く」字になる小形の甕である。内外面はナデ調整。

76号土坑 (図版12-3、第16図)

調査区の第二遺構面東側で検出した。125号溝と重複し、これより古い。東西0.9m、南北1.0mの楕円形を呈する。中央部がテラス状に高くなる。かなり浮いた状態で鼓形器台 (9) が出土している他、その下層から高坏 (8) が出土している。

出土遺物 (図版31、第17図)

土師器

高坏 (8) No.2の位置で出土した。球形の坏部に短い脚が付くもの。口縁部はナデ調整。坏部外面はミガキ。坏部と脚部の境は細かい単位でケズリを行う。内面はハケメの後、縦方向のミガキを疎らに行っている。胎土は密で、焼成は良好である。

鼓形器台 (9) No.1の位置で出土した。外面はナデ、上部内面はケズリの後ナデを行う。下部内面はケズリ調整である。

77号土坑 (図版13-1、第16図)

調査区の第一遺構面中央やや東よりで検出した。東西2.0m、南北2.0mの略円形を呈する。深さは約0.2mで埋土はレンズ状の堆積である。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物 (第17図)

弥生土器

甕 (10) やや上底気味の底部で。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。

78号土坑 (図版13-2、第18図)

調査区の第一遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.4m、南北1.4mの円形を呈する。深さは約0.25mで埋土はレンズ状の堆積である。中位で土器がまとまって出土している。遺物は弥生土器・安山岩スクレイパー (32) が出土している。

出土遺物 (図版31、第17図)

弥生土器

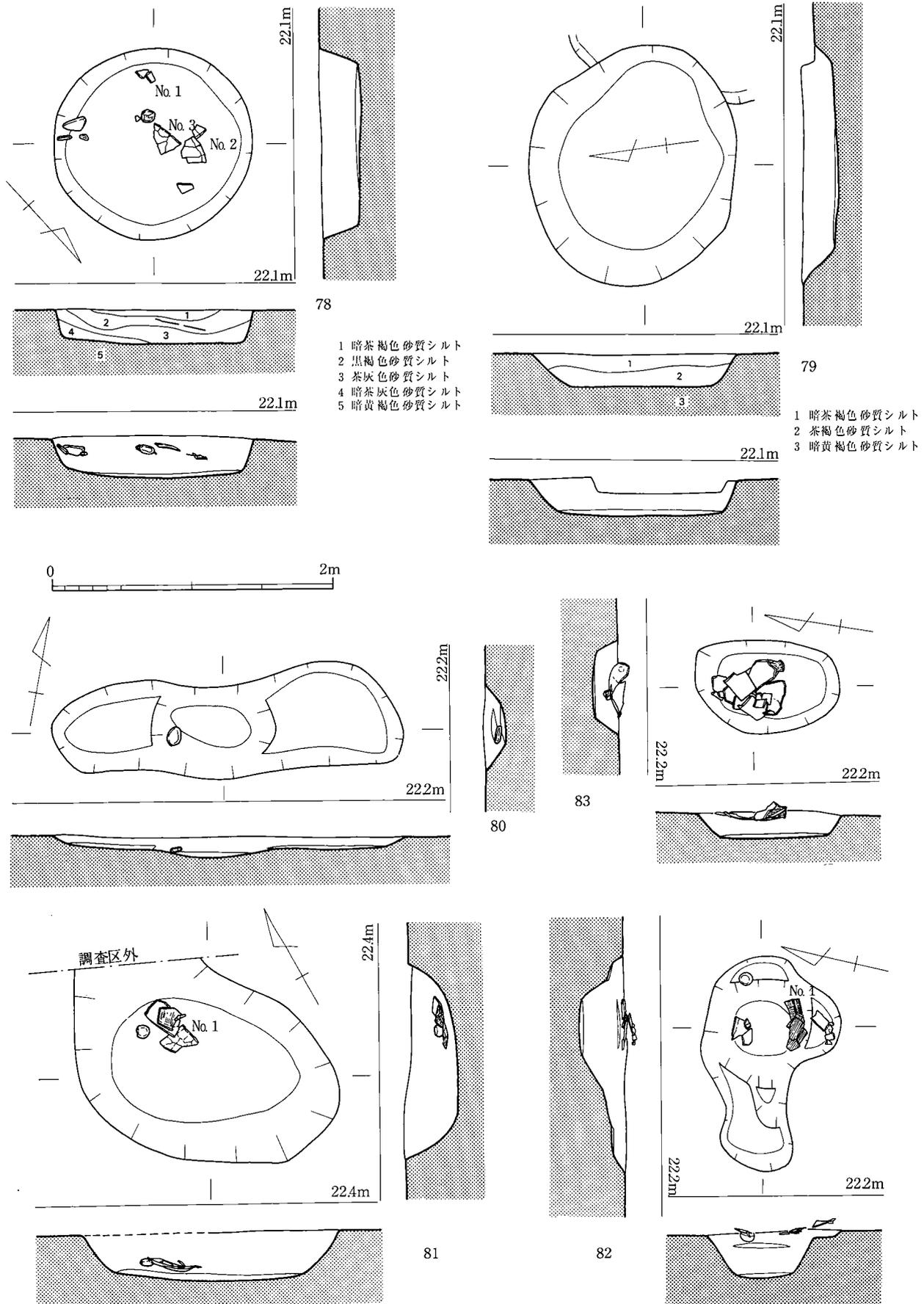
甕 (11) 11は口縁部を角張って仕上げるもので、口縁を強く外側に外反させる。内外面の調整はナデで焼成前のヒビを補修するために口縁に内外面から厚く粘土を貼り付けている。

79号土坑 (図版13-3、第18図)

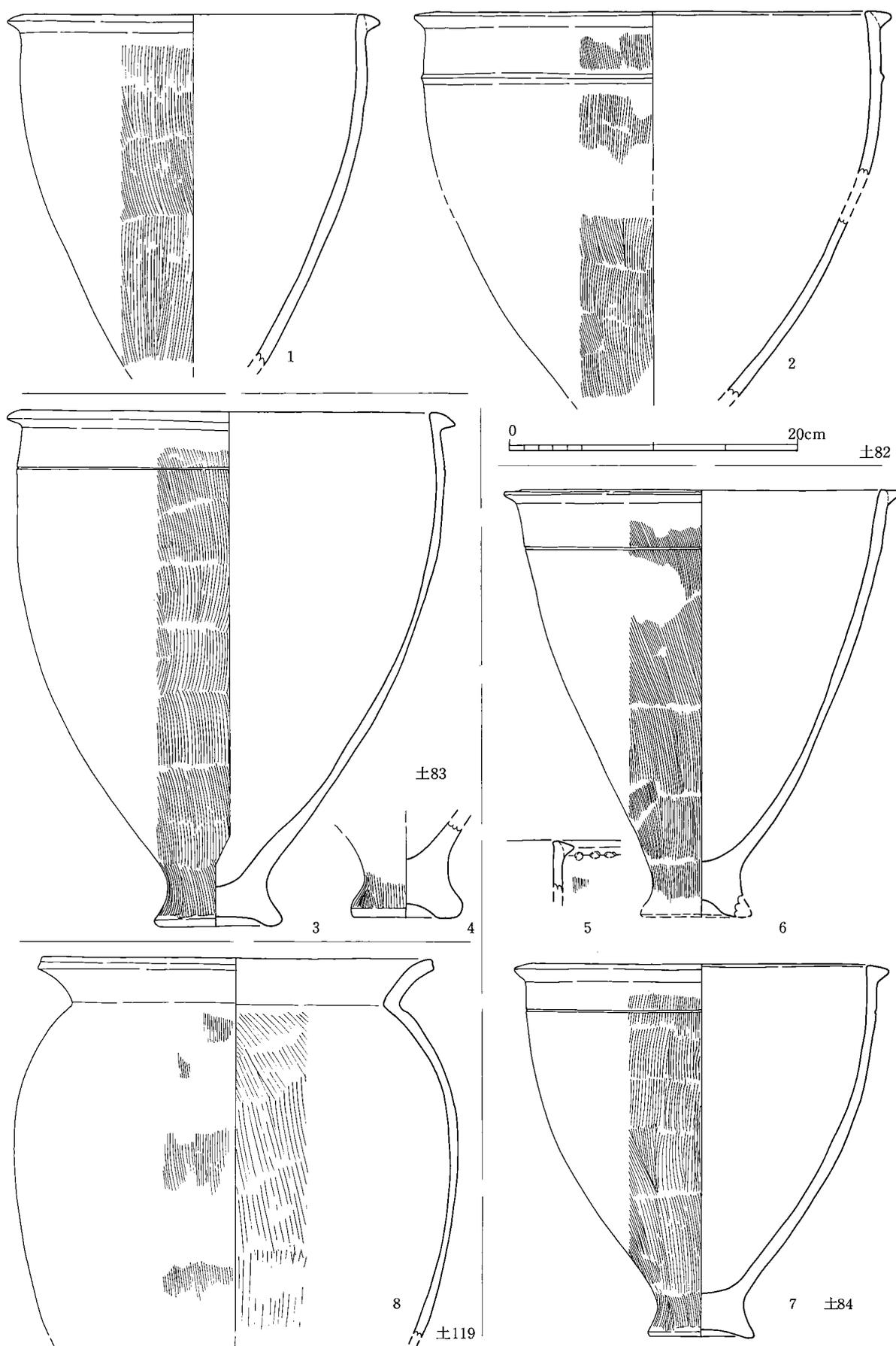
調査区の第一遺構面中央やや東よりで検出した。143号溝と重複し、これより古い。東西1.7m、南北1.5mの楕円形を呈し、深さは0.25mである。遺物は出土していない。

80号土坑 (図版14-1、第18図)

調査区の第一遺構面中央やや東よりで検出した。東西2.5m、南北0.7mの長楕円形を呈する。深さは0.2mで東西が一段浅くテラス状になる。遺物は弥生土器が出土している。



第18図 78～83号土坑実測図 (1/40)



第19图 82~84·119号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土遺物（第17図）

弥生土器

甕（12）やや上底気味でわずかにくびれる底部である。外面の調整はハケメの後、底付近はナデ調整。内面の調整はナデである。胎土に1～3mmの砂粒を含む。

81号土坑（図版14-2、第18図）

調査区の第一遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.8m、南北1.5mで一部調査区外へ延びる。遺物は埋土中位から弥生土器（13）が出土している。

出土遺物（図版31、第17図）

弥生土器

甕（13・14）13はNo.1の位置で出土した。三角突帯を貼り付けるものであるが、口縁部上端面を水平に仕上げている。外面の調整はハケメで、一条の沈線を描く。煤が付着する。内面の調整はナデである。胎土は1～3mmの砂粒を含む。14は上底の底部。

82号土坑（図版14-3、第18図）

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.5m、南北1.0mの不整形を呈し、深さは0.3mで周囲は段が付き高くなっている。遺物は浮いた状態で甕（1）が出土している。

出土遺物（図版31、第19図）

弥生土器

甕（1・2）1はNo.1の位置で出土した。外面はハケメ調整で、口縁に三角突帯を貼り付け、その部分は横ナデ。内面の調整はナデである。2も三角突帯を口縁に貼り付けるが、口縁上端面を水平に仕上げている。胴部最大径の部分にも小さな三角突帯を貼り付ける。内面には突帯貼り付け時の膨らみが残る。

83号土坑（図版15-1、第18図）

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西0.7m、南北1.0mの楕円形を呈し、深さは0.2mである。かなり浮いた状態で甕がまとまって出土している。

出土遺物（図版32、第19図）

弥生土器

甕（3・4）3は口縁に三角突帯の甕である。外面の調整はハケメで、その後、横ナデにより突帯を貼り付けている。口縁下胴部最大径に一条の沈線をめぐらす。底部はやや上底である。内面はナデ調整であるが、底部付近に炭化物が付着している。4は3と同様の器形になると考えられる底部。

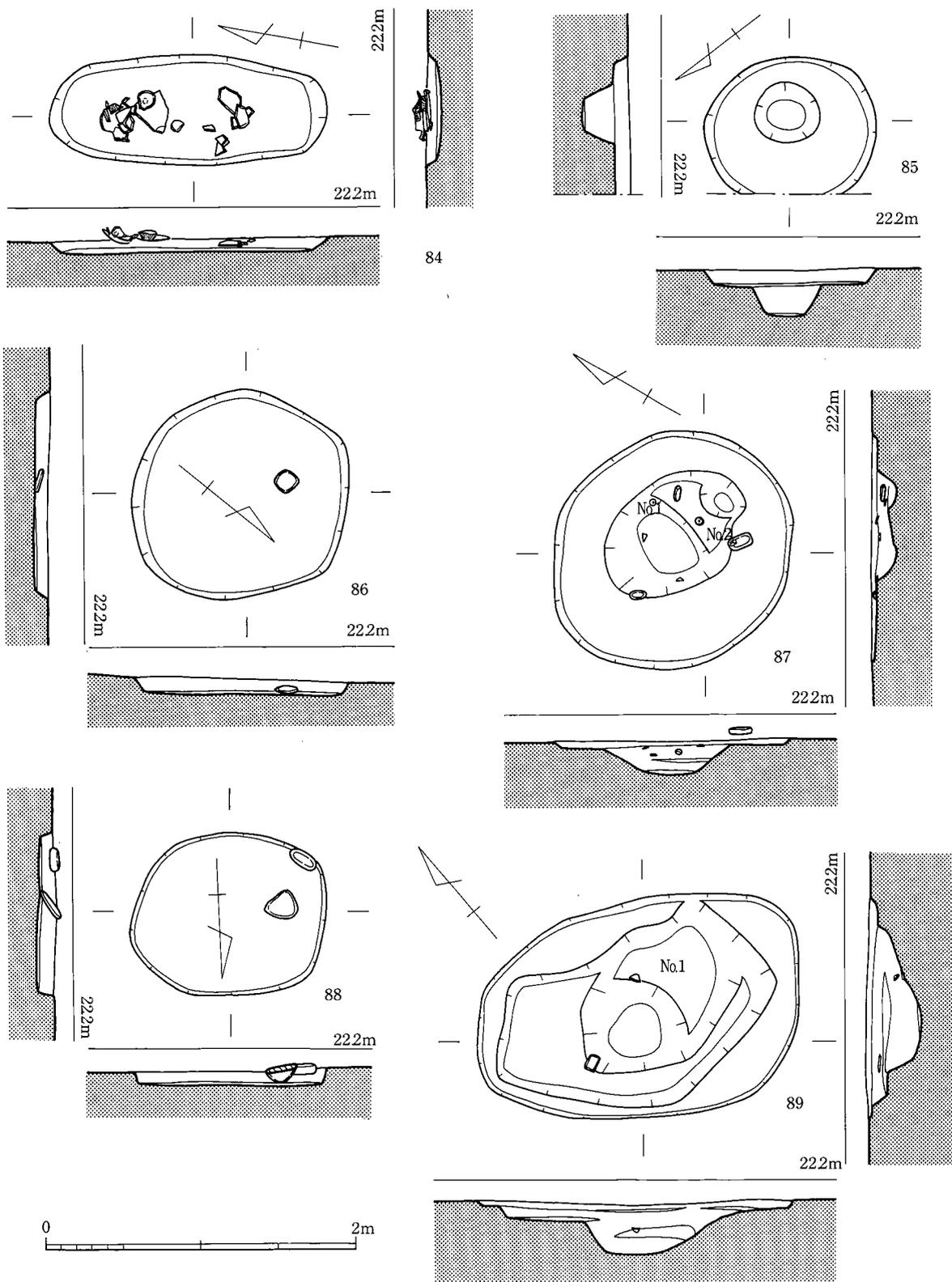
84号土坑（図版15-1、第20図）

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西0.7m、南北1.8mの長楕円で深さ0.1mである。床面から浮いた状態で甕がまとまって出土している他、石庖丁（3）・黒曜石剥片（42）が出土している。

出土遺物（図版32、第19図）

弥生土器

甕（5～7）5は三角突帯をもつ甕の口縁部。三角突帯下部に貼り付け時の指頭圧痕が残る。6も三角突帯を持つ甕の口縁であるが、口縁上端面を水平に仕上げる。胴部はほぼ直線的に広がる。口縁下に一条の沈線をめぐらす。この沈線下から胴部中位にかけて煤が付着している。底部は一



第20図 84~89号土坑実測図 (1/40)

部欠失しているが上底である。内面底部付近に炭化物が付着する。7も三角突帯の甕であるが、6よりややすぼまる器形である。外面胴部中位に煤が付着する。胎土は5mm程の砂粒を含み粗い。

85号土坑 (第20図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.0m、南北1.1mの楕円形で深さは0.1m、中心をピット状に一段深く掘り込む。遺物は弥生土器が出土しているが図化できない細片である。

86号土坑 (図版15-2、第20図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.4m、南北1.4mの略円形である。深さは0.1mで平坦に掘り込まれる。出土遺物はない。

87号土坑 (図版15-3、第20図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.6m、南北1.5mの略楕円形で5cm程掘り込まれる。中央はピット状に掘り込まれる。中央ピット内からは石製紡錘車(16・17)2個が出土している他、弥生土器の細片が出土している。

88号土坑 (図版16-1、第20図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.2m、南北1.0mの楕円形を呈する。深さは0.1mである。出土遺物はない。

89号土坑 (図版16-2、第20図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西2.1m、南北1.4mの楕円形で、中心に向かい段を付け掘り込む。埋土中位から甕(3)が出土している他、安山岩製石鏃2点(27・29)・安山岩石核(42)が出土している。

出土遺物 (第21図)

弥生土器

甕(1~5) 1は口縁をわずかに外反させる甕。素口縁で、外端部に細かい刻目を施す。ない外面ともにナデ調整で、内面には口縁外反時の指頭圧痕が残る。2は口縁に小さな三角突帯を貼り付け、細かい刻目を施す。内外面の調整はナデである。3はNo1の位置から出土した。甕の胴屈曲部分である。外面屈曲部に三角突帯を貼り付け、大き目の刻目を施す。内外面の調整はナデで、内面には屈曲時の圧痕が残る。4は口縁をゆるく外反させる小形の甕。調整はナデである。5も甕の口縁部か。

壺(6) 口縁部分。口縁は外反させ、端部はわずかながら厚くしている。内外面の調整は横方向の密なミガキで、全面に丹塗が施される。

90号土坑 (第22図)

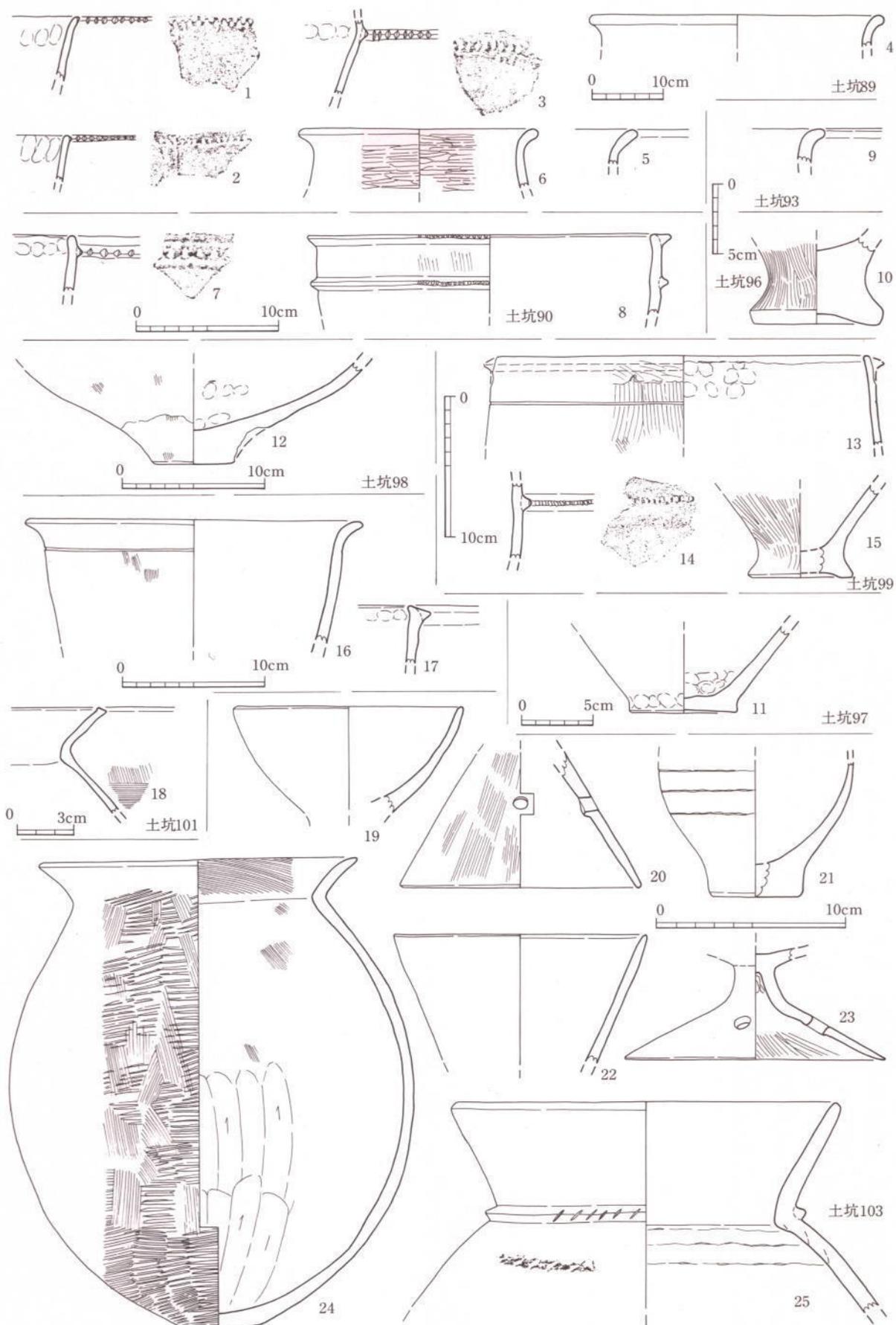
調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西2.1m、南北1.7mの略楕円形を呈する。深さは0.35mで北側が一段テラス状に高くなっている。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物 (第21図)

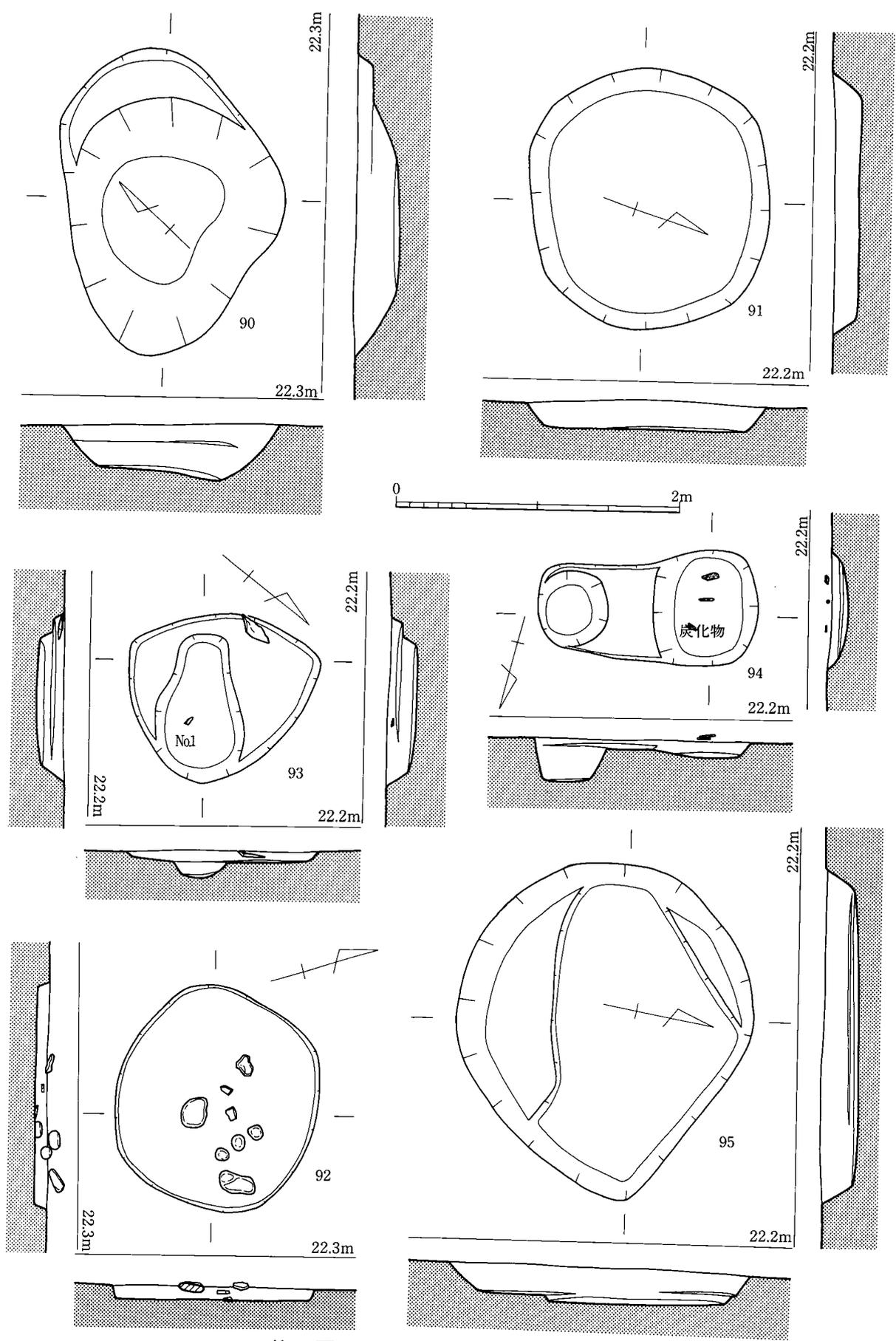
弥生土器

甕(7・8) 7は口縁端を丸く仕上げ、やや下がった位置に三角突帯を貼り付ける甕。突帯には大き目の刻目が施される。内外面の調整はナデで、内面に突帯貼り付け時の圧痕が残る。8は胴部の屈曲しない甕、口縁部に三角突帯を貼り付けるが口縁部上端面を水平に仕上げる。口縁下にもう一条、突帯を貼り付ける。いずれにも小さな刻目を施す。

91号土坑 (第22図)



第21图 89·90·93·96~99·101·103号土坑出土土器实测图 (1/3·1/4)



第22図 90~95号土坑实测图 (1/40)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西18m、南北17mの楕円形を呈する。深さは0.2mである。出土遺物はない。

92号土坑 (図版16-1、第22図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.6m、南北1.5mの楕円形を呈する。深さは0.1mである。土器は出土しなかったが、川原石が数個検出されている。

93号土坑 (第22図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.3m、南北1.2mの三角形を呈する。深さは0.2mで、周囲が一段テラス状に高くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物 (第21図)

弥生土器

甕 (9) 小片であるが甕の口縁部の可能性が高い。小さく強く外反させる。口縁端部は角張って仕上げる。内外面の調整はナデ。

94号土坑 (図版16-3、第22図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.6m、南北0.8mの楕円形を呈する。中央が高くなりその両側が深く掘り込まれる。深さは東側で0.3mである。遺物は出土していない。

95号土坑 (第22図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西2.4m、南北2.1mの略円形を呈する。深さは0.25mで南北がテラス状に一段高くなる。出土遺物はない

96号土坑 (図版17-1、第23図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.3m、南北1.5mの略楕円形を呈する。深さは0.2m。遺物は弥生土器 (10) が出土している。

出土遺物 (第21図)

弥生土器

甕 (10) No1の位置で出土した。上底の底部である。大きくくびれる。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。胎土は1~3mmの砂粒を含む。

97号土坑 (図版17-2、第23図)

調査区の第二遺構面中央やや東よりで検出した。東西1.3m、南北0.6mで調査区外へ延びる。深さは0.1mである。遺物は弥生土器 (11) が出土している。

出土遺物 (第21図)

弥生土器

壺 (11) No1の位置で出土した。底はわずかに上底となる。外面は指頭圧痕でくびれをつくり、体部は直線的に広がるため、壺の底部と判断した。内面にも指頭圧痕が強く残る。

98号土坑 (図版17-3、第23図)

調査区の第一遺構面中央付近で検出した。東西1.6m、南北2.5mの楕円形を呈する。深さは0.25mで、床面直上で弥生土器 (12) が出土している。

出土遺物 (第21図)

弥生土器

壺 (12) No1の位置から出土した。大型の壺の底部。外面はハケメの後、ナデ調整。一部剥離した部分があるが、その面でもハケメ調整が観察できる。内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。

99号土坑 (図版18-1、第23図)

調査区の第一遺構面中央付近で検出した。東西0.75m、南北1.0mの円形を呈するものとその東西の深さ0.5mのピット2基からなる。形態としては床面下まで削平された竪穴住居跡の可能性が高いが、ここでは土坑としておく。遺物は中央の掘り込みから弥生土器が出土している。

出土遺物 (第21図)

弥生土器

甕 (13~15) 13は三角突帯の剥離した甕の口縁部。剥離部分の面においても斜め方向のハケメが観察できる。口縁下に一条の沈線がめぐる。内面の調整はナデで指頭圧痕が残る。14は甕の胴部である。三角突帯を貼り付け、丸いものを押し付け刻目を施す。内外面の調整はナデである。15はわずかに上底の底部。強くくびれる。外面の調整は粗いハケメである。

100号土坑 (図版18-2、第23図)

調査区の第一遺構面中央付近で検出した。101号溝と重複し、これより新しい。東西1.4m、南北0.8mで調査区外へ延びる。深さは0.6mである。遺物は出土していない。

101号土坑 (図版18-3、第23図)

調査区の第二遺構面中央付近で検出した。東西0.45m、南北0.4mの楕円形を呈する。深さは0.6mではほぼ直に掘り込まれる。底から土師器が出土している。

出土遺物 (第21図)

土師器

甕 (18) 布留系の甕の口縁部で器壁は薄い。口縁は直線的で端部をわずかにつまみあげる。外面は縦ハケの後、横ハケを行っている。内面は頸部のやや下った位置からケズリが施される。

102号土坑 (図版19-1、第24図)

調査区の第一遺構面中央付近で検出した。東西1.5m、南北1.8mの楕円形を呈する。深さは0.35mで緩やかに掘り込まれる。埋土中位から川原石がまとまって検出された。土器は出土していない。

103号土坑 (図版19-2、第24図)

調査区の第一遺構面中央付近で検出した。東西1.1m、南北0.8mの楕円形を呈する。深さ0.5mである。埋土の上位から土師器、鉄鏃 (6) がまとまって出土している。

出土遺物 (図版32、第21図)

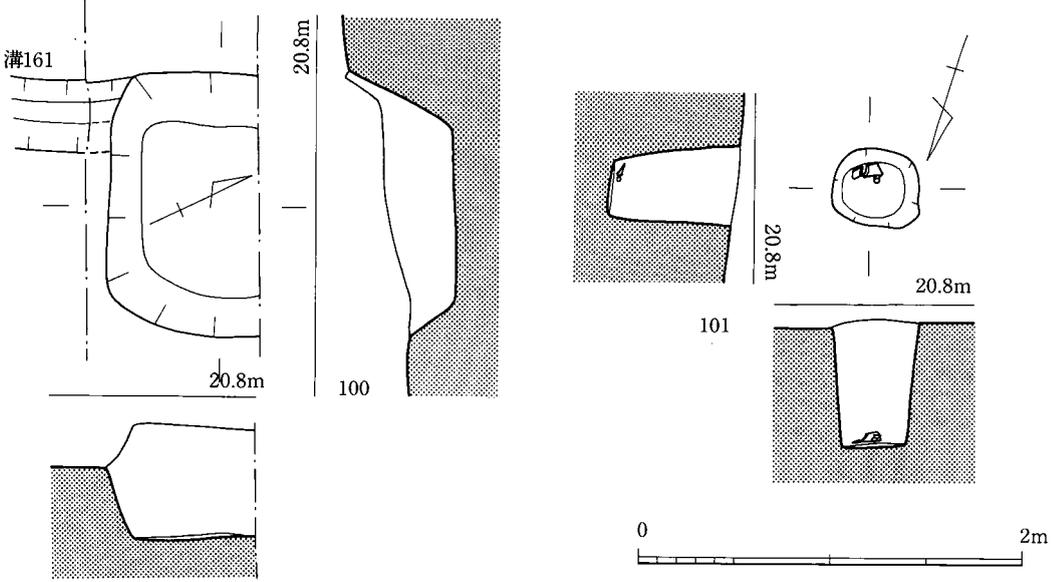
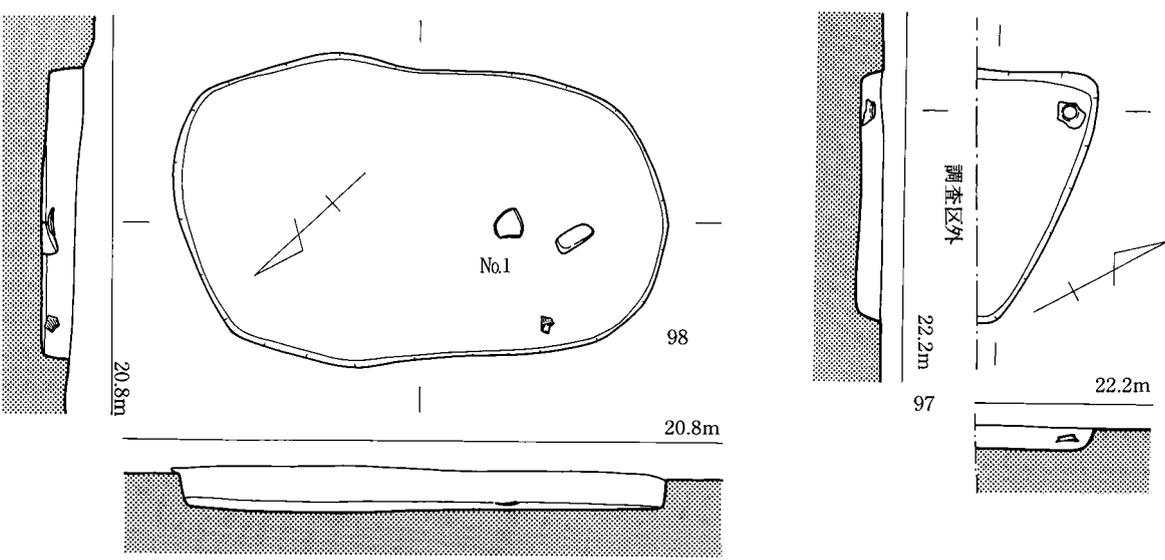
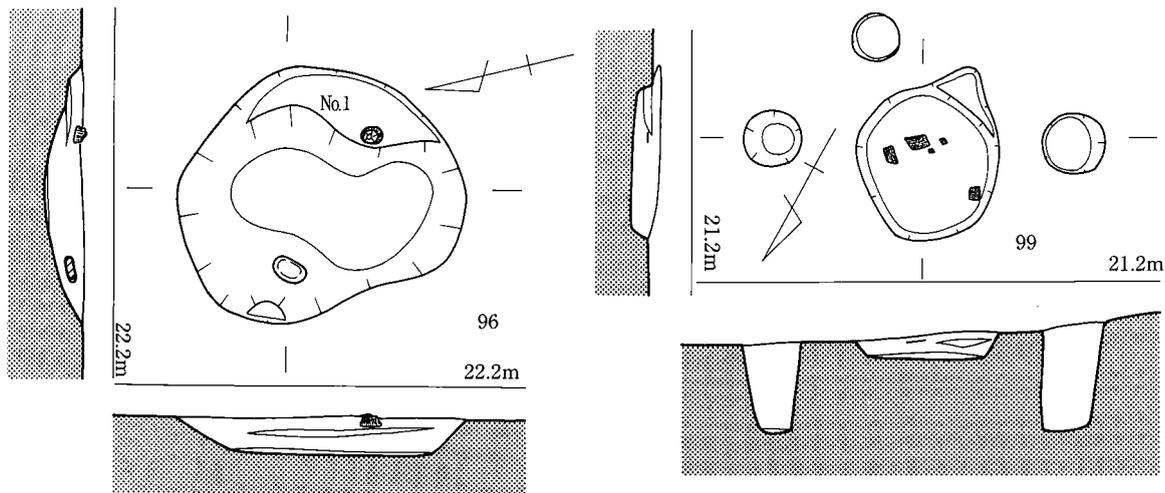
土師器

高坏 (19) 短い脚の付く高坏の坏部であろうか。内外面の調整はナデである。

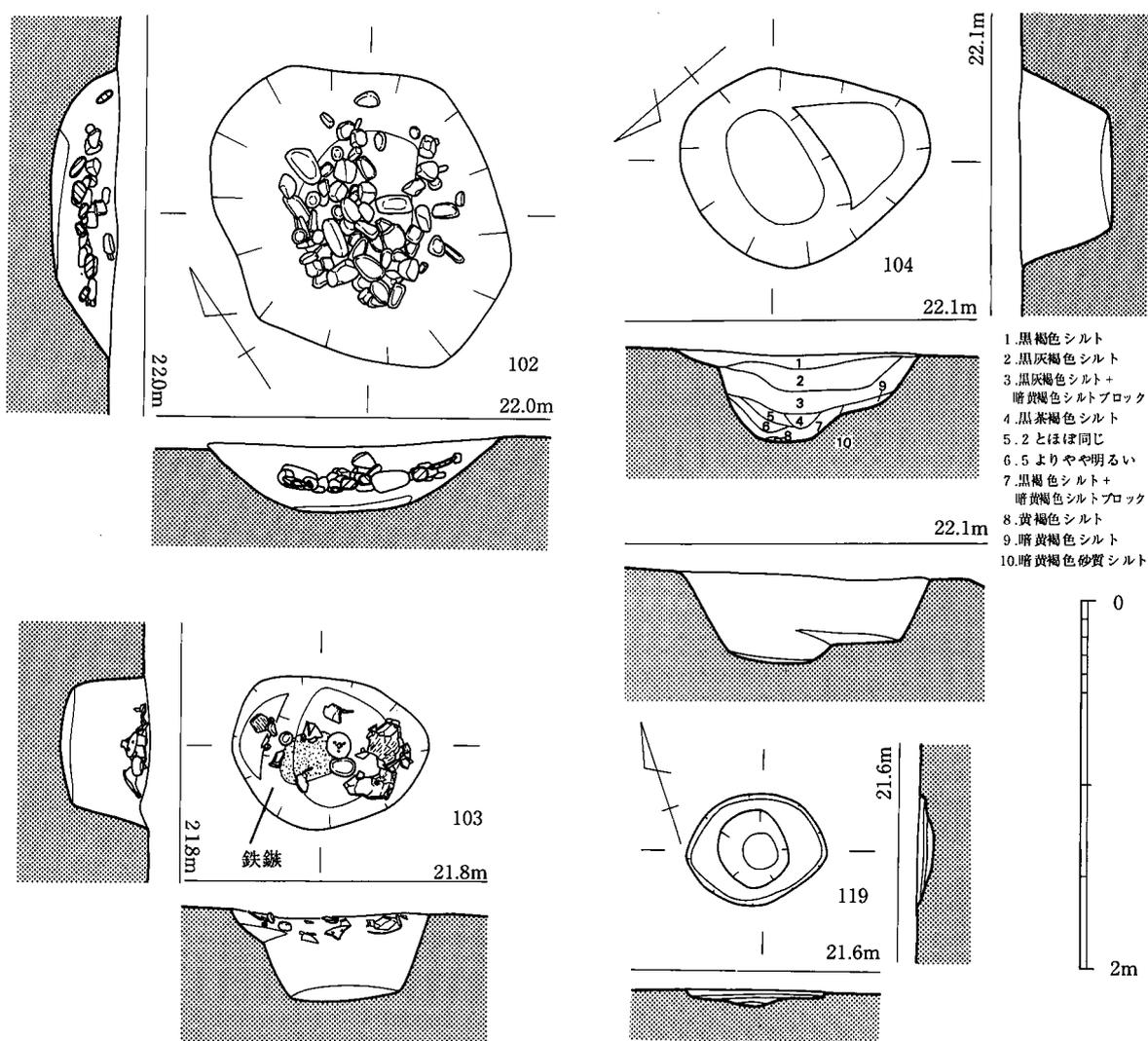
器台 (20・23) いずれも器台としているが高坏の脚部の可能性もある。20は直線的な高い脚部を持ち、外側から穿孔を行う。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。23は短い脚部を持つもの。外側から3箇所穿孔を行う。外面の調整はナデ、内面の調整はハケメである。内面脚部の付け根には絞り痕が残る。

壺 (21・25) 21は土師器として扱っているが弥生土器の可能性もある。厚い底部からやや膨らみ気味の胴部をもつ。胴部には3条の接合痕が残る。内外面の調整はナデである。25は在地系の壺の口縁部である。頸部に三角突帯を貼り付け、刻目を施す。内面に接合痕が残り、断面観察の結果から、内傾接合であることがわかる。

長頸壺 (22) 口縁部であろう。直線的に広がり、内外面の調整はナデである。



第23図 96~101号土坑実測図 (1/40)



第24図 102~104・119号土坑実測図 (1/40)

甕 (24) 在地系の甕である。口縁部はわずかに外反する。外面はタタキの後にハケメ。口縁部内面はハケメ。胴部内面は下半部はケズリ、上半部はハケメの後、ナデ調整である。底部は丸底でなく、わずかにレンズ状の痕跡を残す。

104号土坑 (図版19-3、第24図)

調査区第二遺構面の中央付近で検出した。東西1.0m、南北1.3mの楕円形で深さは0.4mである。南側がテラス状に一段高くなる。埋土はシルトがレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

119号土坑 (図版20-1、第24図)

調査区第二遺構面の西側で検出した。東西0.8m、南北0.6mの楕円形で深さは0.1mで周囲がテラス状に一段高くなっている。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版32、第21図)

弥生土器

甕 (8) 後期の甕である。口縁内外面の調整はハケメ。外面胴部最大径以下に煤が付着し、二次加熱のためハケメが摩滅している。胴部内面には黒斑が付着する。

5. 溝

69号溝 (第25図)

調査区第一遺構面東端部で検出した。69号溝と重複し、これより古い。幅5.0m、深さ1.8mで、断面は緩い「V」字状に掘られる。埋土はレンズ上堆積であるが、掘りなおしの可能性もある。遺物は弥生土器・土師器が出土している。

出土土器 (図版32、第27図)

弥生土器

甕 (1~4) 1は上層から出土口縁を丸く仕上げる甕の口縁部。2は中層から出土。やや大型の甕で、口縁上端面がわずかながら内傾する。3は中層から出土。4は中層から出土。いずれも甕の底部で、内面に指頭圧痕が残る。

土師器

鉢 (5) 中層から出土。鉢の口縁から胴部にかけての破片で口縁部内面はハケメである。

椀 (6) 上層から出土した。外面底部はケズリ。その他はナデ調整。

高坏 (7・8) 7は下層から出土短い脚部をもつ高坏。全体にナデ調整。8は長脚の高坏である。脚部は内外面ともにケズリ調整。

72号溝 (図版20-3、第25・28図)

調査区第一遺構面中央部付近で検出した。58号土坑、77・164・165号溝と重複し、58号土坑・165号溝より新しく、77・164号溝より古い。幅は0.7~2.0mと一定ではない。埋土は最下層にやや粘質の土が薄く溜まり、中層と上層に地山の黄褐色砂質土を含む砂質土層がある。掘り直しは確認できなかった。立ち上がりはさほど明瞭ではなく砂層も薄い。遺物は164号溝と重複した部分から出土しているが、切り合いを間違えたためにこのように報告しておく。

出土遺物 (第26図)

土師器

蓋 (2) 蓋としたが弥生土器の可能性もある。外面は指頭圧痕が残る。

甕 (3~5) 3は布留系の甕の口縁部。口縁は直線的に広がり、端部を摘み上げる。外面の調整はハケメの後、ナデ。内面は頸部よりやや下った位置よりケズリを行う。4は口縁がわずかに外反しながら広がる甕である。外面の調整は粗いハケメである。5は二重口縁の甕。口縁屈曲部分に三角突帯を貼り付ける。胴部内面はケズリ。

73号溝

調査区第一遺構面中央部付近で検出した。これより新しい。75・77号溝と重複し、これらよりは新しい。幅0.9m、深さ0.3mで、立ち上がりは緩やかである。埋土には明瞭な砂層の堆積はなく、地山の砂質土が混入した粘質土が堆積する。出土遺物も小片かつ少量で、図示できるものはない。

74号溝

調査区第一遺構面中央部付近で検出した。164号溝と同一のものである。72・75・76・166号溝と重複し、72・75・166号溝より新しく、166号溝より古い。幅0.8m、深さ0.5mである。遺物は出土しなかった。

75号溝 (第25図)

調査区第一遺構面中央部付近で検出した。66号土坑・73・77・78・164号溝と重複し、73・78号

溝より新しく、その他より古い。溝の幅は1.0m、深さは0.4mである。遺物は弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物（第26図）

弥生土器

壺（6・7）6は底部片である。平底で体部外面には刷毛目状の痕跡が見えるが明瞭でない。7は袋状口縁壺の口縁部小片である。外面はナデ調整。内面はナデ、屈曲部は明瞭な稜がつく。内面はナデ調整で一部剥離している。

土師器

壺（8）器種は不明であるがここでは壺としておく。口縁部片。内外面とも摩滅が激しく調整は不明。

76号溝（図版21-1、第25・28図）

調査区第一遺構面中央部付近で検出した。77・78・164・166・168号溝と重複し、78・164・166・168号溝より新しく、77号溝より古い。幅0.7m、深さ0.6m、黒灰色土に切り込まれ、壁の立ち上がりは垂直で、底部もほぼ平坦となる。遺物は弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物（第26図）

弥生土器

甕（9・10・13）9は口縁部に三角突帯を貼り付ける甕の口縁。口縁下に小さな三角突帯を貼り付ける。全体にナデ調整。10も三角突帯を貼り付ける。13は甕の底部。胴部が大きく張るものであろう。

土師器

高坏（14～17）14は杯部だけの破片である。口縁部はわずかに外反する。内外面はナデ調整、底部は摩滅のため調整不明である。15～17は脚部だけの破片。15は4箇所穿孔を行う。外面はハケメ。内面はナデ調整。16は裾が直線的に伸びるもので、外面にはハケメ、内面は横方向のハケメ。外面上位はケズリ。17は脚端部の破片。端部はやや強く外反し外面に緩い稜が付く。外面はハケメ、内面はナデ。色調は淡黄灰色、端部内面は黒色を呈する。

77号溝（図版21-2、第28図）

調査区第一遺構面中央部付近で検出した。67号土坑、72・73・75・76号溝と重複し、これらのなかで最も新しい。幅1.4～2.6m、深さ0.3mで掘り直しが観察できた。遺物は須恵器が出土している。

出土遺物（第26図）

須恵器

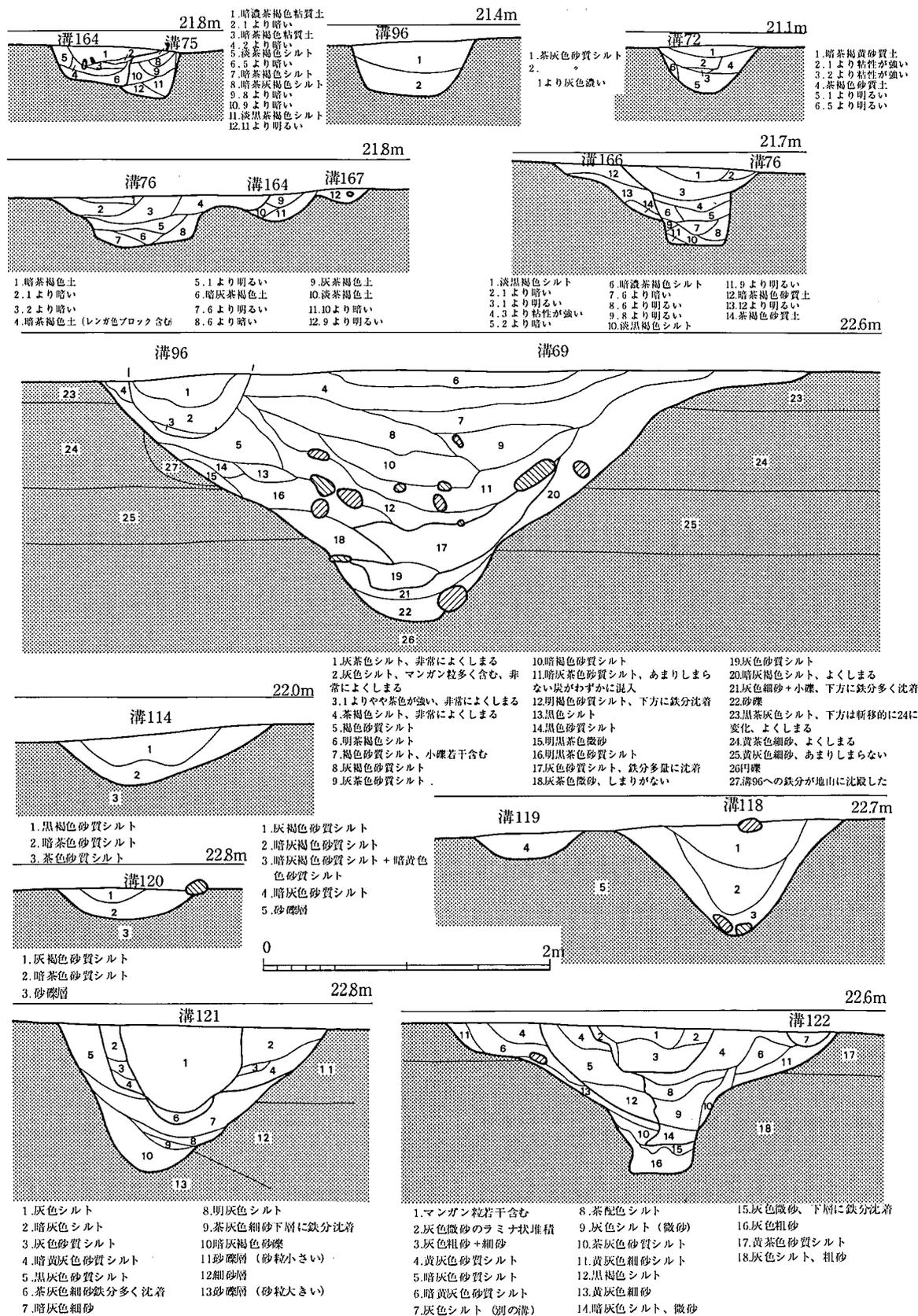
杯身（18）掘り直しの埋土から出土した。立ち上がりは小さい。受け部は厚く丸く造られる。底部中央はヘラ切り未調整で凹凸があり、底部から体部中位にかけては回転ヘラケズリ。器壁は厚く焼成は軟質で淡灰色を呈する。

78号溝（第28図）

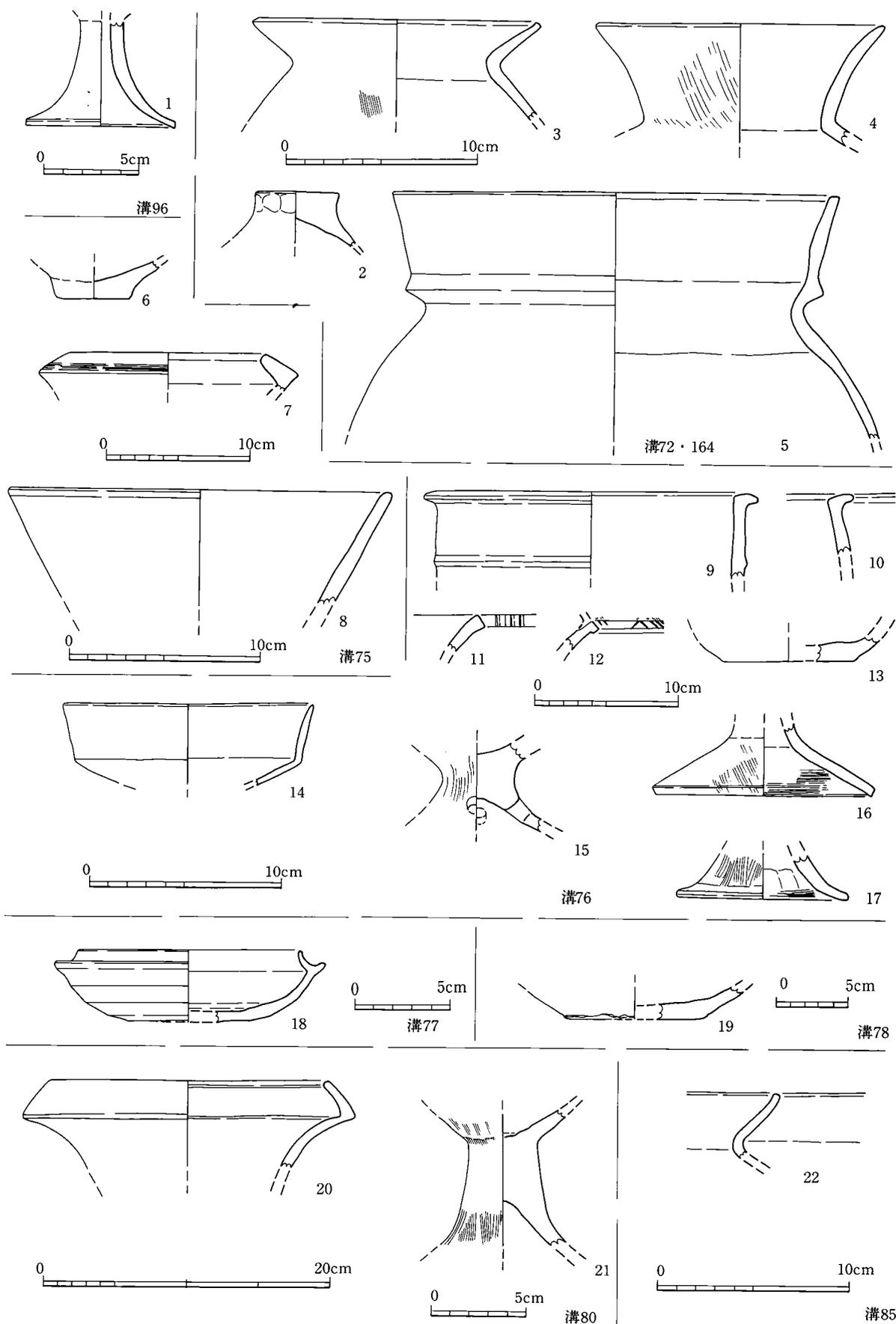
調査区第一遺構面中央部付近で検出した。68号土坑、72・73・75・76号溝と重複し、これらのなかで最も古い。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物（第26図）

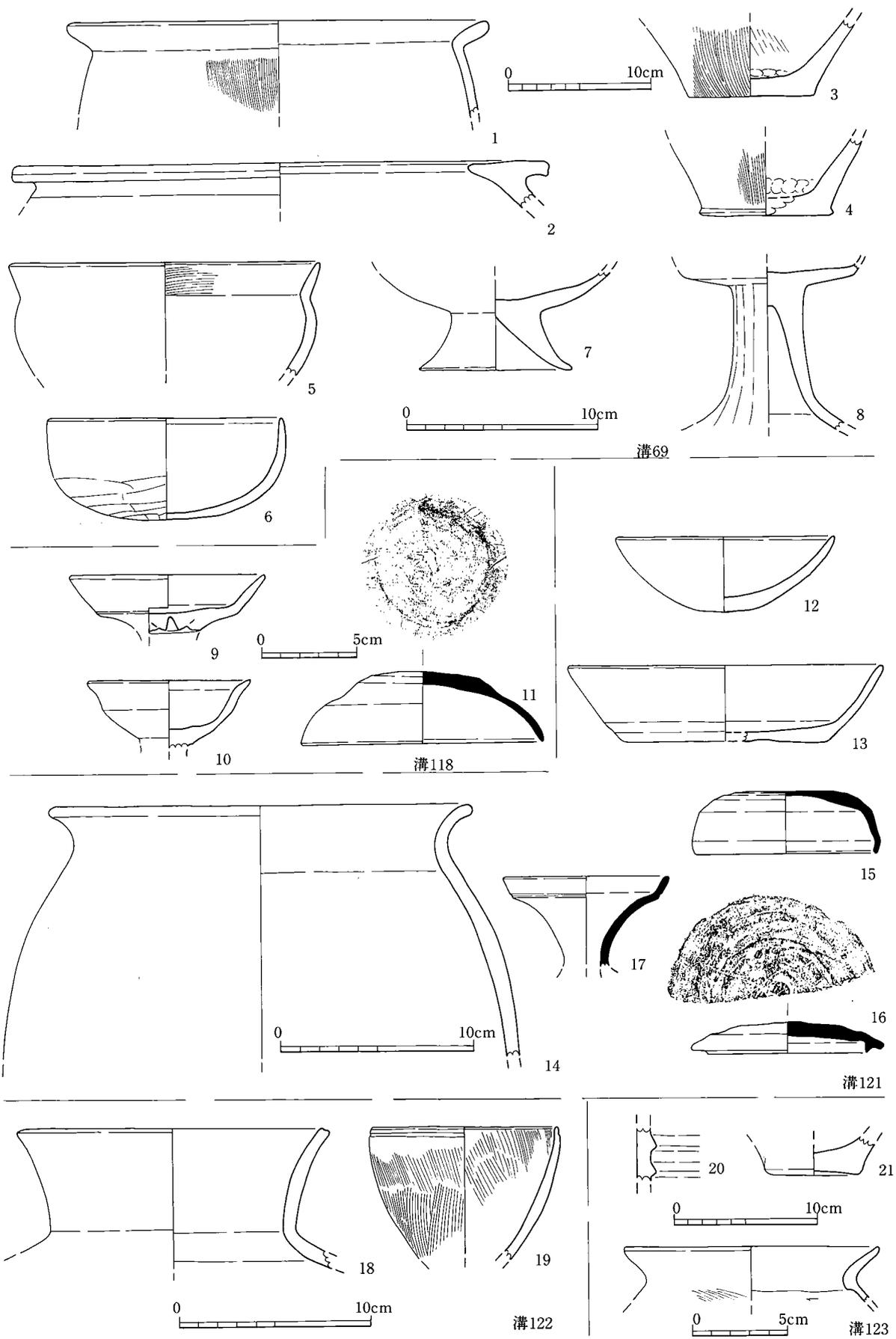
弥生土器



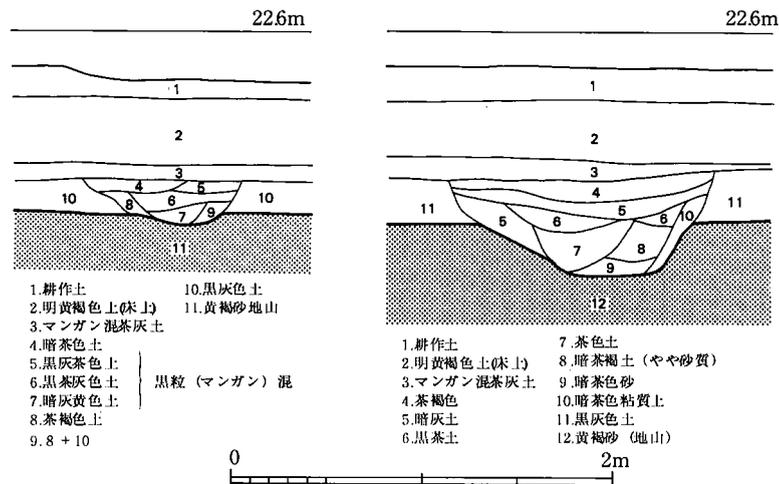
第25図 69・72・75・76・96・114・118~122・164・166・167号溝土層断面図 (1/40)



第26図 72及び164・75~78・80・85・96号溝出土土器実測図 (1/3・1/4)



第27図 69・118・121～123号溝出土土器実測図 (1/40)



第29図 79・80号溝土層断面図 (1/40)

土師器

甕 (14) 口縁部小片で、緩やかに内弯品しながら立ち上がり、端部を内側につまみ出す。器壁は薄く内外面ともにナデ調整、体部内面には削り痕が認められる。小片のため口径は復元できない。

86号溝

調査区第一遺構面中央やや東よりで検出した。79・87・93号溝と重複し、87・93号溝より新しく、79号溝より古い。幅0.2m、深さ0.1mで、埋土は暗灰色粘質土。出土遺物は小片のため図示できない。

87号溝

調査区第一遺構面中央やや東よりで検出した。69・72号土坑、83・86・88・72号溝と重複し、72号土坑より新しく、その他より古い。幅0.3m、深さ0.1mである。埋土は茶灰色土。出土遺物は小片のため図示できない。

88号溝

調査区第一遺構面中央やや東よりで検出した。87・93号溝と重複し、これらより新しい。幅0.2m、深さ0.1m。埋土は暗灰色粘質土。出土遺物はない。

89号溝

調査区第一遺構面中央やや東よりで検出した。90号溝と重複し、これより古い。幅20.2m、深さ0.1m。埋土は暗灰色粘質土で、出土遺物はない。

90号溝

調査区第一遺構面中央やや東よりで検出した。71号土坑、91・92号溝と重複し、91・92号溝より新しく、71号土坑より古い。幅0.2m、深さ0.1mである。埋土は茶灰色土に若干砂が混じる。出土遺物はない。

91号溝

調査区第一遺構面中央やや東よりで検出した。90号溝と重複し、これより古い。幅10.2m、深さ0.1m。埋土は暗茶色土である。出土遺物はない。

92号溝

調査区第一遺構面中央やや東よりで検出した。幅0.2m、深さ0.1m。埋土は暗茶色土。出土遺物はない。

93号溝

調査区第一遺構面中央やや東よりで検出した。86・88号溝と重複し、これより古い。幅0.2m、深さ0.1m。埋土は暗茶色土。出土遺物はない。

94号溝

調査区第一遺構面中央やや東よりで検出した。88号溝と重複し、これより古い。幅10.2m、深さ0.1m。埋土は暗茶色土。出土遺物はない。

95号溝

調査区第一遺構面の東端部で検出した。幅0.4m、深さ0.3mである。中央が削平のため消失する。出土遺物はない。

96号溝（図版21-3・22-1、第25図）

調査区第一遺構面の東端部で検出した。96・99号溝と重複し、これらより新しい。幅0.9m、深さ0.5mである。埋土は灰色シルトがレンズ状に堆積する。

出土遺物（第26図）

須恵器

高坏（1）小形の高坏の脚部。内外面の調整はナデである。

97号溝

調査区第一遺構面の東端部で検出した。幅0.8m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

98号溝

調査区第一遺構面の東端部で検出した。116号溝と重複し、これより新しい。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

99号溝

調査区第一遺構面の東端部で検出した。69・100号と重複し、これらより古い。溝幅0.8m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

100号溝

調査区第一遺構面の東端部で検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

101号溝

調査区第一遺構面の東端部で検出した。幅0.6m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

102号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。75号土坑、103・105・106号溝と重複し、これらの中で最も新しい。幅0.6m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

103号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。102号溝と重複し、これより古い。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

104号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。103号溝と重複し、これより古い。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

105号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。102号溝と重複し、これより古い。幅0.9m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

106号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。102号溝と重複し、これより古い。幅0.6m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

107号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。幅0.5m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

108号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。109号溝と重複し、これより新しい。幅0.2m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

109号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。108号溝と重複し、これより古い。幅0.9m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

110号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

111号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

112号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。113号溝と重複し、これより新しい。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物は石庖丁(1)が出土している。

113号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。112号溝と重複し、これより古い。幅0.6m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

114号溝 (第25図)

調査区第二遺構面の東端部で検出した。幅1.5m、深さ0.4mである。シルトがレンズ状に堆積する。出土遺物はない。

115号溝

調査区第二遺構面の東端部で検出した。幅0.9m、深さ0.4mである。出土遺物はない。

116号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。98号溝と重複し、これより古い。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

117号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。118号溝と重複し、これより新しい。幅0.1m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

118号溝 (図版22-2、第25図)

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。117・119号溝と重複し、117号溝より古く、119号溝より新しい。幅1.7m、深さ0.8mである。埋土はシルトがレンズ状に堆積している。遺物は土師器・須恵器が出土している。

出土遺物 (図版32、第27図)

土師器

高坏 (9・10) 9は口縁部が直線的に大きく広がるもの。内外面の調整はナデ。10は小形で口縁端部が外反するもの。内外面の調整はナデである。

須恵器

坏蓋 (11) 天井付近はヘラ切り未調整。一部に回転ヘラケズリを施す。天井部にヘラ記号を描く。

119号溝 (第25図)

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。118号溝と重複し、これより古い。幅0.8m、深さ0.2mでシルトの埋土である。出土遺物はない。

120号溝 (第25図)

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。119号竪穴住居と重複し、これより古い。幅1.0m、深さ0.3mでシルトがレンズ状に堆積する。出土遺物はない。

121号溝 (図版22-3、第25図)

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。117号竪穴住居と重複し、これより新しい。幅1.9m、深さ1.0mで埋土はシルトで、土層断面から3回の掘り直しが観察できた。遺物は土師器・須恵器・調整剥片 (31) が出土している。

出土遺物 (図版33、第27図)

土師器

甕 (14) 胴部の張る甕。器壁の厚さはほぼ一定である。内面はケズリ。

須恵器

坏蓋 (15・16) 15はやや深めの坏蓋。口縁端部は内湾する。16は天井部はヘラ切り未調整で、ヘラ記号が描かれる。

甗 (17) 小形の甗の口縁部。屈曲部分に沈線が造られる。

122号溝 (図版23-1、第25図)

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。126号溝と重複し、これより新しい。幅2.7m、深さ1.0mで、土層断面から3回の掘り直しが観察できた。遺物は土師器・砥石 (22) が出土している。

出土遺物 (図版33、第27図)

土師器

甕 (18) 口縁がやや外反するもの。内面胴部はケズリ。

椀 (19) 深めの椀である。内外面ハケメ調整。

123号溝 (図版23-2、第30図)

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。126・130号溝と重複し、最も新しい。幅2.0m、深さ1.3mである。埋土はシルトでレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器、土師器が出土している。

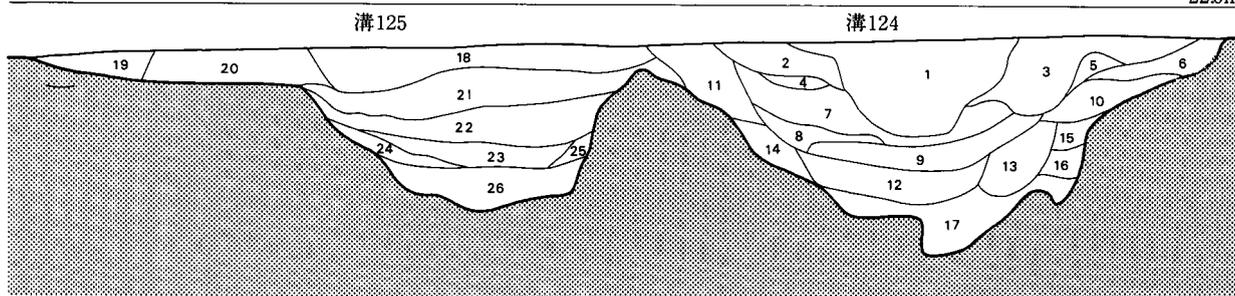
出土遺物 (第27図)

弥生土器

甕 (20・21) 20は弥生の甕の胴部。二条の三角突帯を施す。21は甕の底部であろうか。底部はわずかに上底である。内外面の調整はナデである。

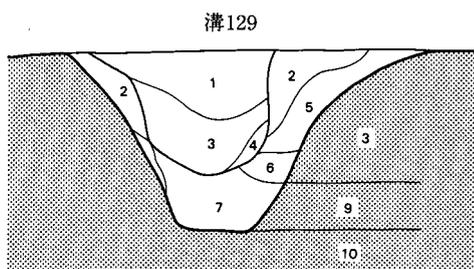
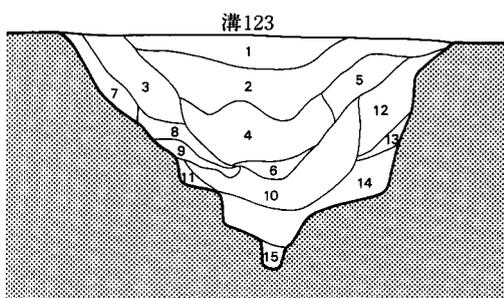
土師器

甕 (22) 布留系の甕の口縁である。口縁端部を摘み上げるようにしている。ケズリ残しのため



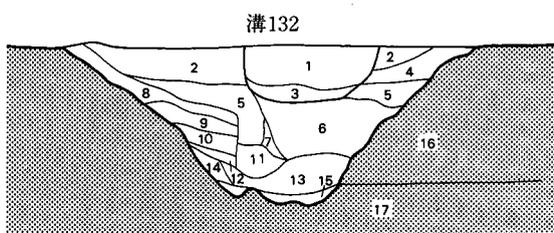
22.6m

22.6m

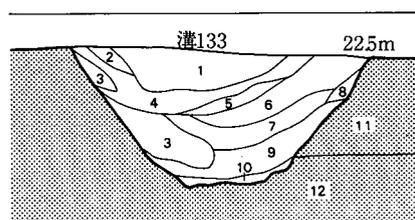


- 1. 明黄茶褐色シルト
- 2. 黄茶褐色シルト
- 3. 暗黄茶褐色シルト
- 4. 3と同じ(鉄分含む)
- 5. 茶褐色砂
- 6. 暗茶褐色シルト
- 7. 淡灰褐色シルト
- 8. 灰褐色シルト
- 9. 淡灰褐色粗砂
- 10. 淡暗茶褐色シルト
- 11. 3と同じ
- 12. 明灰褐色粗砂
- 13. 明灰褐色シルト
- 14. 13と同じ
- 15. 淡茶褐色シルト
- 16. 灰褐色微砂
- 17. 茶灰褐色粗砂
- 18. 暗茶褐色シルト
- 19. 淡黒褐色シルト
- 20. 暗淡茶褐色微砂
- 21. 暗茶褐色シルト
- 22. 淡暗黒褐色シルト
- 23. 明黒褐色シルト
- 24. 明淡黒褐色シルト
- 25. 明茶褐色シルト
- 26. 暗灰褐色微砂

22.6m



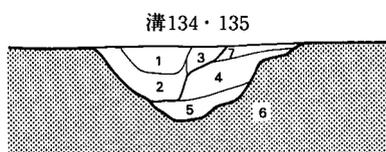
- 1. 淡黄茶褐色シルト
- 2. 白黄褐色シルト
- 3. 灰褐色シルト
- 4. 暗白黄褐色シルト
- 5. 3と同じ
- 6. 暗茶灰褐色シルト
- 7. 淡黒褐色シルト
- 8. 暗灰褐色シルト
- 9. 暗黄褐色粗砂
- 10. 暗灰茶褐色シルト
- 11. 黄褐色粗砂
- 12. 8と同じ
- 13. 11と同じ
- 14. 淡黄
- 15. 赤茶
- 1. 灰褐色砂質シルト
- 2. 暗灰褐色砂質シルト
- 3. 灰褐色砂質シルト
- 4. 灰褐色粗砂
- 5. 黒灰色シルト
- 6. 黒灰色シルト+暗灰色砂質シルト
- 7. 暗灰色砂質シルト
- 8. 黄灰色シルト
- 9. 黄灰色粗砂
- 10. 黄灰色粗砂+コブシ人のH跡



- 1. 黒灰色シルト
- 2. 灰褐色砂質シルト
- 3. 黄茶色微砂(礫崩落土)
- 4. 灰褐色シルト
- 5. 暗灰褐色シルト
- 6. 4とほぼ同
- 7. 暗灰色シルト
- 8. 灰褐色砂質シルト+黄茶色微砂
- 9. 灰色シルト
- 10. 灰色シルトと黄茶を
- 11. 黄茶色粗砂
- 12. 灰茶色粗砂



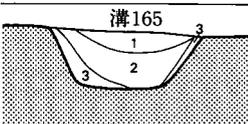
22.6m



- 1. 茶灰色砂質
- 2. 暗灰色砂質
- 3. 灰色微砂
- 4. 茶灰色微砂
- 5. 黒灰色微砂、鉄分多量を含む
- 6. 黄褐色粗砂
- 7. 黒褐色砂質シルト

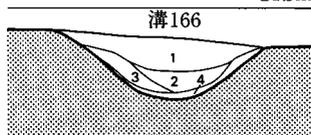
- 1. 暗灰色微砂
- 2. 灰褐色微砂
- 3. 1に鉄分多く含む
- 4. 暗黄褐色微砂
- 5. 暗灰褐色砂質シルト
- 6. 灰色シルト
- 7. 7に鉄分多く含む
- 8. 灰褐色微砂、鉄分若干含む
- 9. 黒灰色シルト
- 10. 茶灰色微砂
- 11. 暗灰色微砂
- 12. 灰色微砂
- 13. 暗灰色粘土
- 14. 茶灰色シルト
- 15. 灰色粘土
- 16. 黄茶色シルト
- 17. 黄褐色粗砂

21.4m



- 1. 淡灰褐色シルト
- 2. 1より暗い
- 3. 淡赤灰褐色シルト

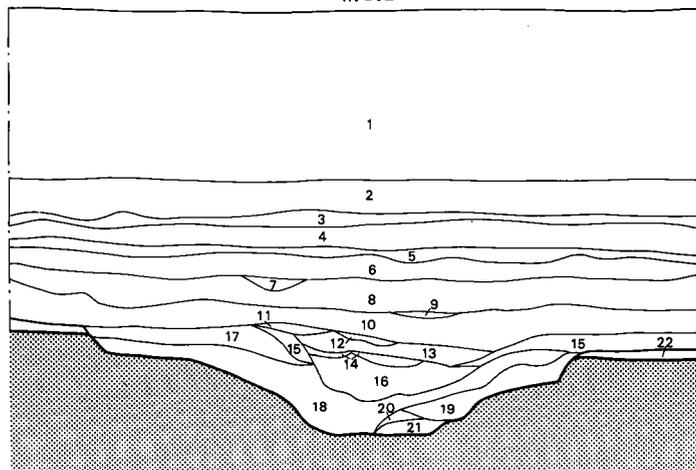
21.8m



- 1. 暗茶褐色シルト
- 2. 1より明るい
- 3. 淡茶褐色砂質土
- 4. 3より明るい

- 1. 客上
- 2. 青灰色シルト
- 3. 明黄褐色シルト
- 4. 淡赤黒褐色シルト
- 5. 4より明るい
- 6. 淡黒褐色シルト
- 7. 6より明るい
- 8. 黒褐色シルト
- 9. 10より明るい
- 10. 淡黒褐色シルト
- 11. 淡灰茶褐色砂質土
- 12. 11と同じ
- 13. 10より砂が多い
- 14. 10より明るい
- 15. 10より暗い
- 16. 淡明黒褐色砂質土
- 17. 淡明黒褐色シルト
- 18. 17より暗い
- 19. 暗茶褐色砂質土
- 20. 暗灰褐色砂質土
- 21. 18より暗い
- 22. 淡茶褐色土

溝162



第30図 123~125・129・132~135・162・165・166号溝土層断面図 (1/40)

頸部が異様に厚い。

124号溝 (図版23-3、第30図)

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。125・127・130号溝と重複し、これらの中で最も新しい。幅3.0m、深さ1.2mで、シルトがレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦・敲石(24)が出土している。

出土遺物 (図版33、第31図)

弥生土器

甕(1) 口縁部わずかに下がった位置に三角突帯を貼り付ける甕。やや大きめの刻目が施される。胴部に屈曲が無く、最大径部分にもう一条三角突帯を貼り付け、刻目を施す。突帯貼り付けの痕跡が内面に残る。内外面の調整はナデ。

土師器

椀(2) 小形の椀で、器壁はやや厚い。内外面の調整はナデである。

須恵器

坏蓋(3) やや浅い器形である。天井部は回転ヘラ削り。その他はナデ調整である。

瓦

平瓦(4) 外面は斜格子のタタキ。内面は粗い布目が残る。端部はケズリで仕上げる。焼成はややあまい。

ここで124号溝と125号溝の重複した部分で出土した土器を報告する。

出土遺物 (第31図)

弥生土器

甕(5~7) 口縁を緩く外反させる甕の口縁。端部を角張って仕上げ、小さな刻目を施す。口縁に三角突帯を貼り付ける甕。粗い刻目が施される。口縁下にも三角突帯を貼り付けるが、胴部の屈曲はない。内外面の調整はナデ。7は胴部が張るタイプの甕の底部であろう。わずかに上底で、外面底端部周囲には指頭圧痕が残る。内外面の調整はナデである。

土師器

椀(8) 浅い椀である。内外面ともに縦方向のミガキを行う。口縁付近はナデ調整。

甕(9・10) 9は「く」字形に近い口縁をもつ甕。端部は摘んで仕上げる。内外面の調整はナデ。10は二重口縁の部分で、屈曲部を摘み出すように仕上げる。内外面の調整はナデ。

手捏土器(11) 椀状に仕上げるもので、内外面は指頭圧痕・ナデにより仕上げている。

須恵器

坏蓋(12) カエリの極めて小さい坏蓋である。天井部は回転ヘラケズリである。

坏身(13) ややふんばる高台をもつ坏身である。内外面の調整はナデ。底部にヘラ記号をもつ。

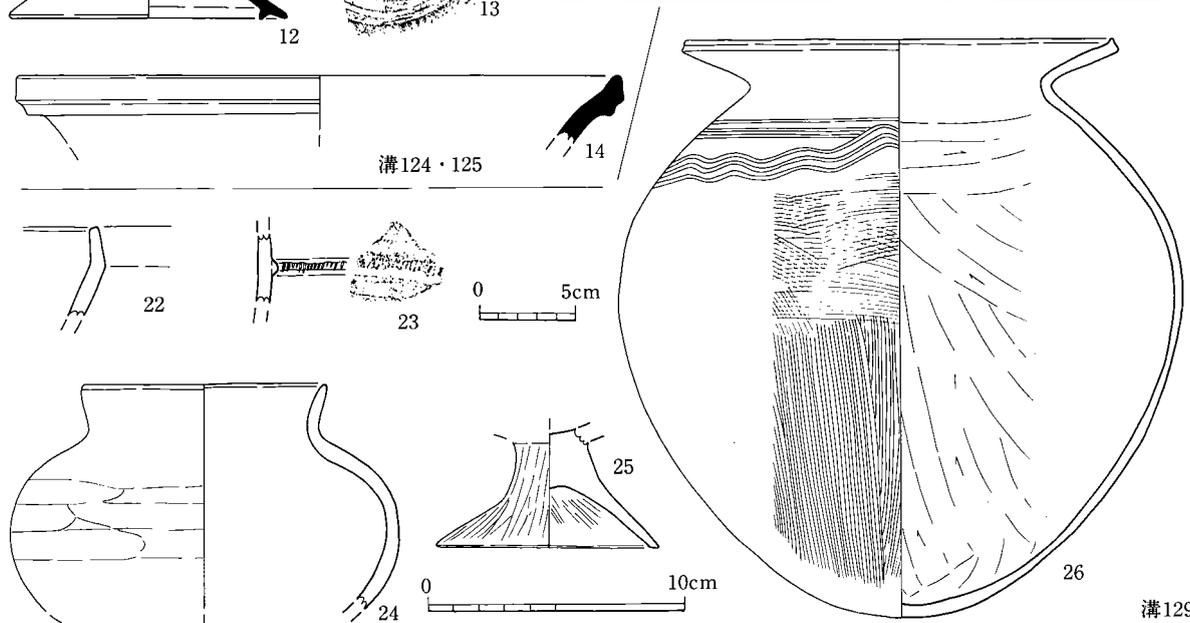
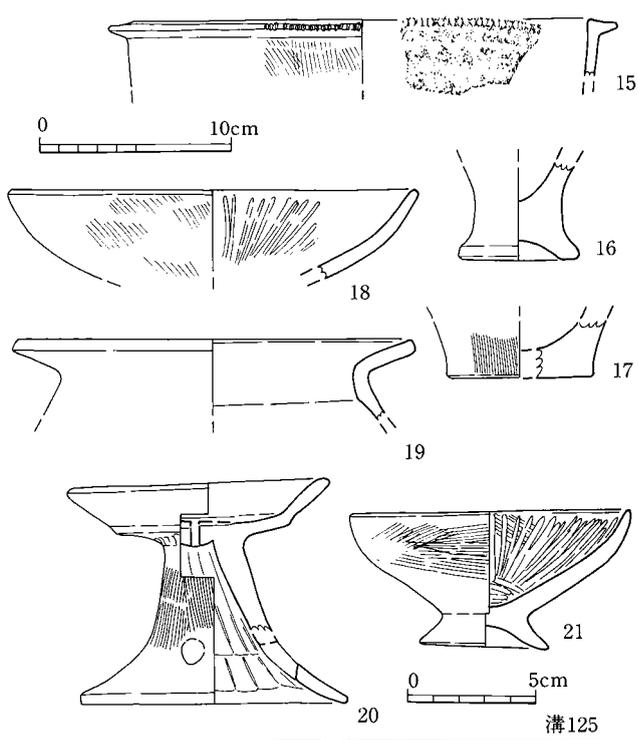
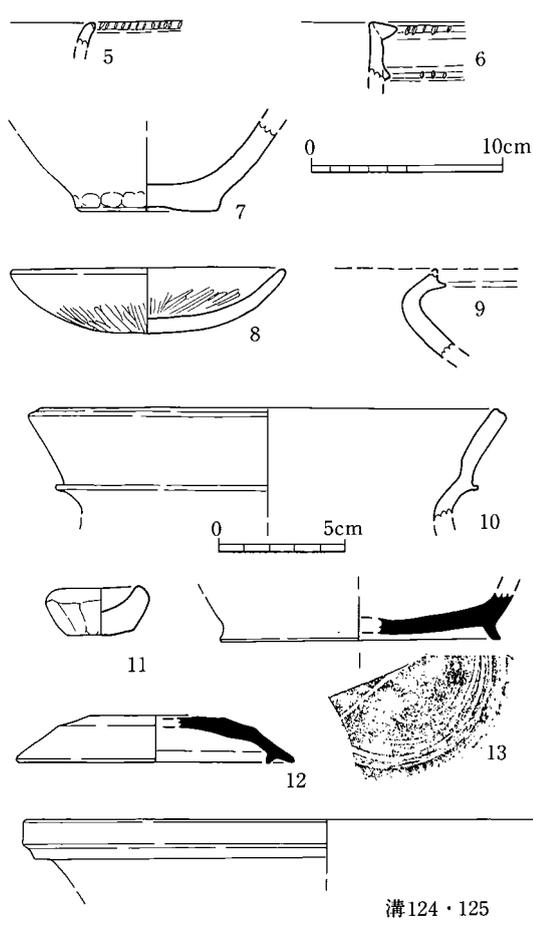
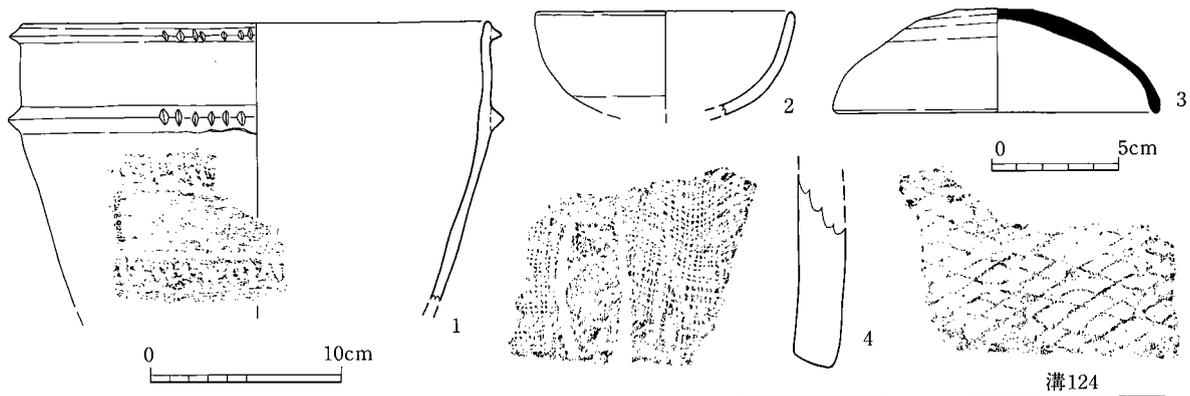
甕(14) 甕の口縁部内外面の調整はナデである。

125号溝 (図版24-1、第30図)

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。南で大きく広がる。76号土坑、124・128・129・130号溝と重複し、76号土坑、130号溝より新しく、その他より古い。幅3.2m、深さ0.9mで、レンズ状にシルトが堆積する。遺物は弥生土器・土師器が出土している。

出土遺物 (図版33、第31図)

弥生土器



第31図 124・124及び125・125・129号溝出土土器実測図 (1/3・1/4)

甕 (15~17) 15は口縁に三角突帯を貼り付ける甕。つくりがよく大き目の突帯で、細かい刻目が施される。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。16は上底の底部。内外面の調整はナデである。17は平底の底部。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。

土師器

椀 (18) 広く浅めの椀である。口縁端部を角張って仕上げている。外面はハケメの後、ナデ調整。内面はナデの後、縦方向のミガキを疎らに行っている。

甕 (19) 布留系の甕の口縁部である。口縁部は大きく広がり、端部をわずかに摘み上げる。口縁及び外面の調整はナデ、胴部は頸部よりかなり下がった位置からケズリを行う。

高坏 (20) 小さな坏部になだらかに広がる脚部がつく高坏。屈曲する坏部で、器壁はやや厚い。見込み部分が剥離する。脚部は3箇所穿孔を行い、外面の調整はハケメ。内面はケズリである。

台付椀 (21) 小さな台がつく椀である。椀部は直線状に広がり、口縁付近でわずかに内湾させる。外面の調整はハケメの後、ナデを行う。内面はハケメを施した後、縦方向のミガキを行う。

126号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。122・123号溝と重複し、これらより古い。幅0.2m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

127号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。124号溝と重複し、これより古い。幅0.4m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

128号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。125・129・133号溝と重複し、125号溝より新しく、その他より古い。幅1.0m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

129号溝 (図版24-2、第30図)

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。南側が大きく広がる。118号竪穴住居、125・128・130・133号溝と重複し、その他の溝より新しく、118号竪穴住居より古い。幅1.9m、深さ1.0mで埋土はシルトである。土層断面から2回の掘り直しが確認できる。出土遺物は弥生土器・土師器・石庖丁 (2) ・黒曜石剥片 (37) が出土している。

出土遺物 (図版33、第31図)

弥生土器

鉢 (22) 口縁部小片であるが、深鉢の口縁と思われる。胴部をわずかに屈曲される。口縁部上端はわずかに内傾させる。内外面の調整はナデである。

甕 (23) 屈曲のない胴部に三角突帯を貼り付ける甕。突帯には細かい刻目を施す。

土師器

壺 (24) 小形で口縁がわずかに広がる。外面胴部の調整はケズリ。他はナデ調整。

高坏 (25) 脚部で、外面は縦方向のミガキ、内面はハケメの後、ナデである。

甕 (26) 布留系の甕である。口縁は大きく広がり、端部を摘み上げる。器壁は薄い。胴部最大径はやや上がった位置にあり、底部はわずかに尖り気味である。外面胴部下半は縦方向のハケメ、胴部中位は横方向のハケメである。肩部には2条の沈線を刻み、その上から3条の波状文を刻む。胴部には煤が付着している。内面はケズリである。底部付近には黒斑あり。

130号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。123・124・125・129・132・138号溝と重複し、これらの中で最も古い。幅0.9m、深さ0.2mである。遺物は弥生土器・土師器・片岩の石材（18）が出土している。

出土遺物（第32図）

弥生土器

甕（1）尖った三角突帯を2条貼り付ける甕の口縁部。口縁上端面は水平に仕上げる。2条の突帯間は狭く、胴部は屈曲しない。外面はハケメの後、ナデ。内面はナデ調整である。

土師器

甕（2）布留系の甕である。口縁端部を摘み上げる。器壁はやや厚い。外面の調整はハケメ。胴部内面はハケメであるが、その前にケズリを行っていると思われる。

131号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。132・134・136・137号溝と重複し、これらの中で最も新しい。幅0.3m、深さ0.3mである。出土遺物は黒曜石調整剥片が出土している。

132号溝（図版24-3、第30図）

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。131・130・133・134・138号溝と重複し、131号溝より古く、その他より新しい。幅2.1m、深さ0.8mである。シルトが堆積し、土層断面からは1回の掘り直しが観察できた。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・砥石（21）が出土している。

出土遺物（図版33、第32図）

弥生土器

甕（3・4）3は口縁が緩く開く小形の甕。口縁端部を丸く仕上げ、粗い刻目を施す。4は口縁は如意状に小さく強く外反させる口縁で、胴部が屈曲する小形の甕。外側斜め上から丸いものを強く押し付けるため、内面から見ると波状に見える。屈曲部は三角突帯を貼り付けたように仕上げ、粗い刻目を貼り付ける。

土師器

甕（5）布留系の甕である。口縁はあまり広がらない。端部は大きく摘み上げる。外面は縦方向のハケメの後、胴部上半には横方向のハケメを行う。煤が付着する。内面は頸部下に指頭圧痕が残り、その下からケズリを行う。

椀（6）小形の浅い椀。内外面の調整はナデである。

須恵器

蓋坏（7～9）7は坏蓋である。天井部にヘラ記号あり。8は高台がややふんばる坏身。9は口縁部をわずかに折り返す痕跡ともつ坏蓋。深さはほとんどない。

133号溝（図版25-1、第30図）

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。128・129・132・134号溝と重複し、128・134号溝より新しく、その他より古い。幅1.5m、深さ0.7mである。埋土はシルトがレンズ状に堆積している。出土遺物はない。

134号溝（図版25-2、第30図）

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。131・132・133・135・138・139号溝と重複し、138号溝より新しく、その他より古い。幅1.8m、深さ0.4mである。遺物は弥生土器・土師器が出土している。

出土土器（図版33、第32図）

弥生土器

甕（10・11）口縁を強く屈曲させる甕。端部を角張って仕上げ、下端に刻目を施す。口縁下にはちいさな三角突帯を貼り付け、刻目を施している。

壺（12）壺の胴部から底部にかけての部位である。底部はレンズ状を呈する。外面はハケメ調整で垂れ気味の三角突帯を貼り付ける。内面の調整もハケメである。

土師器

椀（13）大きく浅めの椀である。口縁は直立する。内外面の調整はナデである。

壺（14）頸部から大きく開く壺。明瞭な屈曲はないが二重口縁様の屈曲に見せるため尖った三角突帯を貼り付ける。内外面の調整はナデである。

135号溝（図版25-2、第30図）

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。134・136・138号溝と重複し、これらの中で最も新しい。幅0.7m、深さ0.3mである。遺物は弥生土器・土師器・頁岩の石材（18）・安山岩剥片（35・43）・石英石核（39）が出土している。

出土遺物（第32図）

弥生土器

甕（15）口縁に突帯を貼り付ける甕である。突帯は丸く、口縁上端面は平坦に仕上げる。内外面ともにナデ調整である。

土師器

甕（16）口縁はあまり広がらず、外面を膨らませる。端部はわずかに摘み上げる。器壁はやや厚い。頸部からやや下がった位置からケズリを行う。

壺（17）二重口縁の壺で、口縁上端面は内傾させる。胴部内面は削り。他はナデ調整。

136号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。131・135・137号溝と重複し、137号溝より新しく、その他より古い。幅0.9m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

137号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。131・136号溝と重複し、最も古い。幅0.8m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

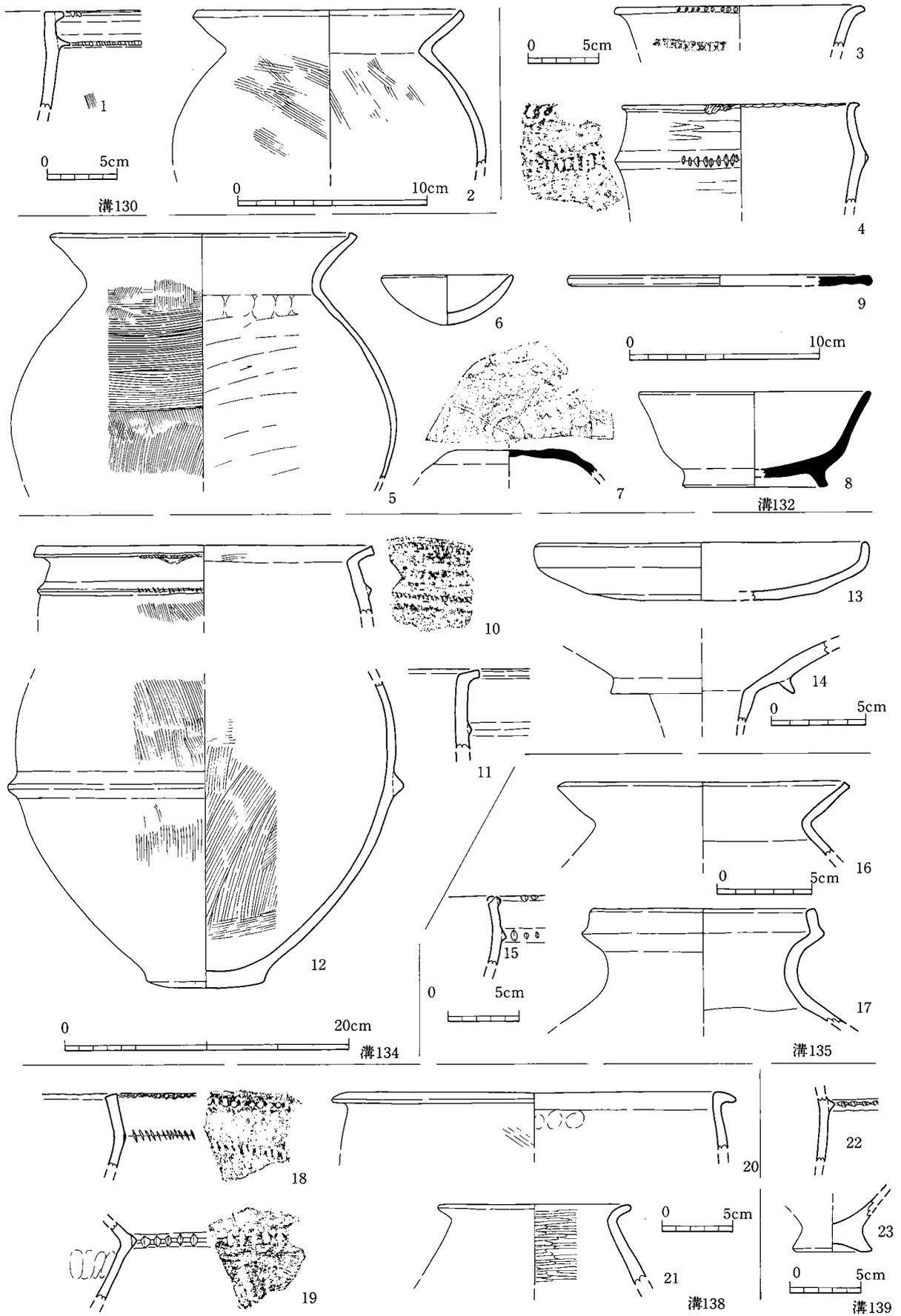
138号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。130・132・134・135・139・140・143号溝と重複し、130・143号溝より新しく、その他より古い。幅0.6m、深さ0.2mである。遺物は弥生土器・片刃石斧（11）が出土している。

出土遺物（第32図）

弥生土器

甕（18～20）胴部をわずかに屈曲させる甕。口縁端部は上端面を内傾させ角張って仕上げるが、突帯の貼り付けはない。口縁端部と屈曲部に刻目を施すが、口縁部のは丸い原体を細かく押し当てている。屈曲部のは鋭い原体である。内外面の調整はナデである。19は胴部を屈曲させる甕。屈曲部を三角突帯状に仕上げ、大きく刻目を施す。内外面の調整はナデで、内面には指頭圧痕が残る。20は甕の口縁部で三角突帯を貼り付けるもの。



第32图 130·132·134·135·138·139号沟出土土器实测图 (1/3·1/4)

壺(21)口縁を強く外反させる壺である。調整は内外面ともに横方向のミガキである。

139号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。134・138・140号溝と重複し、138号溝より新しく、134・140号溝より古い。幅0.8m、深さ0.3mである。遺物は弥生土器・石庖丁(8)が出土している。

出土遺物(第32図)

弥生土器

甕(22・23)22は甕の胴部片である。小さな三角突帯を貼り付け、大きな刻目を施す。内外面の調整はナデである。23は甕の底部。上底を呈する。

140号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。138・139号溝と重複し、138号溝より新しく、139号溝より古い。幅0.4m、深さ0.1mである。中央部分が削平のため、失われる。出土遺物は石庖丁(9)・黒曜石剥片(30)が出土している。

141号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。142号溝と重複し、これより新しい。幅0.5m、深さ0.1mである。遺物は土錘(1)が出土している。

142号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。141号溝と重複し、これより古い。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

143号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。79号土坑、138・141号溝と重複し、79号土坑より新しく、138・141号溝より古い。幅1.2m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

144号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。149号溝と重複し、これより新しい。幅1.7m、深さ0.1mである。途中で直角に折れる。遺物は弥生土器・安山岩スクレイパー(40)が出土している。

出土遺物(図版34、第33図)

弥生土器

甕(1)口縁に三角突帯をもつ甕。外面はハケメ調整で、口縁下に沈線を一条めぐらす。内面の調整はナデ。胎土は1mmの砂粒を含む。

145号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。146・149号溝と重複し、最も新しい。幅は一定せず、多条に広がる。深さは0.1mである。出土遺物はない。

146号溝

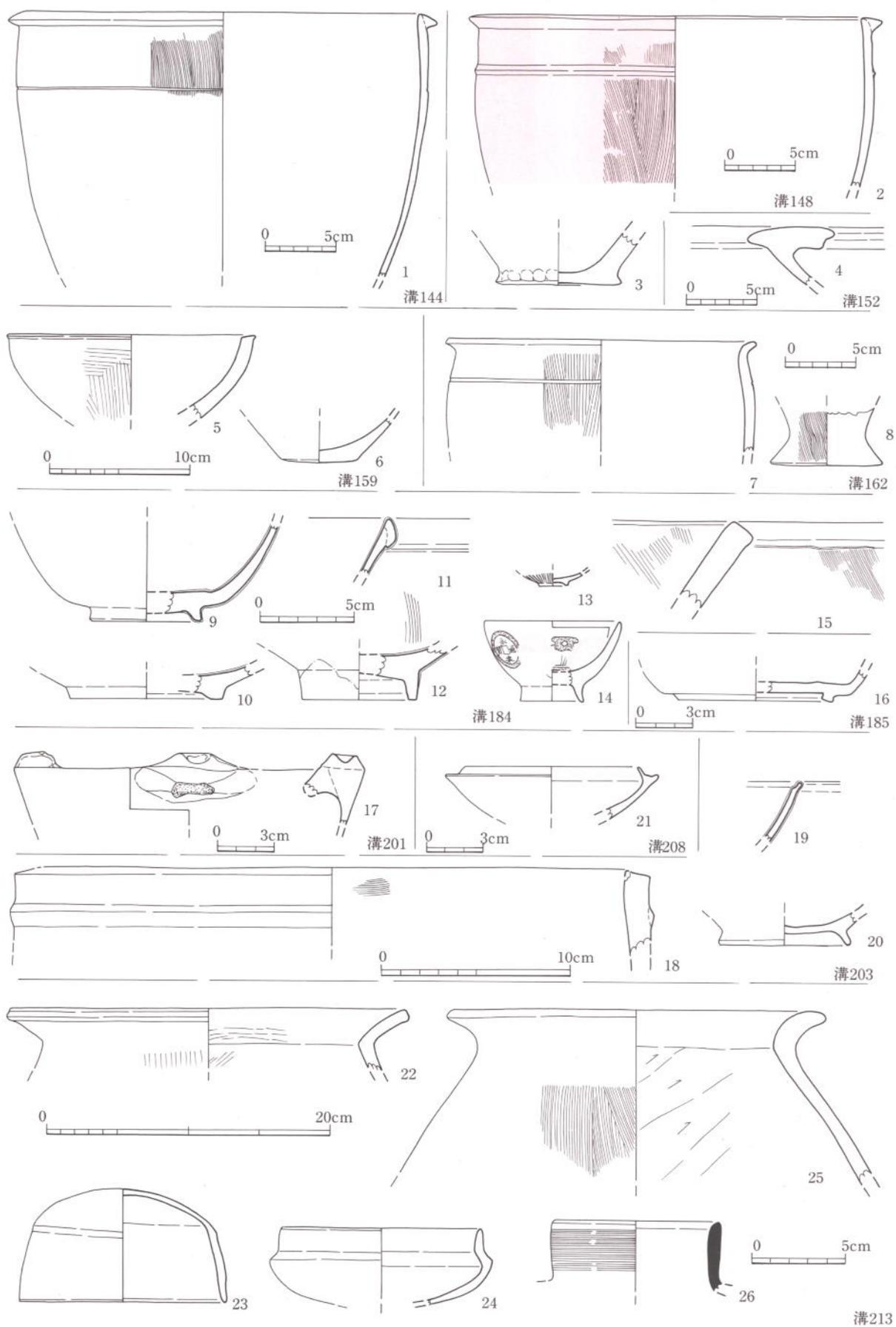
調査区第一遺構面の東側部分で検出した。145号溝と重複し、これより古い。深さは0.1mである。出土遺物はない。

147号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

148号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。149号溝と重複し、これより新しい。幅0.7m、深さ



第33图 144·148·152·159·162·184·185·201·203·208·213号沟出土土器实测图 (1/3·1/4)

0.1mである。途中で直角に折れる。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物（図版34、第33図）

弥生土器

甕（2・3）2は口縁に三角突帯をもつ甕である。口縁上端面を水平に近く仕上げる。外面はハケメで口縁下に小さな三角突帯を貼り付ける。また、外面のみ丹塗を施す。3は甕の底部か。全体にナデ調整である。

149号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。144・145・148号溝と重複し、これらの中で最も古い。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

150号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。幅0.6m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

151号溝

調査区第一遺構面の東側部分で検出した。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

152号溝

調査区第三遺構面の東端部で検出した。幅0.7m、深さ0.2mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物（第33図）

弥生土器

甕（4）中形の甕の口縁部である。胴部大きく張る。

153号溝

調査区第三遺構面の東端部で検出した。幅0.8m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

154号溝

調査区第二遺構面の東側部分で検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

155号溝

調査区第二遺構面の東側部分で検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

156号溝

調査区第二遺構面の東側部分で検出した。幅0.2m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

157号溝

調査区中央付近で検出した。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

158号溝

調査区中央付近で検出した。幅0.4m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

159号溝

調査区中央付近で検出した。幅0.4m、深さ0.1mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物（第33図）

弥生土器

鉢（5）口縁上端面はやや内傾しながら水平に仕上げ、わずかに外側につまみ出す。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。

壺（6）壺の底部か。底はわずかに膨らむ。内外面の調整はナデである。

160号溝

調査区中央付近で検出した。162号溝と重複し、これより古い。幅0.4m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

161号溝

調査区中央付近で検出した。100号土坑と重複し、これより古い。幅0.4m、深さ0.2mである。出土遺物は黒曜石剥片(36)が出土している。

162号溝(図版25-3、第33図)

調査区中央付近で検出した。幅0.7m、深さ0.3mである。土層は斜めに切った位置で実測しているため、幅が広く見えるが、レンズ状に堆積していることが観察できた。101号土坑、160号溝と重複し、101号土坑より新しく、160号溝より古い。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器(第33図)

弥生土器

甕(7・8)7は甕の口縁部。端部を如意形に強く外反させる。外面の調整はハケメで、口縁下に一条の沈線をめぐらす。8は甕の底部。底が厚く、大きくくびれる。平底で、外面の調整はナデである。

164号溝(第25図)

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。調査年度の異なる74号溝と同一のものである。72・75・76・166号溝と重複し、72・75・166より新しく、76号溝より古い。幅0.8m、深さ0.5mである。埋土はレンズ状にシルトが堆積する。出土遺物はない。

165号溝(第30図)

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。72・75号溝と重複し、75号溝より新しく、72号溝より古い。幅0.8m、深さ0.4mである。遺物は細片で図化できなかった。

166号溝(第25・30図)

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。76・164・169号溝と重複し、これらの中で最も古い。幅0.8m、深さ0.3mである。遺物は細片で図化できなかった。

167号溝(第25図)

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。164号溝と重複し、これより古い。幅0.7m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

168号溝

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。76号溝と重複し、これより古い。幅0.4m、深さ0.3mである。途中で直角に折れる。出土遺物はない。

169号溝

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。166号溝と重複し、これより新しい。幅0.5m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

170号溝

調査区第一遺構面の中央付近で検出した。幅0.3m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

171号溝

調査区第二遺構面の中央付近で検出した。幅0.3m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

184号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。幅4.5mで、掘削の年代は不明であるが現代まで使用され、

近年に埋められたものである。両側に石垣が積まれるがその裏込めからビニール等が出土しており、現代に改修が行われたものと考えられる。また、石垣の基礎には松材が使用されている。遺物は、磁器・瓦質土器・土錘(2)・石庖丁(5)が出土している。

出土遺物(第33図)

青磁(9) 碗の底部で、外面は胴部中位までケズリ。畳付まで釉がかかり、その内側は露胎。見込みに段が付く。胎土は灰白色。釉は淡緑褐色で、薄くかけられる。

白磁(10~12) 10は胴部にかけて大きく広がる碗である。外面はケズリだされたものか。露胎である。内面は淡白色の釉がかかる。11は玉縁口縁の白磁。断面に接合痕が観察できる。12は高台の高い底部。畳付の外面中位まで釉がかかる。内面には櫛描文が施される。

磁器(13・14) 13は紅皿である。白色の釉がかけられる。14は小碗。外面に銭をあしらう。永楽通宝、乾元重宝、布銭が描かれる。同種の文様が浮羽バイパス船越二ノ上遺跡においても出土しているが、畳付外面に沈線が無い点で異なる。

瓦質土器(15) 鉢の口縁部。内外面の調整はナデである。

185号溝(第34図)

調査区第一遺構面の西側で検出した。184号溝と重複し、これより古い。幅1.0m、深さ0.4mである。遺物は須恵器が出土している。

出土遺物(第33図)

須恵器

坏(15) 小さな高台のつく坏。内外面の調整はナデである。

186号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。187号溝と重複し、これより古い。幅0.6m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

187号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。186・188・198号溝と重複し、これらの中でもっとも新しい。幅0.3m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

188号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。187号溝と重複し、これより古い。幅0.2m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

189号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。188号溝と重複し、これより新しい。幅0.6m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

190号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・191・192号溝と重複し、191・192号溝より新しく、184号溝より古い。幅0.6m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

191号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・190号溝と重複し、これらの中で最も古い。途中で大きく広がり幅1.8m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

192号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・188・190号溝と重複し、188号溝より新しく、その

他より古い。幅0.9m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

193号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・187・189・192号溝と重複し、これらの中で最も古い。幅0.4m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

194号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・196号溝と重複し、196号溝より新しく、184号溝より古い。幅0.6m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

195号溝（図版26-1）

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・195・196号溝と重複し、これらの中で最も古い。幅0.7m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

196号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・194・195号溝と重複し、195号溝より新しく、その他より古い。幅0.8m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

197号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

198号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

199号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。200・203号溝と重複し、200号溝より新しく、203号溝より新しい。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

200号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。199号溝と重複し、これより古い。幅0.2m、深さ、0.1mである。出土遺物はない。

201号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・203号溝と重複し、これらより古い。幅0.5m、深さ0.1mである。遺物は、素焼きが出土している。

出土遺物（第33図）

七輪（17）素焼き、口縁部に粘土を貼り付ける部分が1箇所残る。福岡城跡の報告書で同様のものが出土しており、「博多七輪」として報告されている。

202号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。203号溝と重複し、これより古い。幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

203号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。200・201・202・204・208号溝と重複し、204号溝より古く、その他より新しい。幅0.8m、深さ0.2mである。遺物は瓦質土器、磁器、土師器が出土している。

出土遺物（第33図）

瓦質土器

鉢（18）口縁上端部を外傾に仕上げる。外面に小さな三角突帯を貼り付ける。外面の調整はナ

デ。内面にはわずかにハケメが残る。

磁器

椀 (19) 椀の口縁部であろうか。口縁内面端部をくぼめる。

土師器

椀 (20) やや高台の高い椀の底部である。

204号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。203・208・213・216号溝と重複し、これらの中で最も新しい。幅0.7m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

205号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.5m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

206号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。幅1.1m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

207号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.2m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

208号溝 (第34図)

調査区第一遺構面の西側で検出した。幅0.9m、深さ0.3mである。遺物は須恵器が出土している。

出土遺物 (第33図)

須恵器

坏身 (21) 立ち上がりは小さく内傾する。内外面の調整はナデである。

209号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。210・214号溝と重複し、最も新しい。幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

210号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。209・214・216号溝と重複し、214号溝より新しく、その他より古い。幅0.7m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

211号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。深さ0.1mである。出土遺物はない。

212号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。213号溝と切り合いが確認できなかったため、同時に存在していたものと考えられる。幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

213号溝 (図版26-2・3、第34図)

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・204・212・216号溝と重複し、212号溝は同時存在で、その他より古い。幅1.8m、深さ0.7mである。遺物は弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

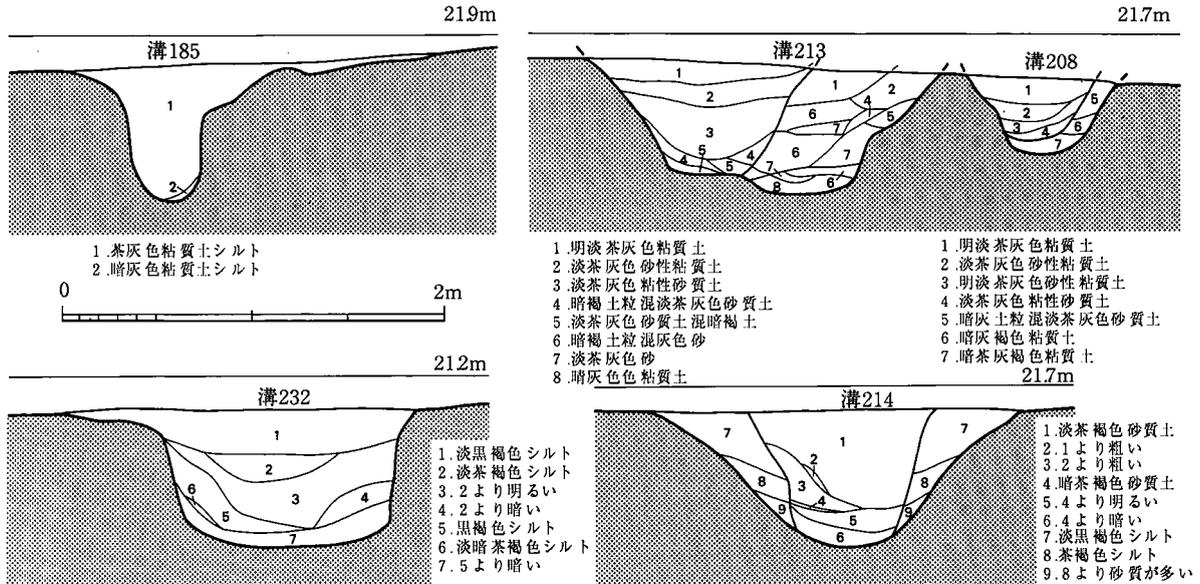
出土遺物 (図版34、第33図)

弥生土器

甕 (22) 口縁がわずかに外反する甕の口縁。内外面の調整はハケメである。

土師器

坏 (23・24) 23は深めの坏蓋。肩部に段をもち、底から直線的に広がる。内外面の調整はナデである。24は坏身。内外面の調整はナデである。



第34図 185・208・213・214・232号溝出土土器実測図 (1/40)

甕 (25) 胴部の張る甕。外面はハケメ調整。口縁付近はナデ。内面はケズリを施す。

須恵器

壺 (26) 直口壺の口縁部である。外面にカキメを施す。

214号溝 (図版27-1・2、第34図)

調査区第一遺構面の西側で検出した。209・210・216号溝と重複し、これらの中で最も古い。幅20m、深さ0.6mである。遺物は土師器、須恵器が出土している。

出土遺物 (図版34、第35図)

土師器

甕 (1) 布留系の甕の口縁部である。口縁端部は丸く摘み上げる。内外面の調整はナデである。

坏 (2) 坏身である。内外面の調整はナデを施す。

須恵器

坏身 (3) 立ち上がりが小さく内傾する坏身。口縁端部は全体に打ち欠く。底部にヘラ記号を施す。

215号溝

調査区第一遺構面の西側部分で検出した。幅0.5m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

216号溝

調査区第一遺構面の西側で検出した。184・204・211・210・213・214号溝と重複し、210・213・214号溝より新しく、その他より古い。幅0.5m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

217号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

218号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

219号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

220号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

221号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.4m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

222号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.4m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

223号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.4m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

224号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

225号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。幅0.2m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

226号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。幅0.5m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

227号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。258号溝と重複し、これより新しい。幅1.1m、深さ0.4mである。出土遺物はない。

228号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。229号溝と重複し、これより新しい。幅2.3m、深さ0.3mである。途中で直角に折れる。出土遺物はない。

229号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。228・230号溝と重複し、これらより古い。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

230号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。229・232号溝と重複し、229号溝より新しく、232号溝より古い。幅0.5m、深さ0.3mである。途中で直角に折れる。出土遺物はない。

231号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

232号溝（図版27-3、第34図）

調査区第二遺構面の西側で検出した。230・233・234号溝と重複し、これらの中で最も新しい。幅2.0m、深さ1.0mである。遺物は土師器が出土している。

出土遺物（図版34、第35図）

土師器

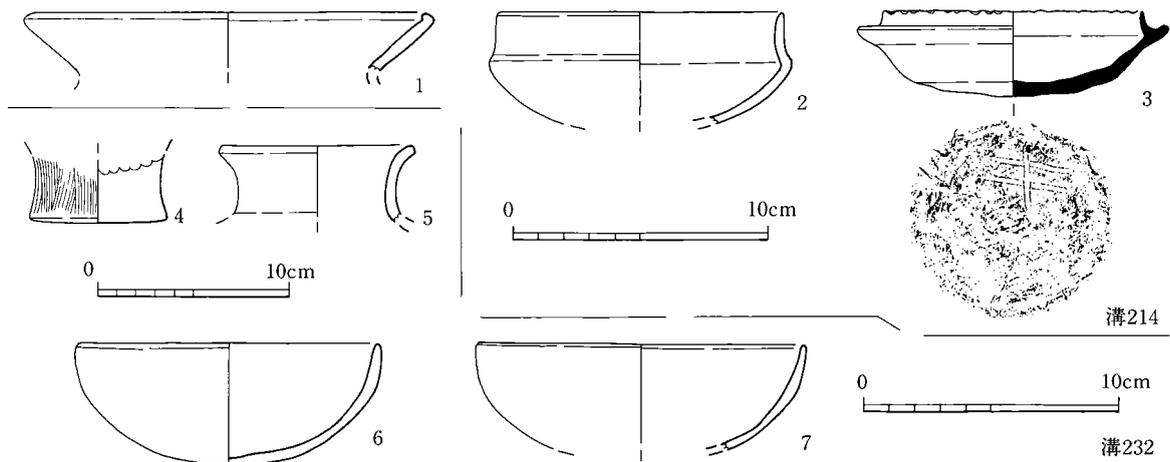
椀（6・7）いずれも椀で、内外面の調整はナデ。胎土は密である。

233号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。232号溝と重複し、これより古い。幅0.2m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

234号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。232・237・238号溝と重複し、これらの中で最も古い。



第35図 214・232号溝出土土器実測図 (1/3・1/4)

幅0.5m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

235号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。184・237・238号溝と重複し、237・238号溝より新しく、184号溝より古い。幅0.6m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

236号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。幅0.6m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

237号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。184・234・235・238号溝と重複し、234号溝より新しく、その他より古い。幅0.9m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

238号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。幅1.5m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

239号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。幅0.7m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

240号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

241号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

242号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.6m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

243号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

244号溝

調査区第二遺構面の西端部で検出した。205・207号溝と重複し、これらより新しい。幅0.8m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

245号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。184号溝と重複し、これより古い。幅0.7m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

246号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。184・245・247・249・250・254号溝と重複し、184号溝より古く、その他より新しい。幅0.7m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

247号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。238・246・249・253・254号溝と重複し、238・253・254号溝より新しく、その他より新しい。幅0.9m、深さ0.4mである。出土遺物はない。

248号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。238・249・250・252・254号溝と重複し、238・250・252・254号溝より新しく、249号溝より古い。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

249号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。238・247・248・250・254号溝と重複し、これらの中で最も新しい。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

250号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。238・246・248・249・254・255号溝と重複し、254号溝より新しく、その他より古い。幅1.0m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

251号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

252号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。248号溝と重複し、これより古い。幅0.5m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

253号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。247・254号溝と重複し、これらより古い。幅0.4m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

254号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。246・247・248・249・250号溝と重複し、253号溝より新しく、その他より古い。幅0.6m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

255号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。250号溝と重複し、これより新しい。幅0.6m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

256号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。122号竪穴住居と重複し、これより古い。幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

257号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。258号溝と重複し、これより新しい。深さ0.2mである。出土遺物はない。

258号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。227・257号溝と重複し、これらより古い。幅0.4m、深さ0.1

mである。出土遺物はない。

259号溝

調査区第二遺構面の西側で検出した。238号溝と重複し、これより古い。幅0.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

6. 道路状遺構・橋脚状遺構

道路状遺構（巻頭図版3、図版28・29、第36図）

調査区第一遺構面の西側で検出した。いわゆる波板状圧痕と呼ばれるもので、楕円形の掘り込みが連続する。数条の列が確認されているが、わかりやすいものは3条あり、この説明を行う。A-A'列は長楕円の掘り込みであり、埋土は白灰色シルトである。B-B'列は断面D~Zでわかるように中央部にテラスをもち、両側を深く掘り込んでいる。埋土は締まっており、底部には稀に、小さい川原石が検出された。M~Xではこの遺構に伴うと思われる溝が検出されている。C-C'列はA-A'列と同じ形状を呈するが、列を同じくしないものである。近辺に溝が数条走るが、波板状圧痕との関係はないと思われる。遺物は須恵器、白磁が出土している。

出土遺物（第37図）

須恵器

甕（1）No1の位置で出土した。大甕の胴部である。外面は格子目のタタキ。内面は同心円文の当具痕が残る。焼成は良好である。胎土は0.5mmの砂粒を含む。

白磁

椀（2）No2~4の位置で出土したものが接合した。口縁部片で内面に一条の沈線がめぐる。胎土は粗い。

橋脚状遺構（図版29・30、第38図）

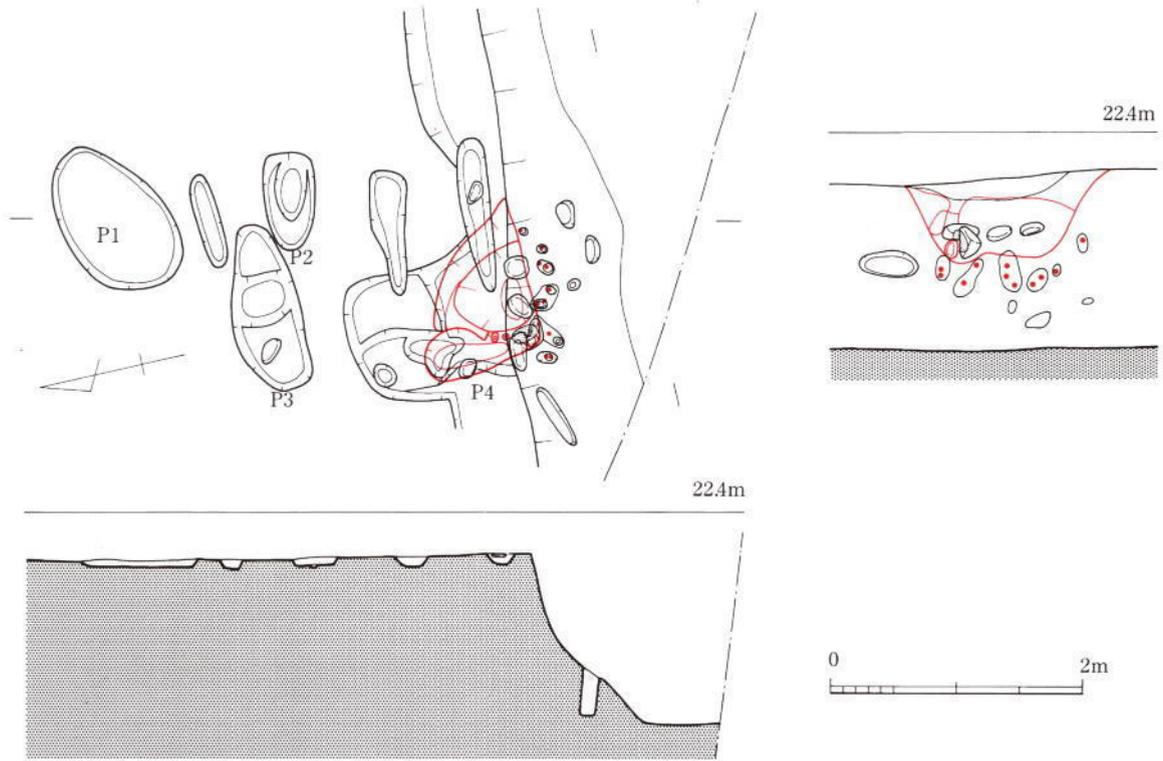
調査区第一遺構面の東端部で検出した。69号溝に向かい、波板状圧痕が直交する。圧痕の掘り込みの埋土は締まらない。溝の壁部分は大きく掘り込まれ、内部には川原石が数個検出された。また、底部付近で粘土塊を検出している。その掘り込みに沿うように溝の壁面にピットが掘り込まれる。ピットの内部には幾つかの径5cmの柱痕と考えられるものが確認できたが、非常に細い。橋脚の脚部分になるものであろうか。遺物は出土していないが、69号溝に伴うものである。



第37図 道路状遺構出土土器実測図（1/3）



第36图 道路状遺構実測図 (1/100)



第38図 道路状・橋脚状遺構実測図 (1/60)

7. ピット・遺構面・包含層出土土器

ピット出土土器 (第39図)

弥生土器

甕 (1・2) 1は三角突帯をもつ甕の口縁部。口縁にかけてすぼまる器形。外面の調整はハケメで口縁下に一条の沈線を施す。2は甕の底部である。やや上底である。

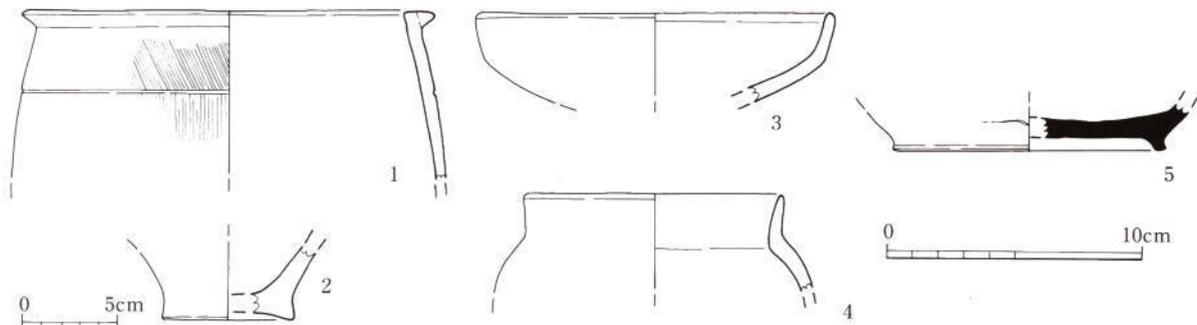
土師器

椀 (3) 浅い椀である。器壁は厚い。内外面の調整はナデである。

甕 (4) 直口の口縁をもつ甕。内外面の調整はナデである。

須恵器

坏 (5) 高台がわずかにふんばる坏である。



第39図 ピット出土土器実測図 (1/3・1/4)

遺構面・包含層出土遺物（図版34・35、第40～45図）

弥生土器

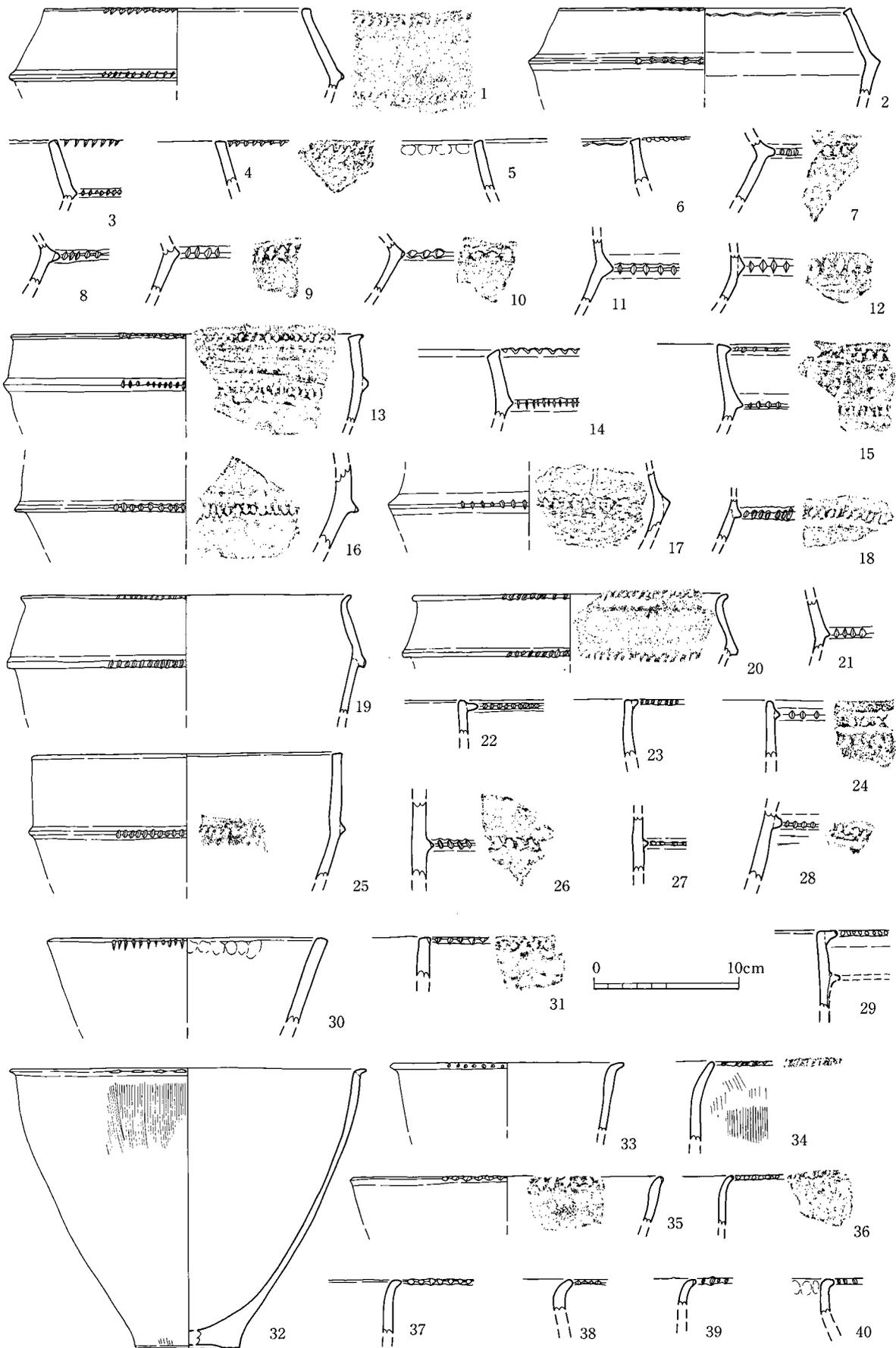
甕（1～65・67～77）1～12は胴部が強く屈曲する甕である。1～6は口縁端部を角張って仕上げ、直接、刻目を施す。1の屈曲部には煤が付着する。5の口縁内面には指頭圧痕が残る。13～18は屈曲の強くないもの。14は口縁端部を突帯状に仕上げる。19～21は如意口縁で胴部突帯が下向きにつくもの。19は見かけ上貼り付け突帯に見えるが接合時に成形されたものである。22は尖った突帯を貼り付ける。24は口縁よりやや下った位置に三角突帯を貼り付けている。25～29は屈曲の無いもの。30・31は素口縁のもの。31の口縁内面には指頭圧痕が残る。32～40は如意口縁のもの。32は口縁が強く外反する。胴部以下には煤が付着する。40の口縁内面には指頭圧痕が残る。41～44は口縁に三角突帯を貼り付けるもの。41は口縁上端面を水平に仕上げる。42は三角突帯が剥離しており、その面でハケメ調整が観察できる。43の内外面の調整はナデ。44は口縁に被せるように突帯を貼り付けており、突帯下には指頭圧痕が残る。45・46は如意口縁で、口縁下に一条の沈線をめぐらすもの。外面の調整はハケメ。内面の調整はナデである。47～53は三角突帯を貼り付け、口縁下に一条の沈線をめぐらすものである。48の外面には煤が付着している。49は突帯を口縁上部に貼り付ける。50は化粧土もしくは丹塗の可能性ある。胴部には煤が付着している。52・52は小形の甕である。54～65は底部。54・55・57はくびれた部分に圧痕が残る。62は大きく上底となる。67～71は「く」字形口縁の甕である。68の内面は粗いハケメ。69の頸部内面には刻目が施される。70は口縁下に三角突帯を貼り付ける。72・73は鋤先口縁の甕である。口縁部は大きく張る。内外面の調整はナデである。74・75は小形の甕。外面の調整はナデである。76は後期の甕の口縁である。内外面の調整はハケメである。77は甕か。内外面の調整はナデである。

蓋（66）やや大きめの蓋。口縁端部は角張って仕上げる。外面の調整は粗いハケメ。内面は横方向のミガキが密に施される。内面の一部が黒変する。

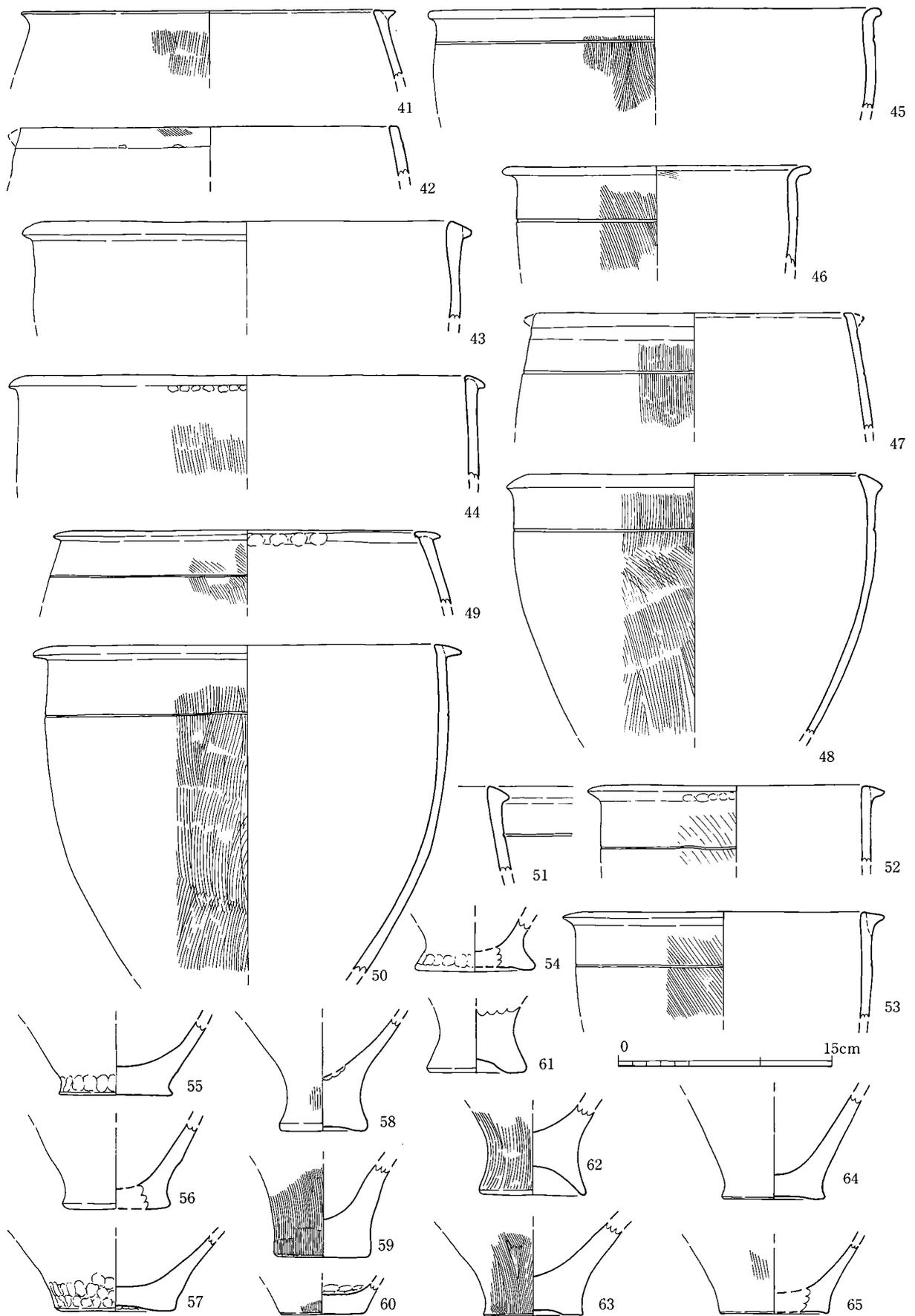
鉢（78～84）78は縄文の深鉢の可能性ある。口縁は強く外反し、胴部で屈曲する。外面の調整はナデ、内面の調整は粗いハケメである。79は胴部を屈曲させる小形の鉢。口縁部上端面をやや内傾に仕上げる。内外面の調整はナデ。80の内面は横方向のミガキ。外面全体には煤が付着している。81は屈曲の弱い甕。口縁端部は丸く仕上げる。内外面の調整はナデ。82は口縁部を強く如意形に外反させる甕。胴部は口径よりやや張る。内外面の調整はナデである。83・84は口縁を外反させる小形の鉢である。

不明土器（85）胴部に粘土塊が貼り付けられる土器。小片で全体の器形は不明である。粘土塊は指で押さえつけるように成形される。胎土には0.5mmの砂粒を含む。

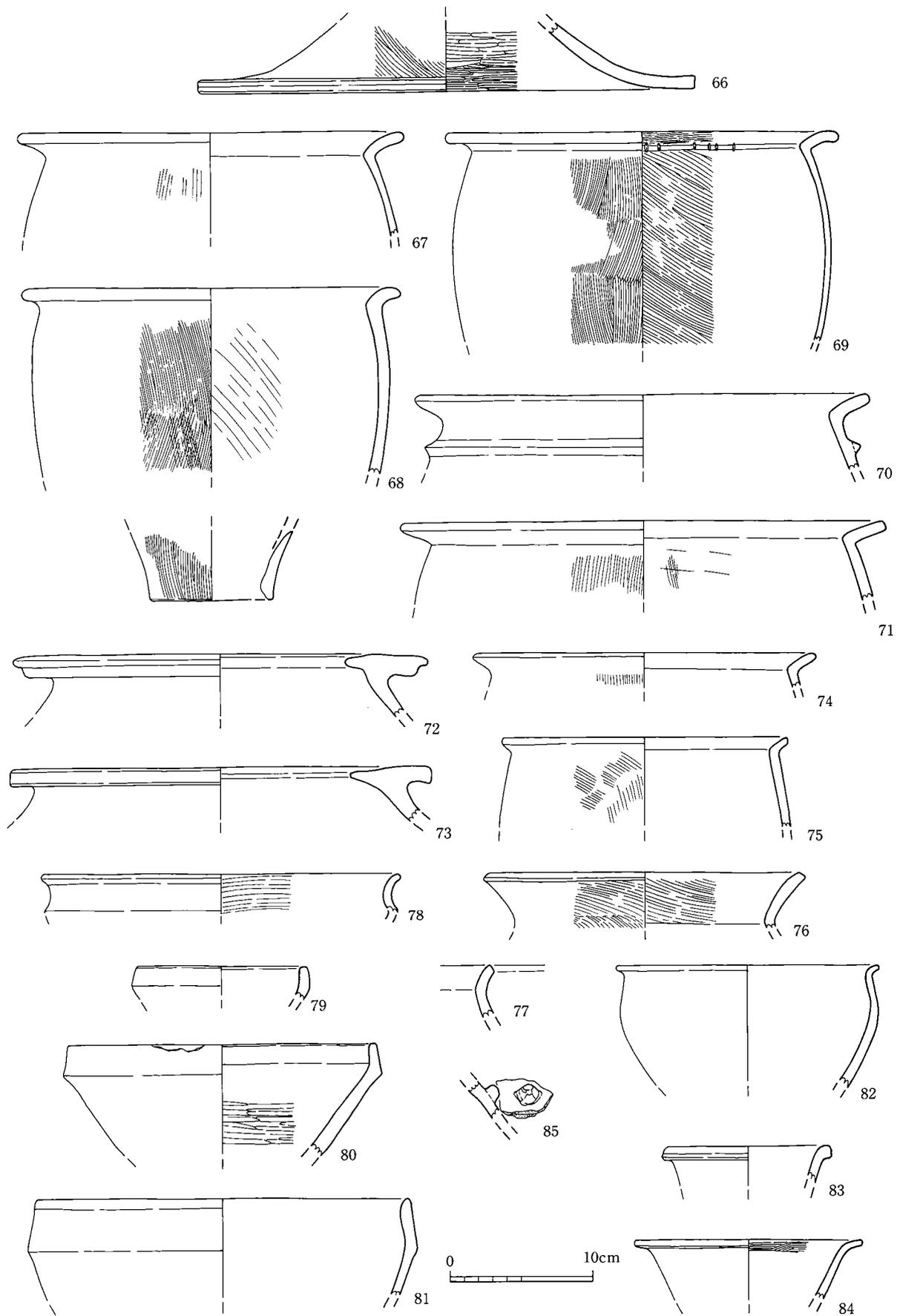
壺（86～101）86は口縁が外反する小壺。口縁端部の肥厚は見られない。外面は縦方向のミガキ、内面はナデであるが縦の指頭圧痕が連続して残る。口縁付近もナデ調整。黒塗りであろうか。87は口縁が強く外反する壺の口縁。内外面の調整はハケメである。88は小壺である。口縁は外反し、肩部に一条の沈線をもち、以下胴部となる。内外面の調整はナデである。89は壺の胴部である。内外面はミガキ調整で頸部と胴部の境に小さな三角突帯を貼り付ける。90は頸部と胴部の境に二条の沈線を有する壺。内外面の調整はナデである。91は胴部に山形文と二条の沈線を施す壺の胴部である。内外面の調整はナデである。92の外面の調整はハケメの後、ナデ。内面はナデである。93～100は壺の底部。93は薄い円盤状でやや上底。内面には指頭圧痕が残る。94の外面は縦方向のミガキ、内面上位は横ミガキ、下位はナデである。胴部はまっすぐに立ち上がる。95は



第40图 遺構面・包含層出土土器実測图① (1/4)



第41図 遺構面・包含層出土土器実測図② (1/4)



第42図 遺構面・包含層出土土器実測図③ (1/4)

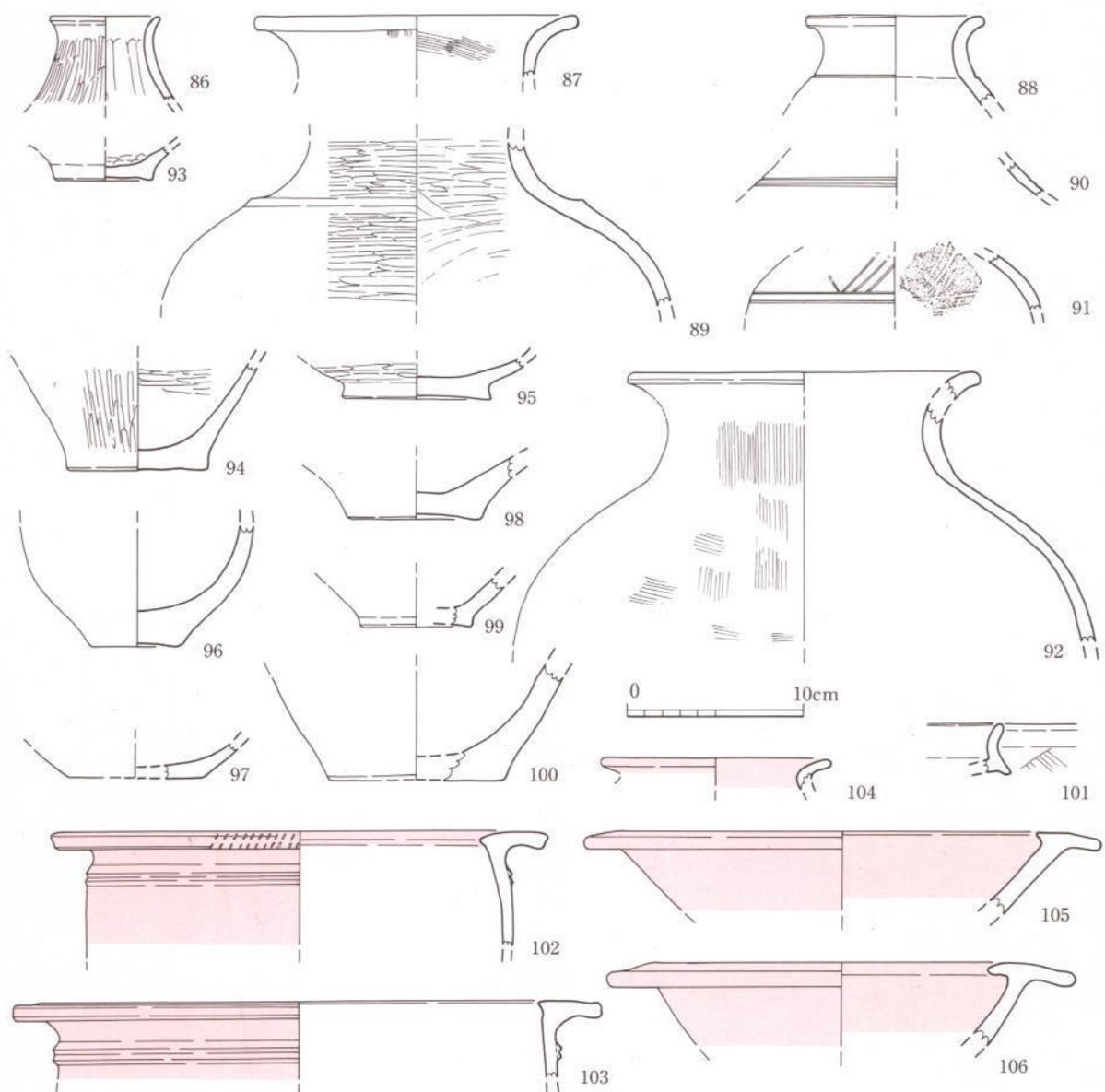
円盤状の底部に大きく広がる胴部をもつ。わずかに上底で、外面の調整はミガキである。96は球形の胴部を持つ壺。底部は厚い。内外面の調整はナデである。97は薄い底部で、内外面の調整はナデ。98はわずかに上底で胴部が大きく広がる。99は壺の底部であろうか。内外面の調整はナデである。101は二重口縁壺の口縁部。内外面の調整はナデで、外面には鋸歯文を施す。

丹塗土器

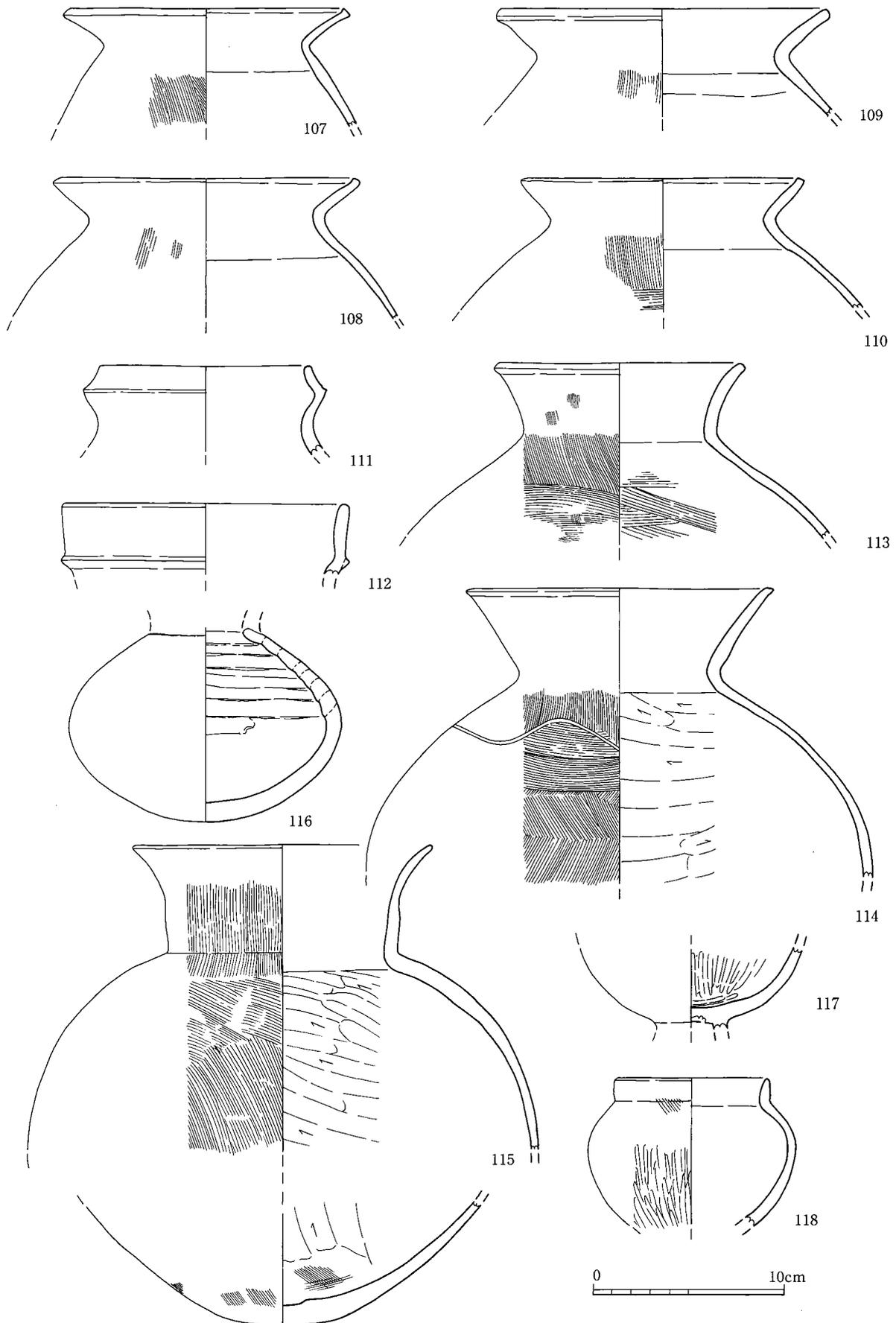
甕 (102・103) いずれも口縁が外側に大きく発達した甕。いずれも口縁下にみかけ二条のを貼り付ける。102は口縁外端部に刻目を施し、内外面の調整はナデ。外面と口縁上端面に丹塗を施す。103は外面のみに丹塗。

壺 (104) 口縁を強く外反させる小形の壺。全体にナデ調整で内外面に丹塗を施す。

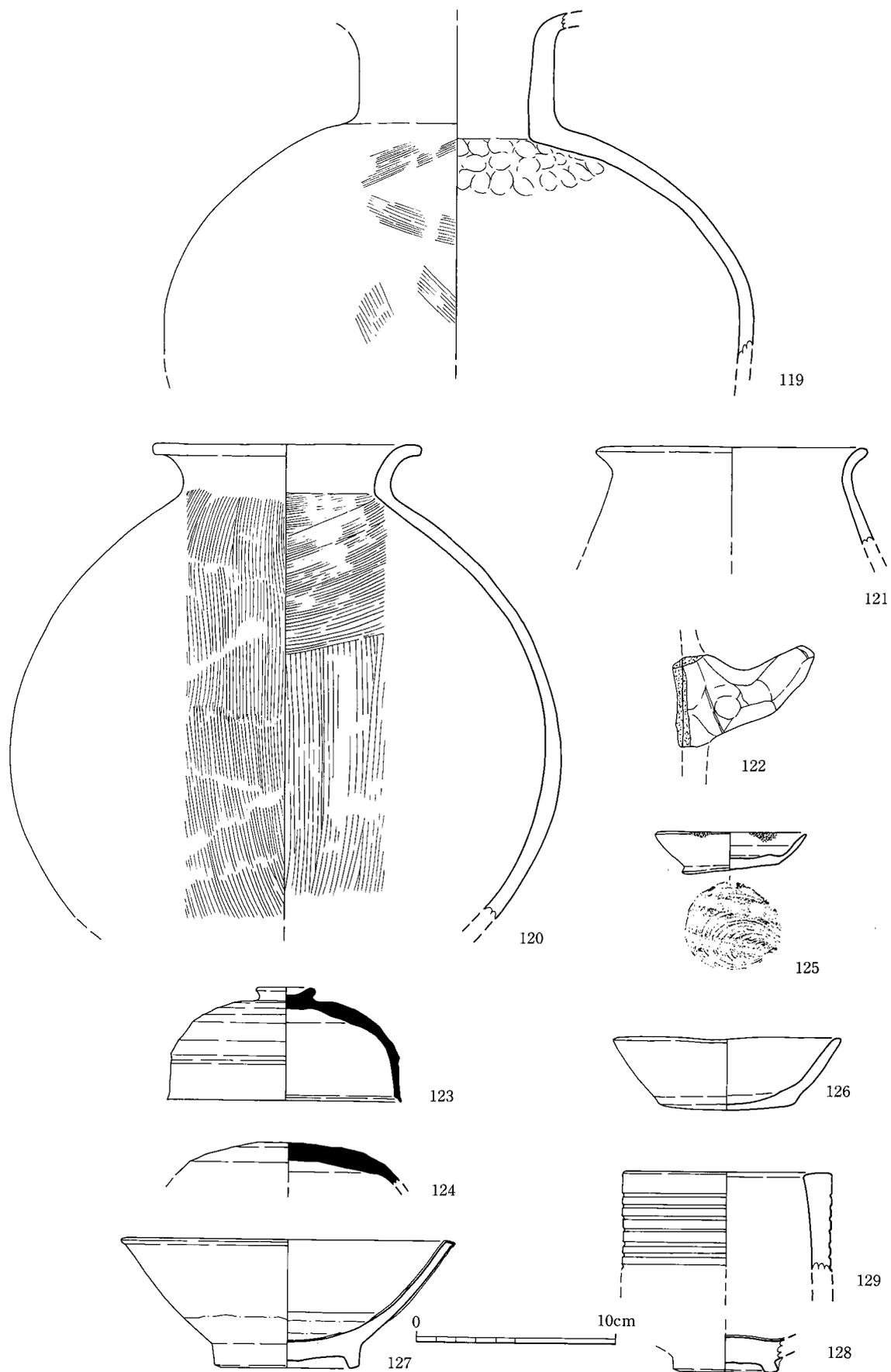
高坏 (105・106) 105は口縁が外側に大きく発達した高坏の坏部。上端面はわずかに外傾する。内外面の調整はナデで、全面に丹塗を施す。106は口縁が鋤先状に発達した高坏の坏部。口縁上



第43図 遺構面・包含層出土土器実測図④ (1/4)



第44図 遺構面・包含層出土土器実測図⑤ (1/3)



第45図 遺構面・包含層出土土器実測図⑥ (1/3)

端面は大きく外傾する。内外面の調整はナデで全面に丹塗を施す。

土師器

甕 (107~114・120・121) 107~110は布留系の甕である。いずれも内面のかなり下がった位置からケズリを行う。107は口縁端部を摘み上げる。108はわずかに摘み上げるが、端部は平坦に近い。109は端部の仕上げが丸く、器壁が厚い。110は口縁端部がかなり平坦化している。111・112は二重口縁の甕。111の口縁部は内傾する。内外面の調整はナデ。112は直口の口縁をもち、外面屈曲部を突帯状に仕上げる。内外面の調整はナデである。113・114は胴が大きく張り、頸部は細く、口縁が広がる甕。113は内外面ともにハケメ調整。114は肩部に一条の波状文を施す。120は口縁の大きく外反する甕。内外面の調整はハケメである。121は甕であろうか。内外面の調整はナデである。

壺 (115・116・118・119) 115は直口で口縁端が広がる壺である。底部はレンズ状を呈する。外面の調整はハケメ。内面の調整は底部付近がハケメの後、ナデ、それより上はケズリである。116は大きく開く口縁をもつ壺か。内面肩部には接合痕がくっきりと残り、断面から内傾接合が観察できる。内外面の調整はナデである。118は短頸の壺。口縁はわずかに外反する。外面の調整は底部付近に縦方向のミガキを行う。119は二重口縁壺の頸部から胴部である。肩部内面にたくさんの指頭圧痕がつく。

高坏 (117) 深い椀状の坏部をもち、短い脚の付く高坏であろう。内外面の調整はミガキである。

甑 (122) 甑の把手部分である。胎土は1~2mmの砂粒を含む。

小皿 (125) 底部糸切りの小皿である。口縁部に炭化物が付着している。灯明皿か。

皿 (126) 底部がわずかにレンズ状となる皿。内外面はナデ、底部調整は摩滅で不明。

須恵器

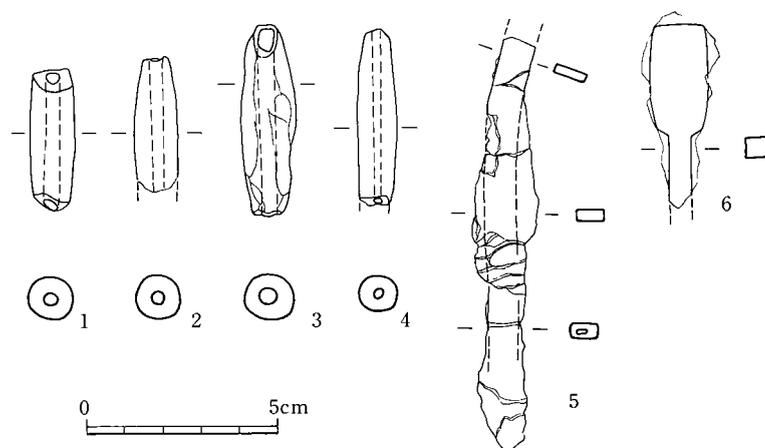
蓋 (123・124) 123は高坏の蓋であろう。肩部に段を持つ。124は坏蓋で外面は回転ケズリを施す。

白磁

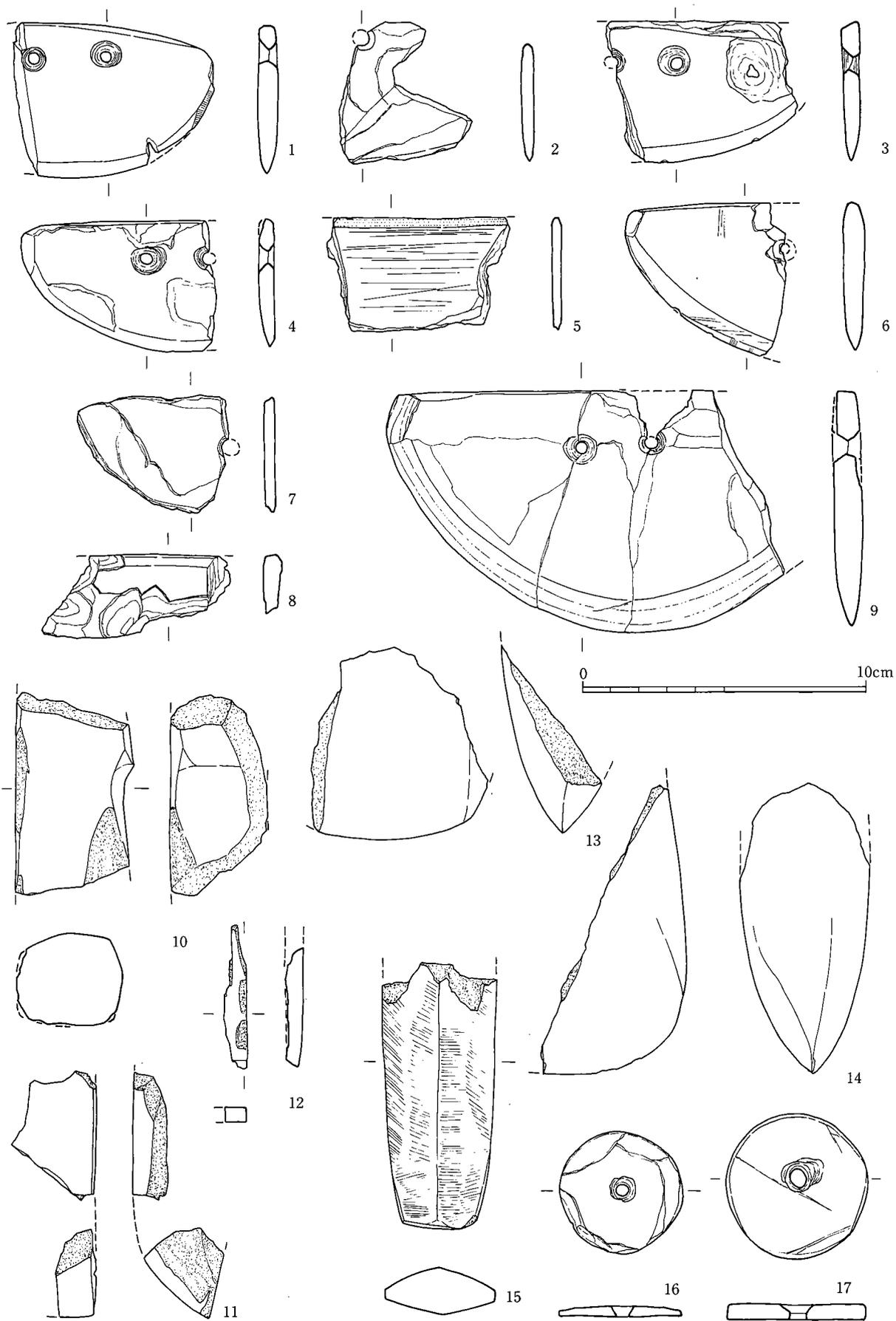
椀 (127) 体部はわずかに内湾しながら伸び、口縁端部は水平に仕上げる。蛇の目釉剥ぎで、そのわずか上位で沈線がめぐる。底部付近は露胎である。胎土は粗い。Ⅷ類か。

青磁

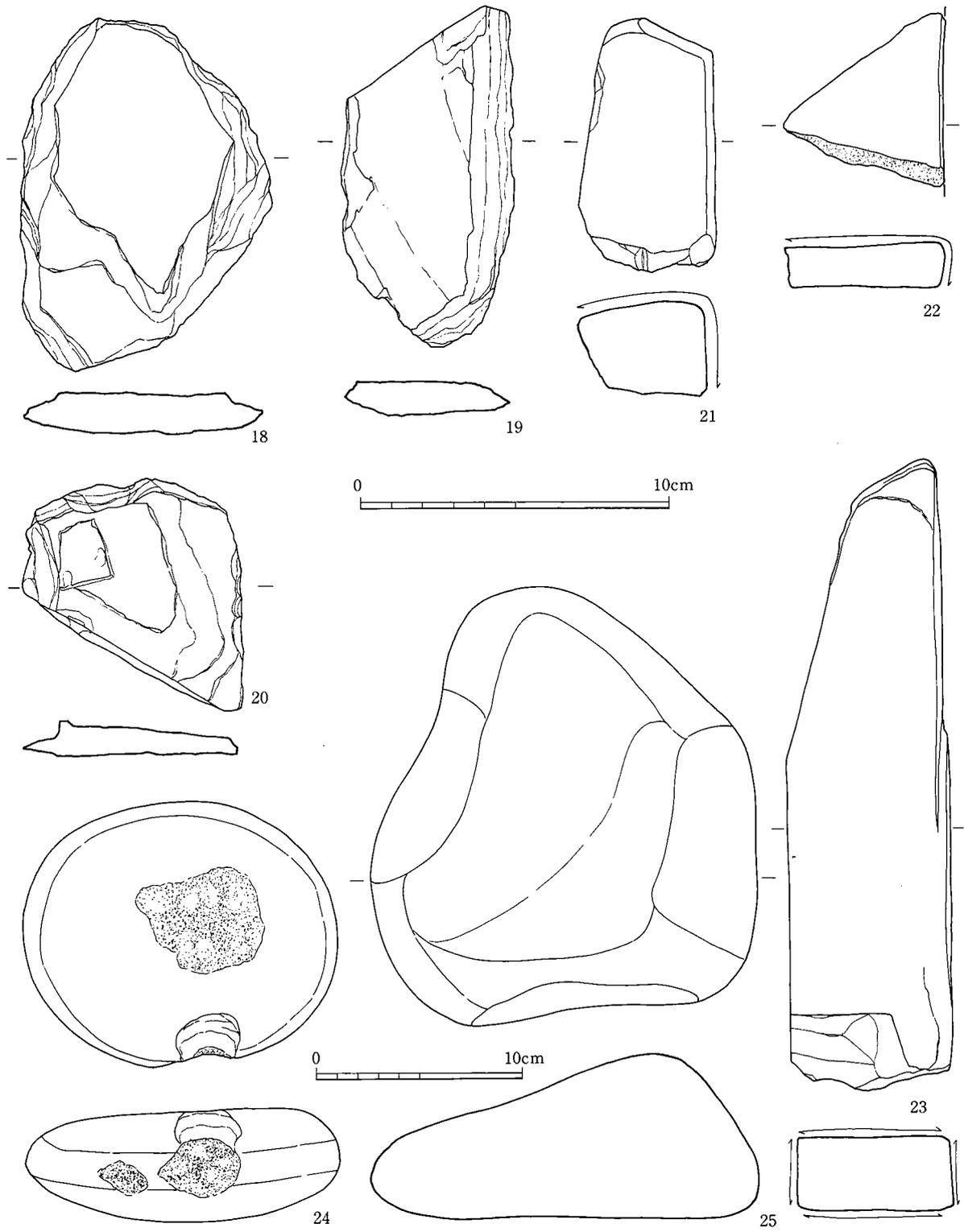
椀 (128) 低い高台で厚く豊付の半分まで施釉される。龍泉窯系。



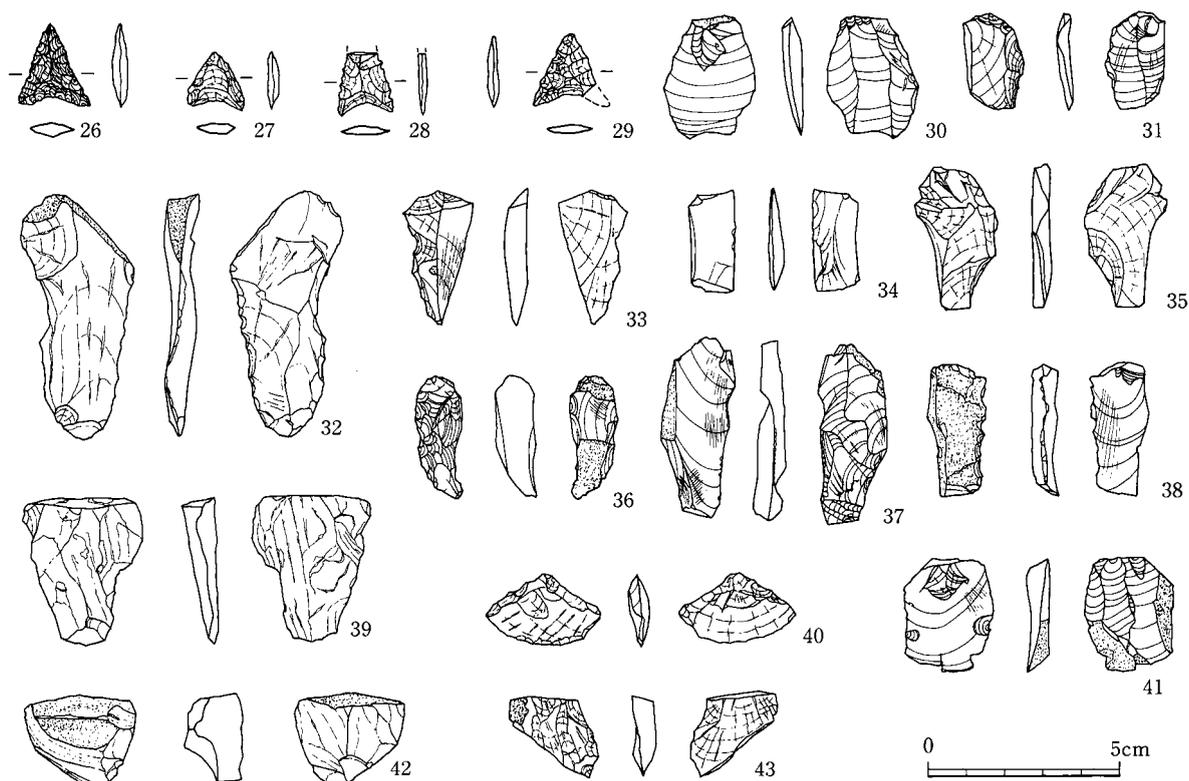
第46図 出土土製品・鉄製品実測図 (1/2)



第47图 出土石製品実測図① (1/2)



第48図 出土石製品実測図② (1/2・1/3)



第49図 出土石製品実測図③ (1/2)

陶器

壺 (129) 直口の壺か。口縁上端面はやや内傾し。外面には深い沈線が施される。胎土は1mmの砂粒を含む。釉は赤褐色である。近現代か。

8. 補遺

ここでは、『船越高原遺跡』 I・IIで報告し忘れた土器、土製品、鉄製品、石器について掲載する。以下、説明したい。

4号土坑出土土器 (第50図)

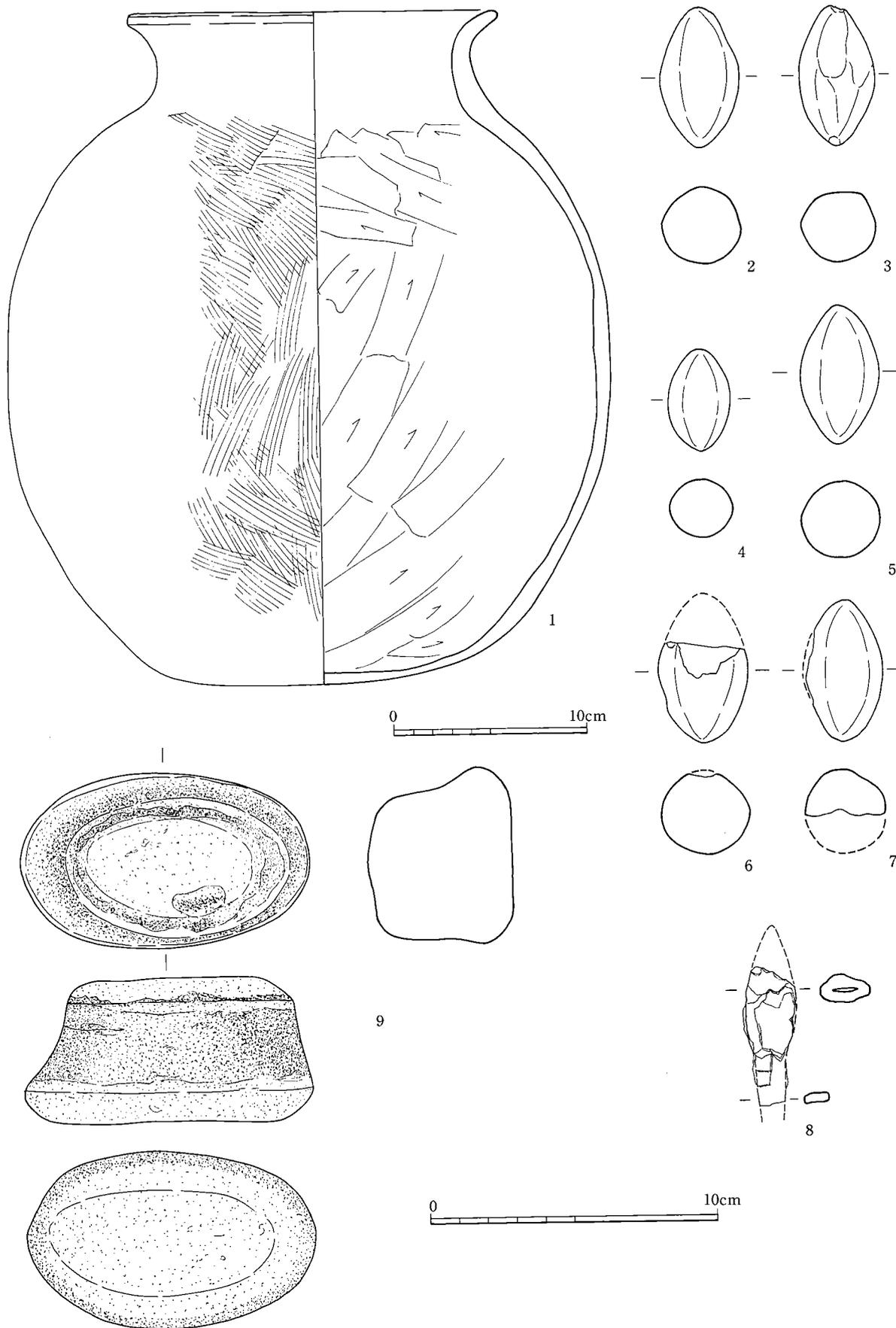
土師器

口縁は外反するもので、やや長胴気味で大きく張る。外面の調整はハケメ、内面の調整はケズリである。

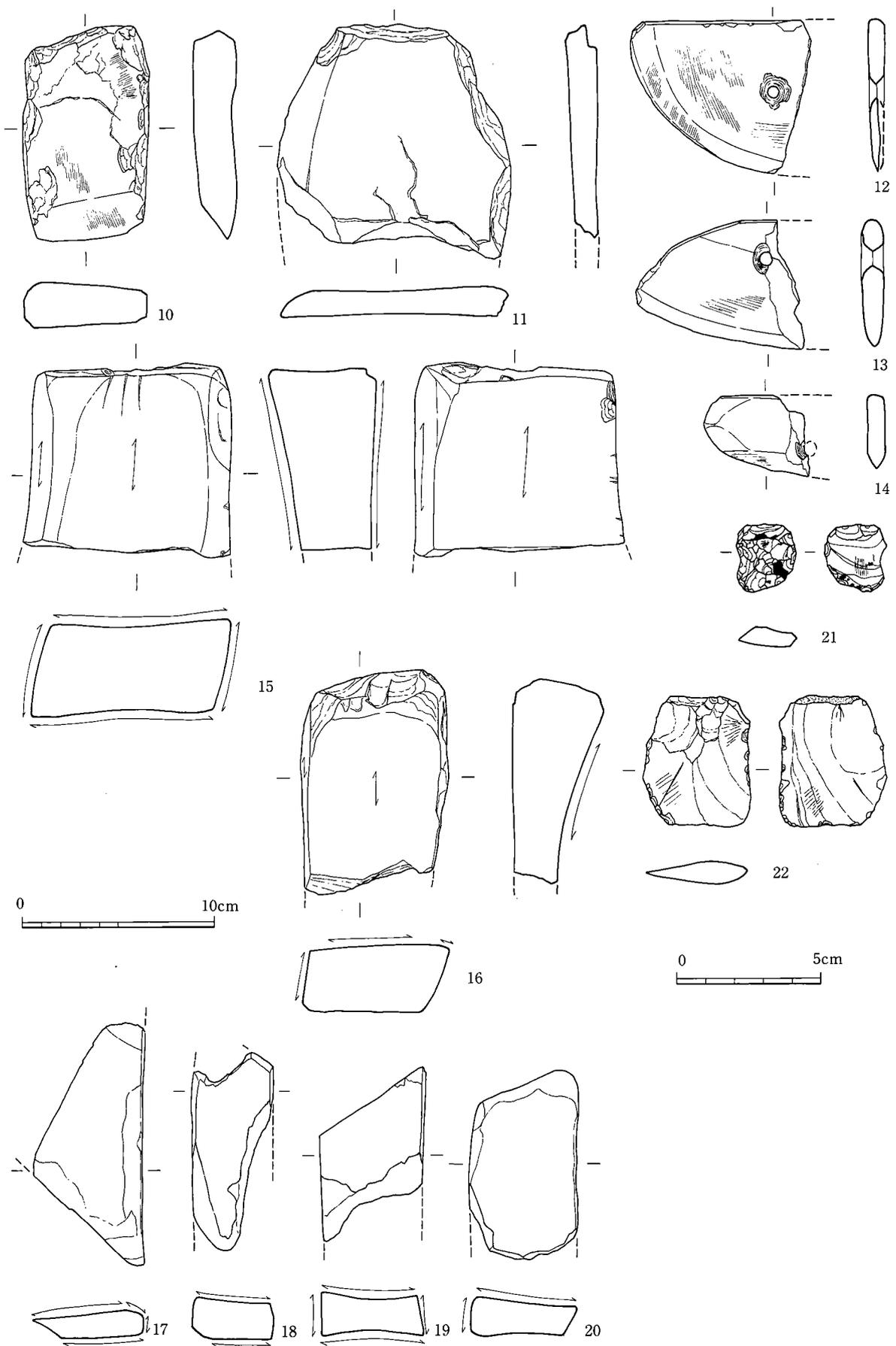
石製品 (第50図)

石冠状石製品

安山岩製で長さ100cm、幅62cm、高さ50cmである。形態は石冠に類似する。上面、下面は擦過のため、平坦になる。中央のくびれは人為的な痕跡は認められず、軟質の部分のみが風化してこのような形状になったものであろう。



第50図 I区出土土器・土製品・石製品・鉄製品実測図(1/2・1/3)



第51图 I区出土石製品实测图 (1/2·1/3)

出土土製品観察表

挿図番号	種類	出土遺構	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
1	土錘	141号溝1		11	2	4	
2	土錘	184号溝1	50	11	1	4	
3	土錘	攪乱		12	15	7	
4	土錘	表採		9	10	4	

出土鉄製品観察表

挿図番号	種類	出土遺構	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
5	鉄鏃	58号土坑		8	4		
6	鉄鏃	103号土坑No.1		6	5		

出土石製品観察表

挿図番号	種類	出土遺構	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	石材
1	石庖丁	141号溝1		5	7	41	凝灰岩
2	石庖丁	184号溝1			4	10	片岩
3	石庖丁	攪乱		50	6	37	頁岩
4	石庖丁	表採		47	6	28	頁岩
5	石庖丁	184号溝			3	18	片岩
6	石庖丁	表採			8	31	凝灰岩
7	石庖丁	落ち込み			4	14	片岩
8	石庖丁	139号溝			7	17	泥岩
9	石庖丁	140号溝		6	10	156	頁岩
10	抉入柱状石斧	遺構面		43	34	150	泥岩
11	片刃石斧	138号溝				30	泥岩
12	柱状片刃石斧	遺構面			6	4	片岩
13	大型蛤刃石斧	遺構面				106	玄武岩
14	大型蛤刃石斧	遺構面				222	玄武岩
15	石剣	落ち込み		39	17	83	凝灰岩
16	紡錘車	87号土坑No.1	43	43	4	12	片岩
17	紡錘車	87号土坑No.2	50	51	6	26	頁岩
18	未製品	130号溝	113	82	13	158	片岩
19	未製品	135号溝		4	11	93	頁岩
20	未製品	124・125号溝		70	11	62	片岩
21	砥石	132号溝				156	砂岩
22	砥石	122号溝			14	50	砂岩
23	砥石	試掘		76	35	1740	砂岩
24	敲石	124号溝	153	128	53	1566	凝灰岩
25	敲石	115号住居	215	188	80	3900	凝灰岩
26	石鏃	遺構面	23	18	4	0.7	黒曜石
27	石鏃	89号土坑	16	15	3	0.5	安山岩
28	石鏃	遺構面		15	2	0.5	安山岩

挿図番号	種類	出土遺構	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	石材
29	石鏃	89号土坑	18		3	0.5	安山岩
30	剥片	140号溝	32	24	5	3.4	黒曜石
31	調整剥片	121号溝	25	14	3	1.6	黒曜石
32	スクレイパー	78号土坑No2	65	30	7	13.7	安山岩
33	剥片	遺構面	35	19	6	2.5	安山岩
34	剥片	1055号ピット	27	12	4	1.2	安山岩
35	剥片	135号溝	37	22	5	4.1	安山岩
36	剥片	161号溝	33	13	10	3.6	黒曜石
37	剥片	129号溝	48	17	8	4.8	黒曜石
38	調整剥片	1051号ピット	35	16	7	3.3	黒曜石
39	石核	135号溝	39	30	8	9.3	石英
40	スクレイパー	144号溝	19	31	6	2.0	安山岩
41	剥片	84号土坑	30	24	6	4.4	黒曜石
42	石核	89号土坑	24	29	15	9.8	安山岩
43	剥片	135号溝			6	2.3	安山岩

I 区出土遺物観察表

挿図番号	種類	出土遺構	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
1	土師器甕	4号土坑	351	315	7		
2	土製投弾	20号土坑	50	28	26	26	
3	土製投弾	13号住居	49	26	24	23	
4	土製投弾	廃土中	36	21	21	12	
5	土製投弾	遺構面	48	28	27	25	
6	土製投弾	77号土坑		31	29	24	
7	土製投弾	廃土中		49		15	
8	鉄鏃	包含層		9	4		
9	石冠状石製品	包含層	100	62	50	430	安山岩
10	扁平片刃石斧	17号土坑	74	44	15	97	蛇紋岩
11	磨製石斧	包含層		80	10	106	緑色片岩
12	石庖丁	348号ピット			6	24	凝灰岩
13	石庖丁	廃土中		44	8	24	片岩
14	石庖丁	包含層			6	8	頁岩
15	砥石	包含層		104	57	1061	砂岩
16	砥石	包含層		78	47	560	滑石
17	砥石	包含層			13	130	片岩
18	砥石	包含層		44	21	134	片岩
19	砥石	包含層		53	24	114	片岩
20	砥石	包含層		56	20	158	片岩
21	スクレイパー	包含層	24	20	7	4	黒曜石
22	スクレイパー	包含層	25	37	8	15	安山岩

IV おわりに

船越高原遺跡周辺の集落について

近年、船越高原遺跡の周辺ではバイパス建設や圃場整備に伴い発掘調査が盛んに行われている。これらの集落は断続的に時期に営まれるが、何れも周辺よりやや小高い部分を選地している。恐らくは筑後川の洪水等を避けるための選地であったと考えられる。最初にこの近辺に集落が営まれるのは弥生前期前半である。船越高原A遺跡Ⅱ区からの検出されている。遺物は包含層からのもので遺構には伴わないが、周辺に該当期の集落の存在が予想される。土器とともに安山岩や黒曜石のチップが多数検出されており、この付近で石器の製作が行われた可能性がある。同じ包含層から出土した大型の石庖丁もこの時期であろうか。続く前期末～中期初頭にかけての遺構も船越高原A遺跡Ⅱ区で検出されている。調査区中央東よりの部分でまとまって土坑が検出されており、北側に展開する集落の縁辺部となろう。中期中葉の遺構は少ない。中期中葉から後半にかけての船越一ノ上遺跡(1)で検出された集落である。墓域は西へ500mのところにある亀王甕棺包蔵地を報告者は推定している。弥生中期後半から末から遺跡数が増加する。船越高原A遺跡Ⅰ地区では東端部の美津留川の自然堤防上に密集して営まれる。また、その対岸の鷹取五反田遺跡(2)、北にある船越一ノ上遺跡においても、相当数が検出されている。しかし、そのほとんど継続せず、後期の遺構は鷹取五反田遺跡で検出されている程度である。古墳前期の遺構は船越高原遺跡B地区(3)においてまとまって検出されている他、吉井町長栖高嶋遺跡(4)においても竪穴住居5棟が調査されている。5世紀以降奈良時代まではⅠ区に継続して営まれる。Ⅲ区西側にも集落が展開するが6世紀末～7世紀初頭にかけてで継続しない。その後、遺構はほとんど無く、中世期の道路状遺構が検出されるのみである。集落だった部分は畑地等の耕作に利用されていたため、その痕跡を残らなかったのであろう。溝は弥生中期以降、連綿と掘り続けられる。一部は集落を囲む溝もあるが、ほとんどのものは水田耕作に関する導水に利用されたものであろう。

溝出土の瓦について

124号溝からは平瓦一枚が出土している。溝の上層に近い位置からの出土で、焼成はやや甘く、かなり摩滅をしている。凸面は斜格子のタタキで、凹面の調整は粗い布目である。周辺からの瓦の出土は北側の長栖前畑遺跡(5)からはかなり量の瓦が出土しており、これに関連するものと考えられている。また、郷土史に詳しい金子文夫氏によれば、遺跡周辺に古代の寺院の可能性が あることをご教示いただいた。字名は異なるがこの地域の行政区名が上古賀であることを付記しておく。

古賀溝について

Ⅲ区で検出された184号溝は五庄屋(6)によって開かれた大石長野水道につながっている。生活の基盤である農業に必要なため、何度も改修が行われたらしく、直接開削に伴う遺物は検出さ

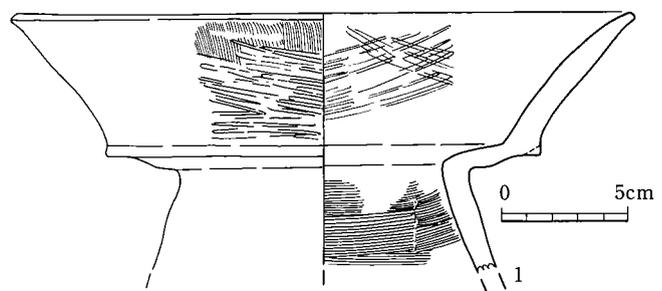
れていない。断面構造は両側にテラスをつけ、中央を一段深く掘り込む。テラス先端には、松の杭を打ち込み、その根元に松材をならべる。松材を使用するのは水に強いからだといわれている。その上から石垣を積むが、裏込めの土にはビニール類が混じっており、戦後に改修されたものと考えられる。恐らく、周辺に大水害が起こった昭和28年の後に改修されたものと思われる。地元では新川と呼ばれることや古い図面等から1665年、第二期工事（古賀津留）の工事のものと考えられる。新川の本流は北新川、南新川に別れ、古賀溝は北新川の分水路となる。

道路状遺構および橋脚状遺構について

I区、III区にて検出された。橋脚状遺構はI区の集落から、II区の後背湿地（恐らく水田）へ、69号溝を渡るための橋脚としての役割を果たしていたのではないだろうか。波板状圧痕が直行して溝に残ることからもその用途が推定される。溝の壁面に木製杭を打ち込み、その上に板材を横架したものであろう。また、道路状遺構と推定されている波板状圧痕はIII区の東端部で検出された。底面から白磁片が出土しており、中世期のものと考えられる。浮羽バイパス路線ないにおいては吉井町塚堂遺跡（7）で検出されているピット列群がそれに当たるものであろう。調査担当者は導水施設の一部と推定されている。また、同町生葉地区遺跡群（8）におけるピット列2も同様の可能性を上げておく。現在では軟弱な地盤の改良のために施されたものとされ、その中で道路の遺構に伴い検出されるものが多い。その好例として穂波町塚原遺跡（9）において検出された畦状遺構が上げられる。古墳の周溝が埋没した上に内部には小石が敷き詰められた楕円形のピットが7条掘り込まれている。恐らく、周溝の上を道を通そうとしたが、地盤が軟弱なためにその改良に施されたものであると考えられる。なお、そのピットの底面から「神水」の文字を刻んだ銅印が埋納されている。

参考 吉井町上古賀集落内採集土器

壺（1）二重口縁の壺の破片である。口縁はわずかに外反しながら大きく広がる。屈曲部分には小さな三角突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメの後、部分的にミガキを行う。内面は口縁付近はミガキ、下半部はハケメが残る。近接する吉井町『生葉地区遺跡群I』（10）で報告されたものに類似しており、布留古段階に属するものであろう。



第52図 上古賀集落内出土土器（1/3）

註

- (1) 丸林 禎彦・江島 伸彦 1997『船越一ノ上遺跡』田主丸町文化財調査報告書 第8集
- (2) 水ノ江 和同編 1998・1999『鷹取五反田遺跡』Ⅰ・Ⅱ 福岡県教育委員会
- (3) 江島 伸彦 2000『船越高原遺跡』田主丸町文化財調査報告書 第13集
- (4) 平川 祐介 1996『長栖高嶋遺跡』吉井町文化財調査報告書 第8集
- (5) 調査担当者の平川 祐介氏から御教示を得た。
- (6) 浮羽郡誌刊行会 1966『浮羽郡誌』
吉井町誌編纂委員会 1977『吉井町誌』
- (7) 馬田 弘稔 1988『塚堂遺跡』Ⅴ 福岡県教育委員会
- (8) 平川 祐介 1990『生葉地区遺跡群』Ⅰ 吉井町文化財調査報告書 第5集
- (9) 毛利 哲久 1994『穂波地区遺跡群 第6集』穂波町文化財調査報告書 第9集
- (10) (8)と同じ

図 版



1 II区第一遺構面東端部
(西から)



2 II区第一遺構面
(西から)



1 II区第一遺構面
(南から)



2 水路部分第一遺構面
(西から)



1 水路部分第一遺構面
(西南から)



2 II区第一遺構面西端部
全景(東から)



1 水路部分第一遺構面
(東から)



2 Ⅲ区第一遺構面東端部
(南から)

1 Ⅲ区第一遺構面中央部
(東から)

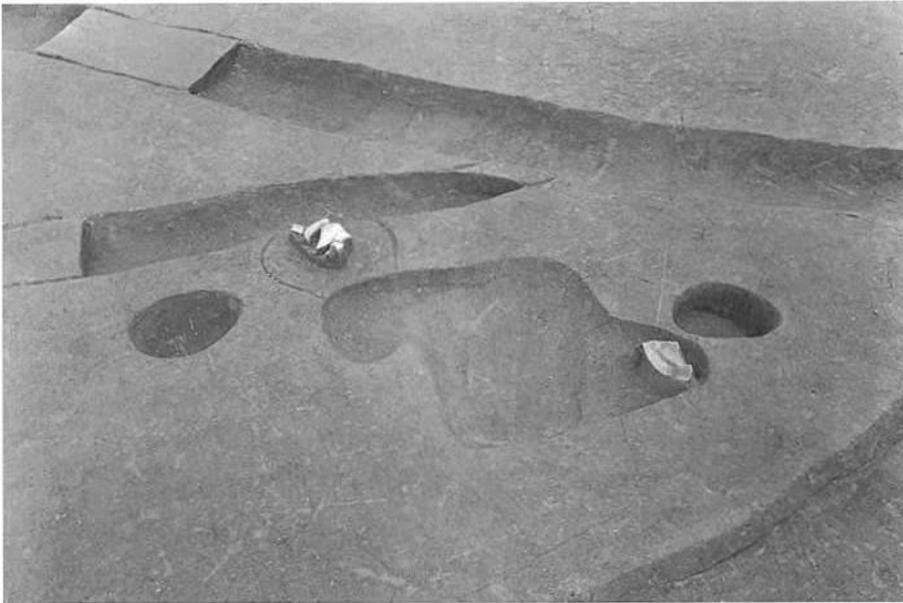


2 Ⅲ区第一遺構面西端部
(東から)





1 114号堅穴住居跡
(東から)

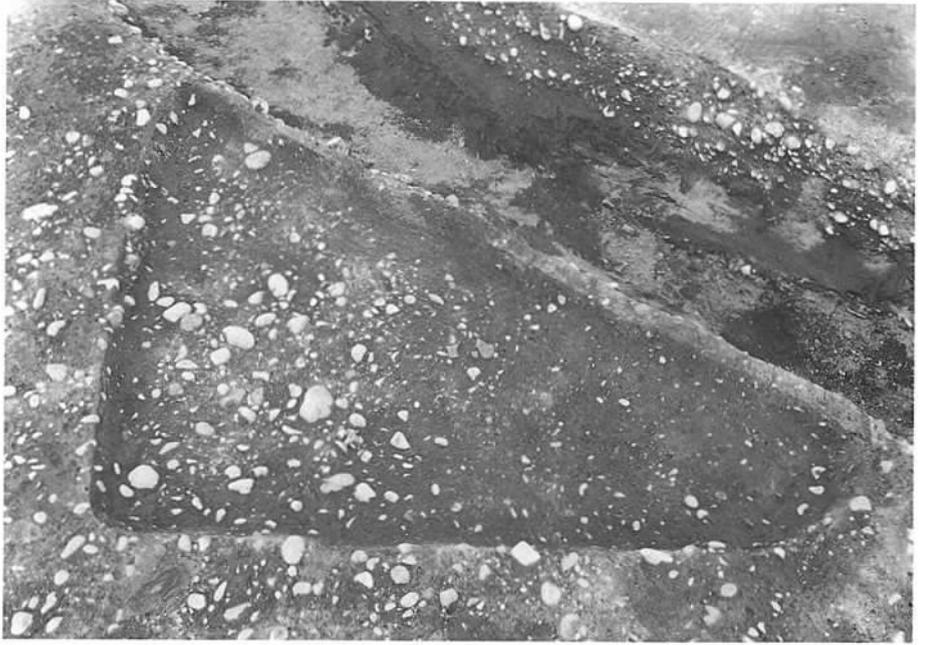


2 115号堅穴住居跡
(東から)

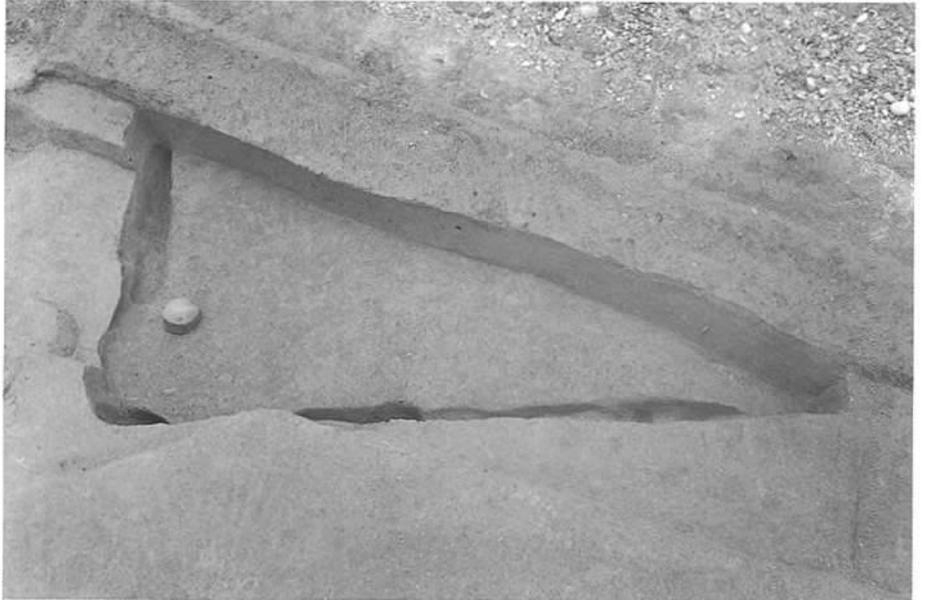


3 116・119号堅穴住居跡
(北から)

1 117号堅穴住居跡
(東から)

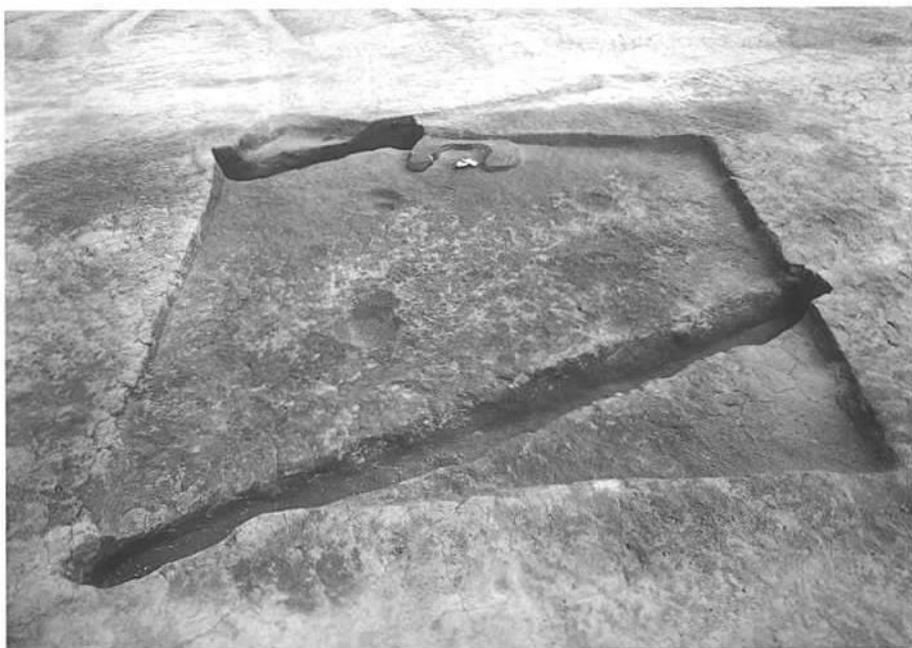


2 118号堅穴住居跡
(北から)



3 120号堅穴住居跡
(南東から)

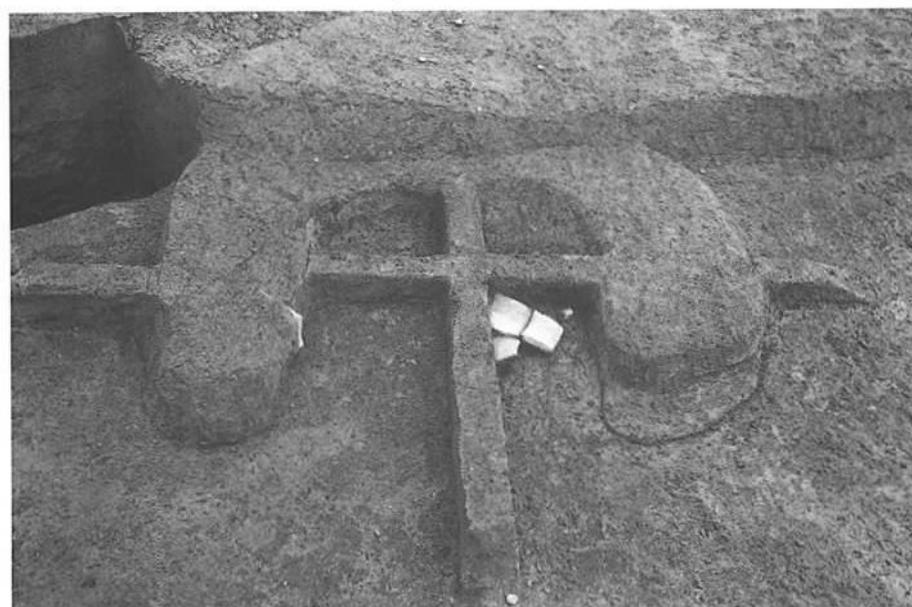




1 121号堅穴住居跡
(南から)



2 121号堅穴住居跡
貼床除去後 (南から)

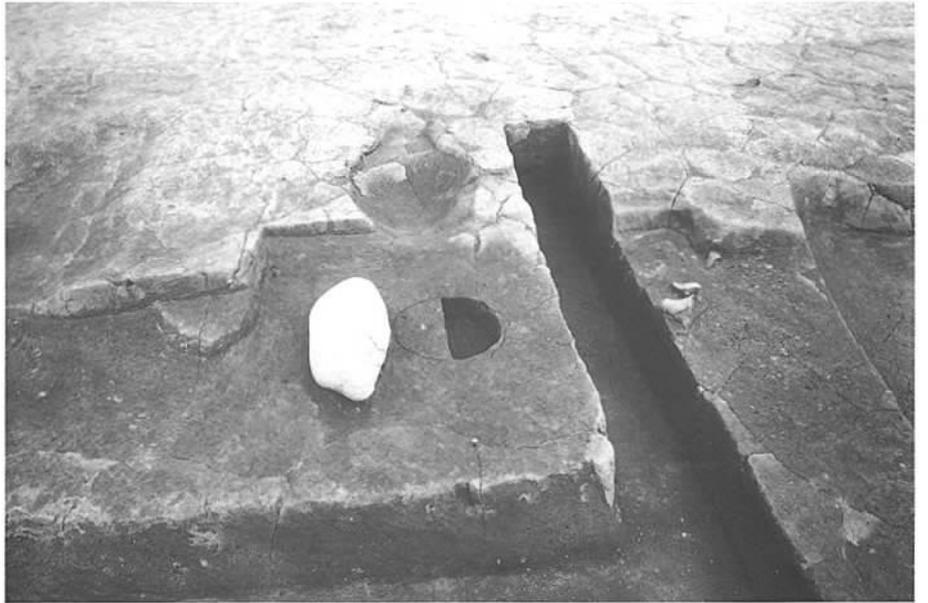


3 121堅穴住居跡カマド
(南から)

1 122号堅穴住居跡
(南から)

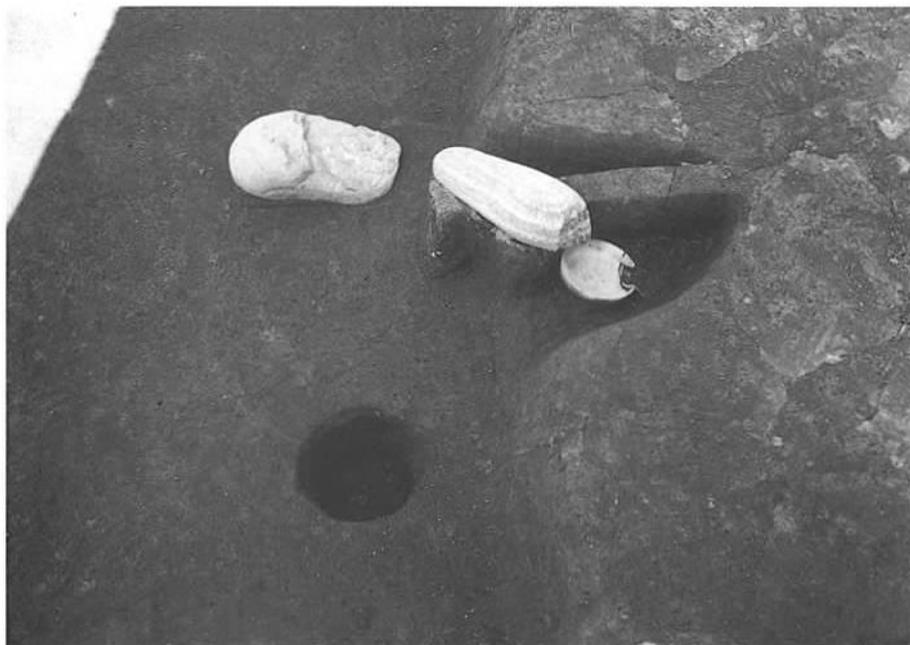


2 122号堅穴住居跡カマド
(南から)



3 123号堅穴住居跡
(南から)





1 123号堅穴住居跡カマド
(東から)



2 7号掘立柱建物
(南から)

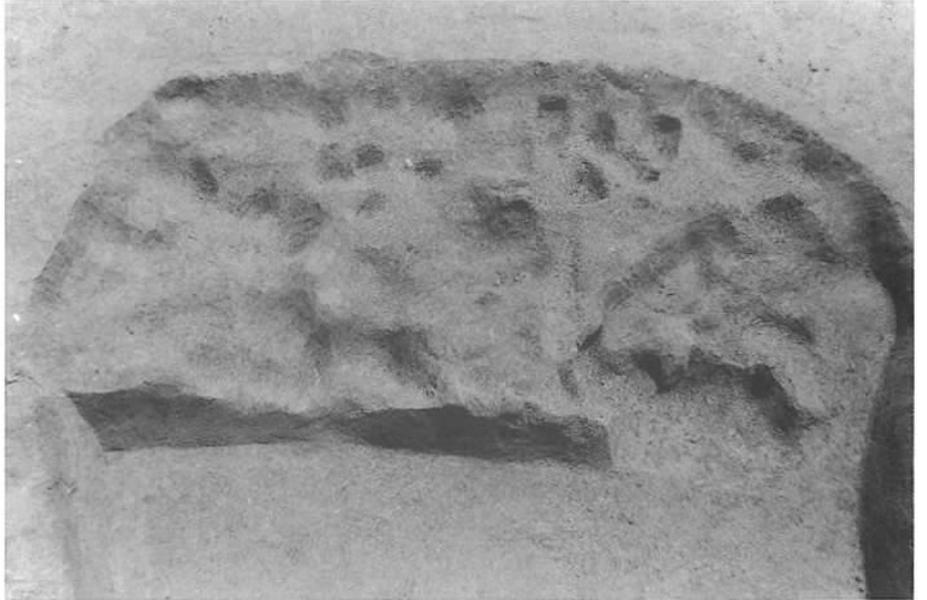


3 8号掘立柱建物
(北東から)

1 65号土坑（南から）

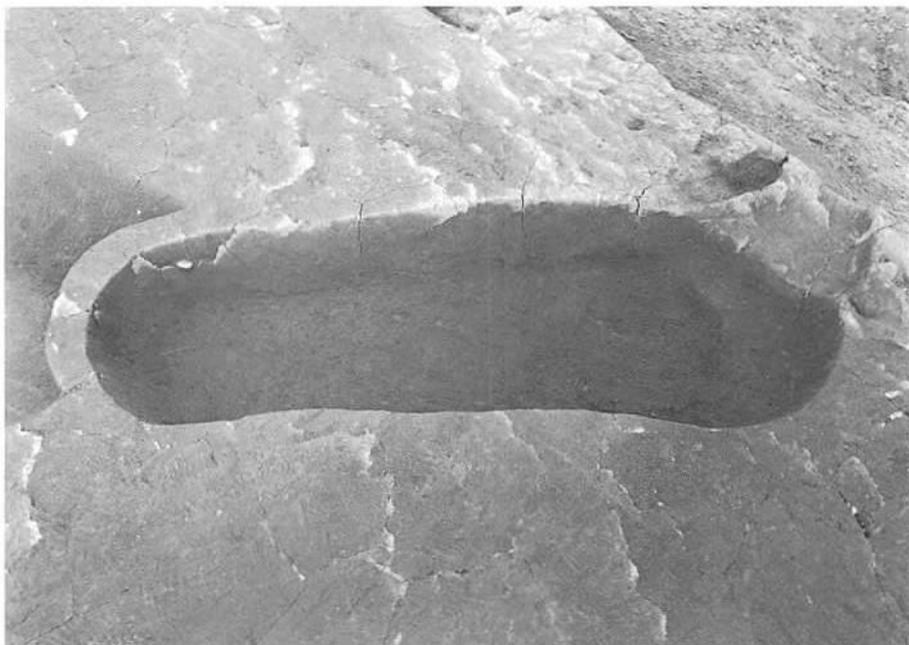


2 66号土坑（北東から）



3 73号土坑（西から）

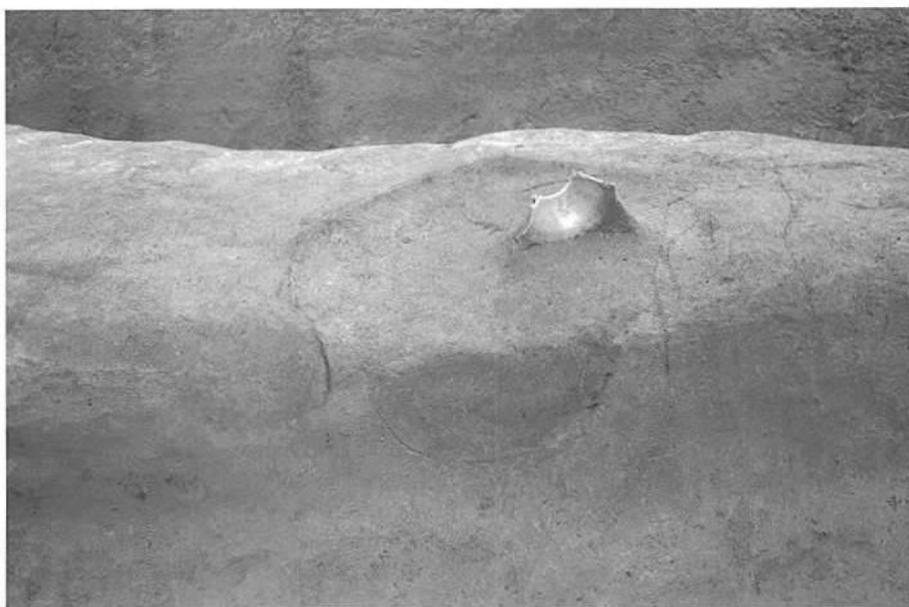




1 74号土坑（東から）



2 75号土坑（南から）



3 76号土坑（西から）

1 77号土坑（西から）



2 78号土坑（北西から）



3 79号土坑（南から）





1 80号土坑（北から）



2 81号土坑（南から）



3 82号土坑（北から）



1 83・84号土坑（西から）



2 86号土坑（南から）



3 87号土坑（南から）



1 88・92号土坑(南西から)



2 89号土坑(北西から)



3 94号土坑(南から)

1 96号土坑（北西から）



2 97号土坑（東から）



3 98号土坑（北西から）





1 99号土坑（北西から）



2 100号土坑（南東から）



3 101号土坑（北から）



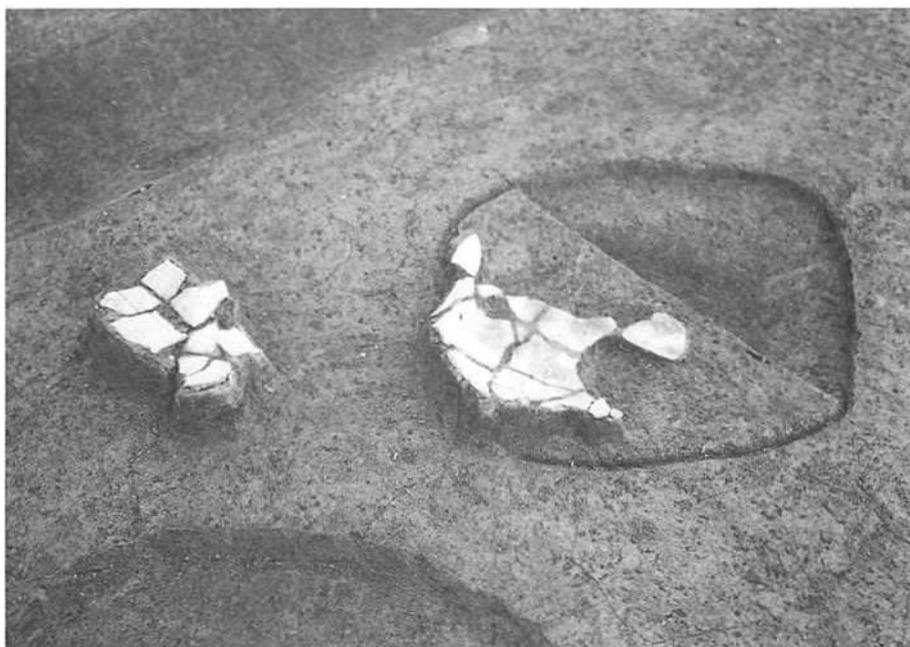
1 102号土坑（西から）



2 103号土坑（北から）



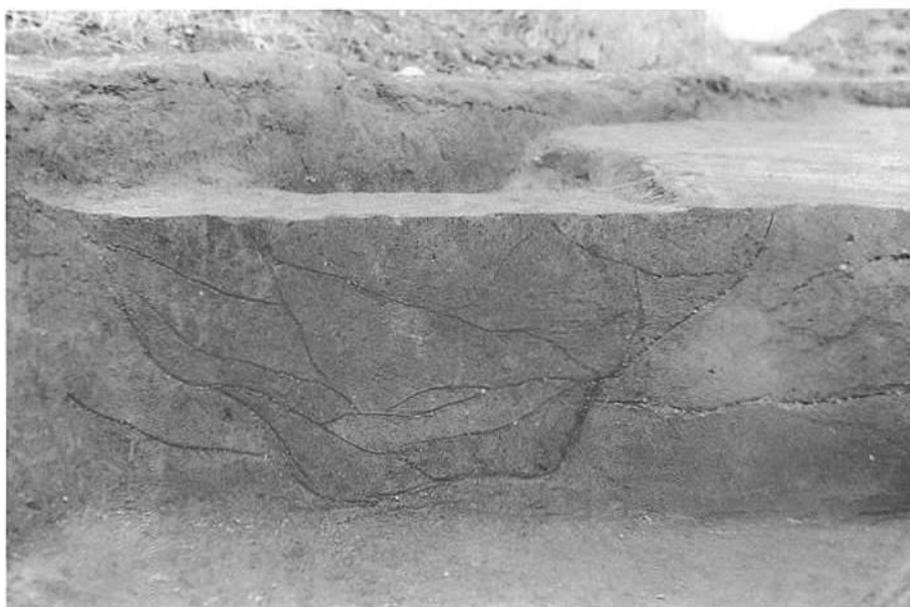
3 104号土坑（西から）



1 119号土坑（南西から）



2 II区溝集中部分
（北から）



3 72号溝断面
（北西から）

1 76号溝断面
(北西から)



2 77号溝断面
(北西から)



3 96号溝 (北東から)





1 96号溝断面
(東から)



2 118号溝断面
(北から)



3 121号溝断面
(北から)

1 122号溝断面
(北から)



2 123号溝断面
(北から)



3 124号溝断面
(南から)





1 125号溝断面
(南から)



2 129号溝断面
(南から)



3 132号溝断面
(南から)

1 133号溝断面
(南から)



2 134・135号溝断面
(南から)



3 162号溝土器出土状況
(北東から)





1 195号溝断面
(東から)



2 213号溝断面
(南東から)



3 213号溝土器出土状況
(南から)

1 214号溝断面
(南東から)



2 214号溝土器出土状況
(北から)



3 232号溝 (北から)

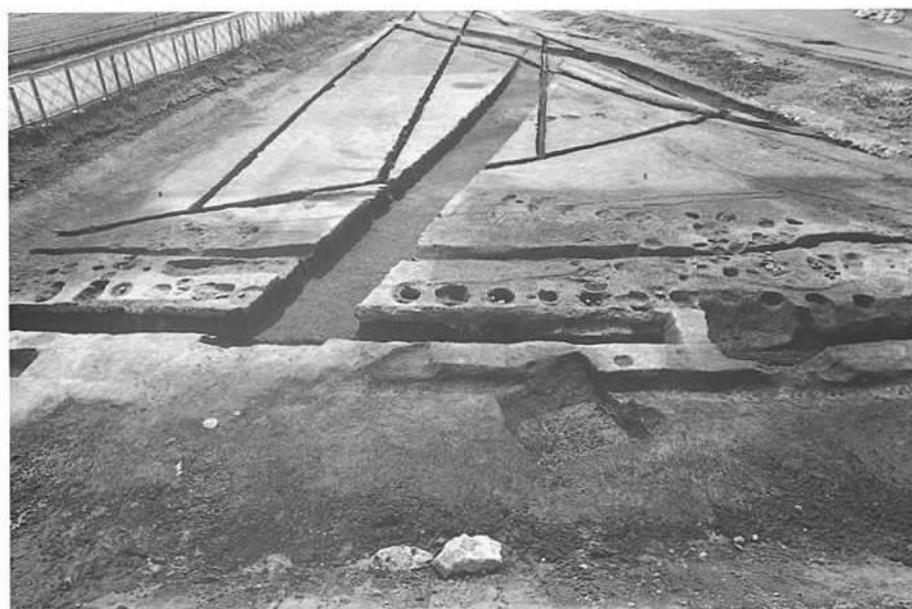




1 道路状遺構
(西から)



2 道路状遺構
(南から)



3 道路状遺構
(東から)

1 道路状遺構断面
(北から)

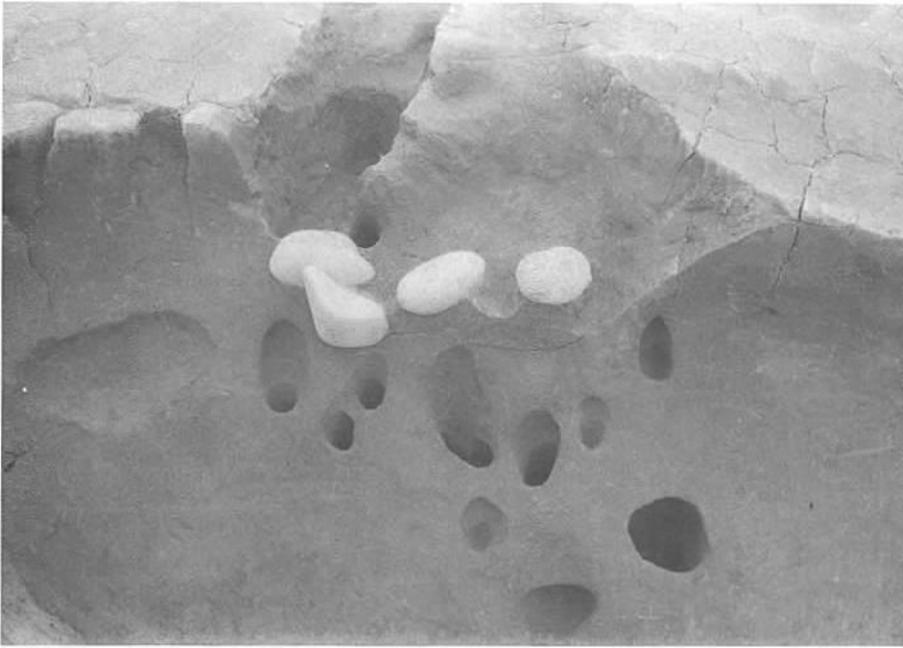


2 橋脚状遺構
(北西から)



3 橋脚状遺構
(南東から)





1 橋脚状遺構完掘後
(南東から)



2 長野水神社



3 五庄屋に関する石碑



114-1



76-8



117-7



76-9



117-8



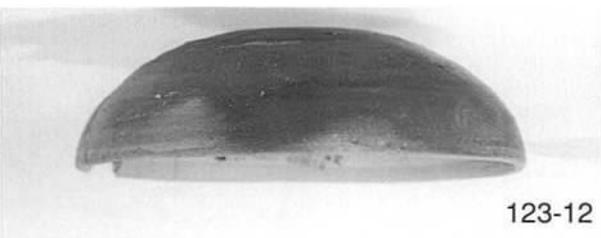
78-11



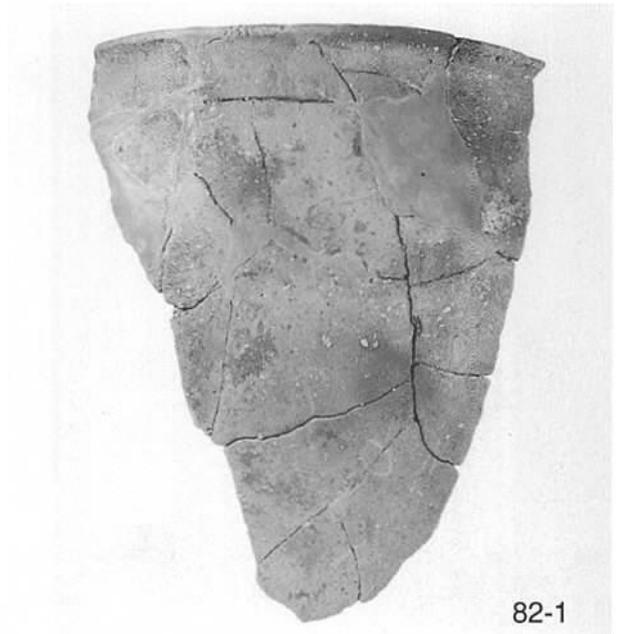
122-5



81-13



123-12

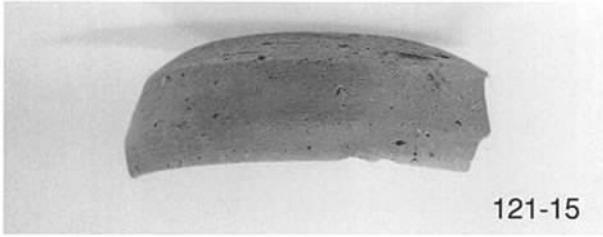


82-1



73-3





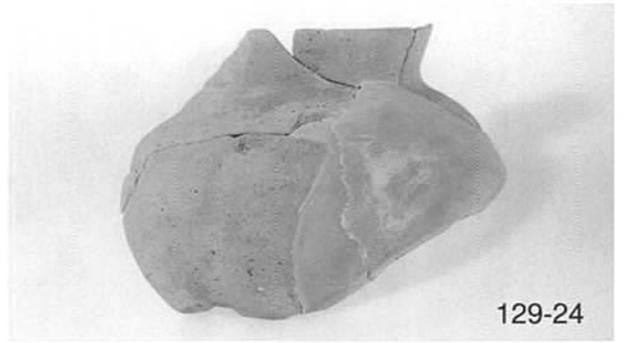
121-15



125-21



121-17



129-24



122-19



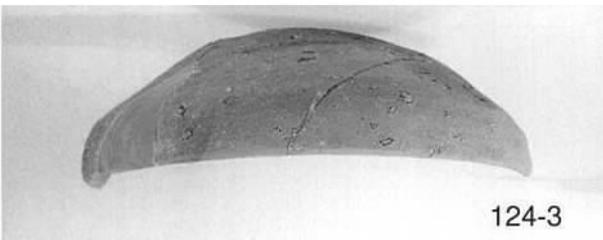
129-26



124-1



132-5



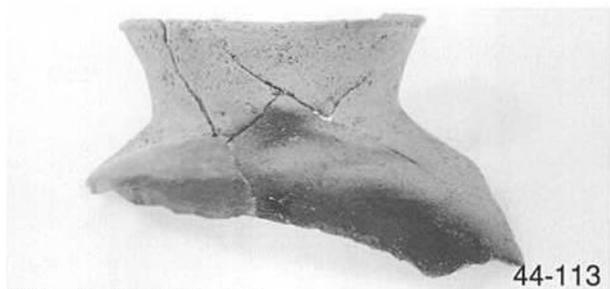
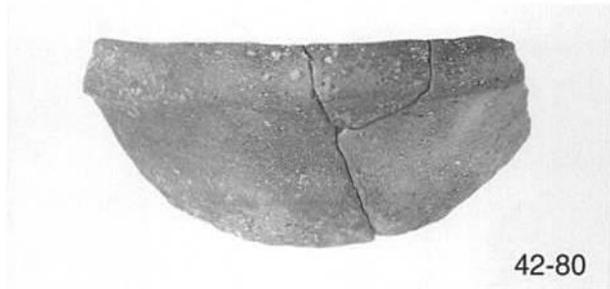
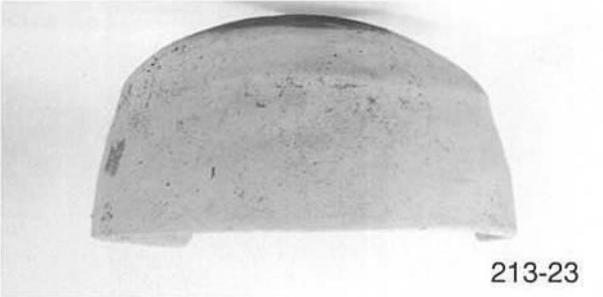
124-3



125-20



134-12





44-114



45-123



44-115



44-116



45-119



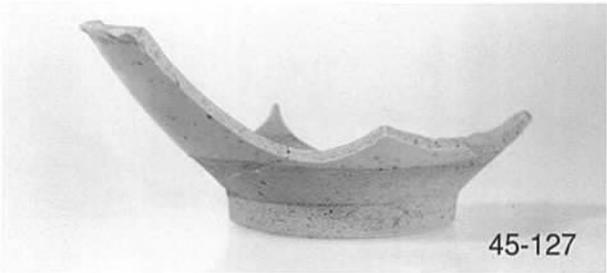
45-125



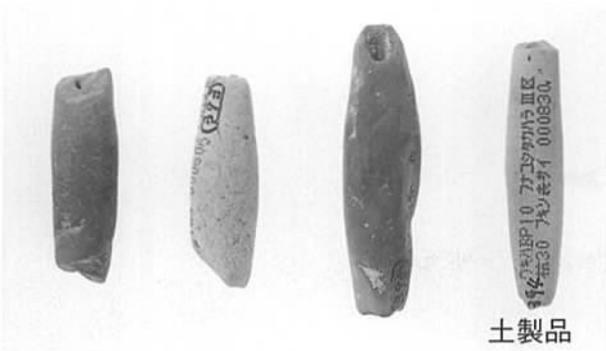
45-120



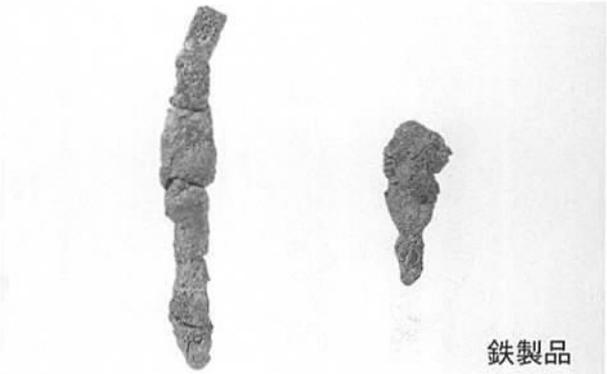
45-126



45-127

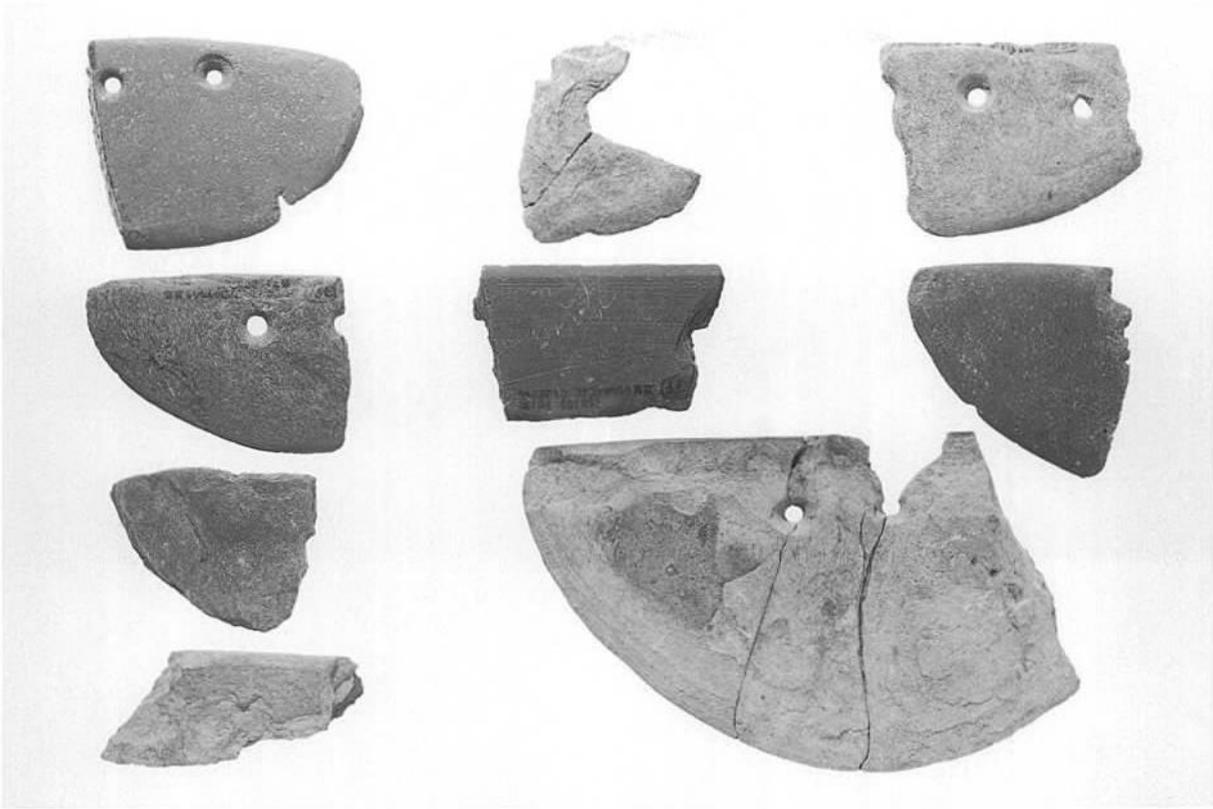


土製品



鉄製品

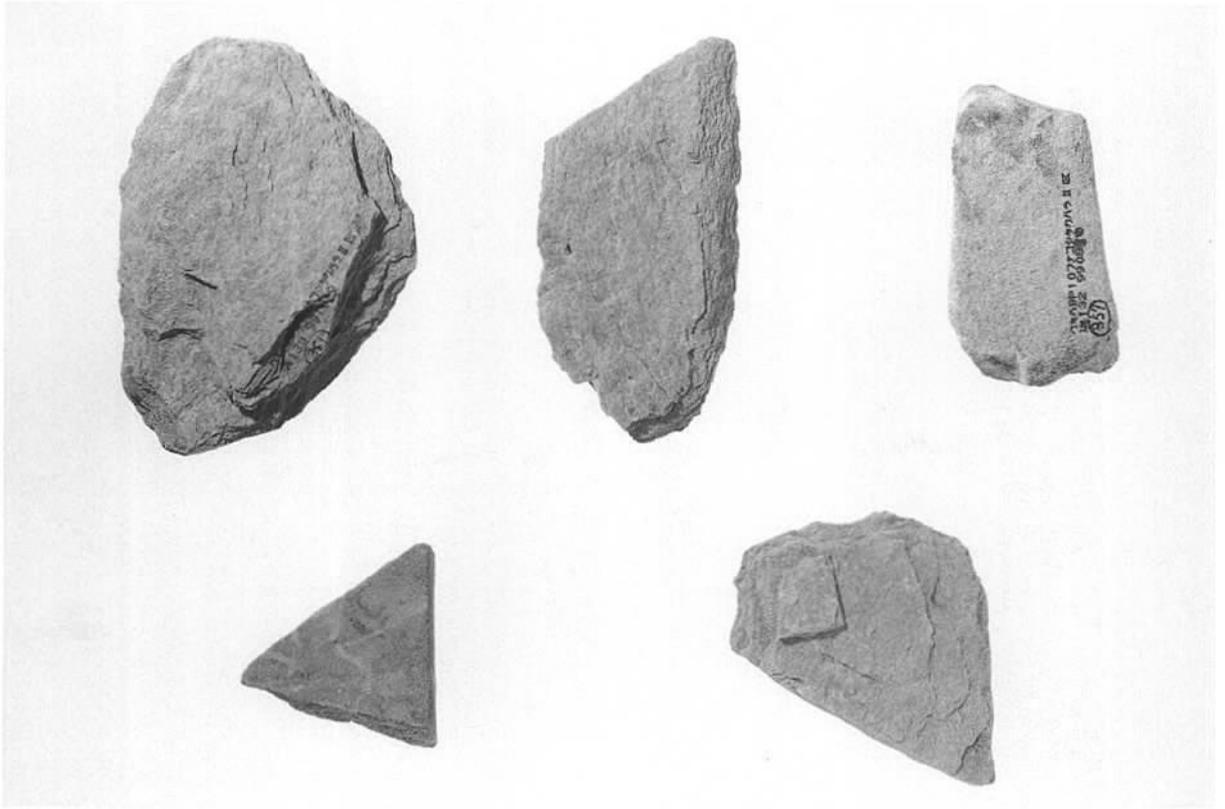
包含層出土土器



1 出土石庖丁



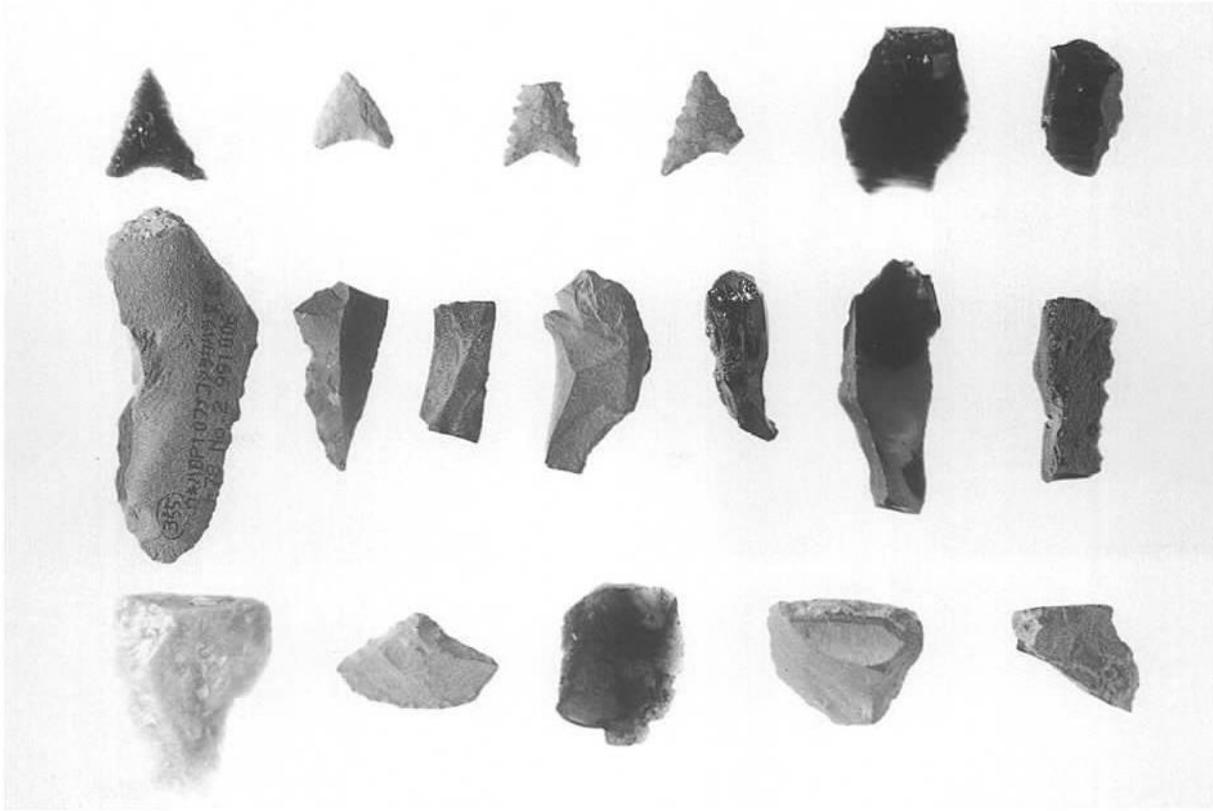
2 出土石製品①



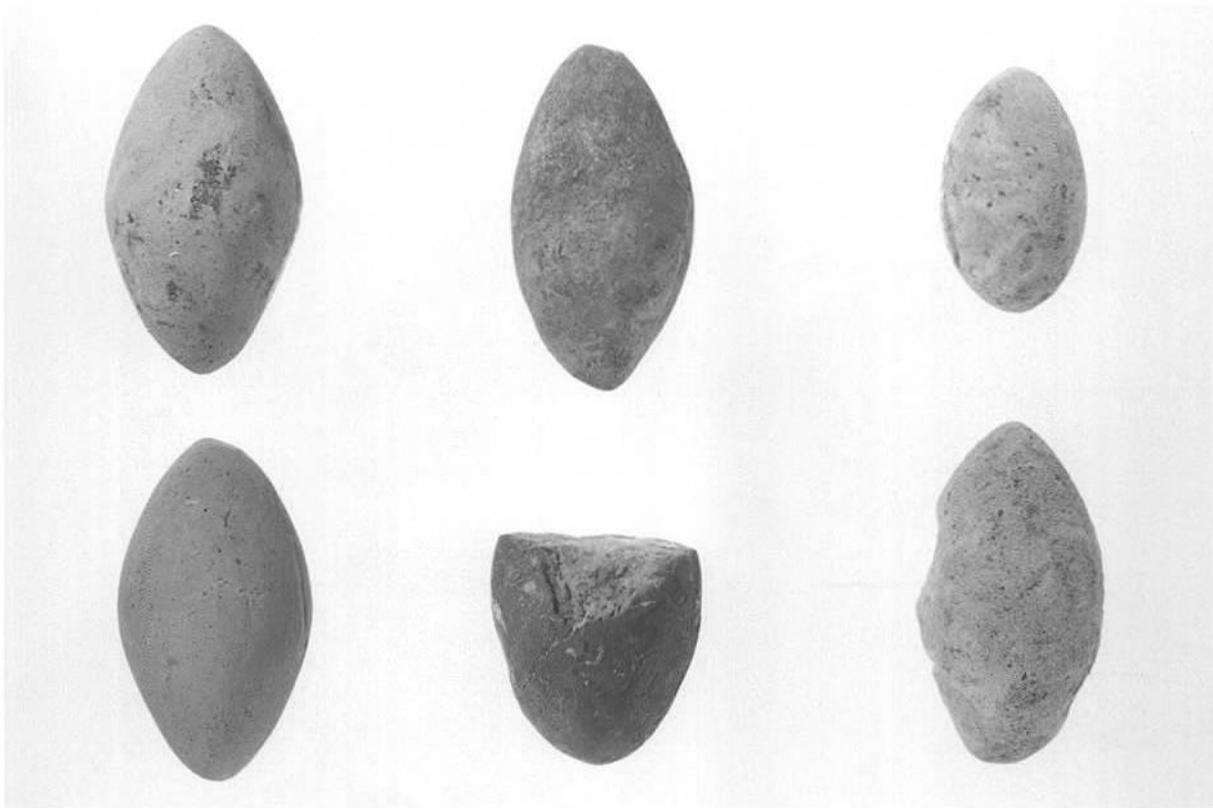
1 出土石製品②



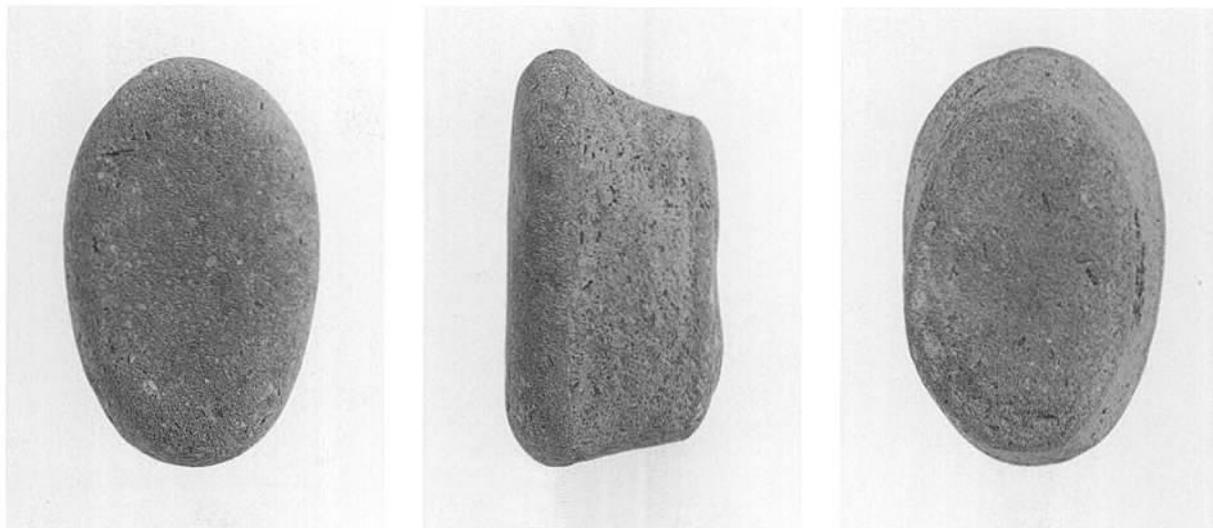
2 出土石製品③



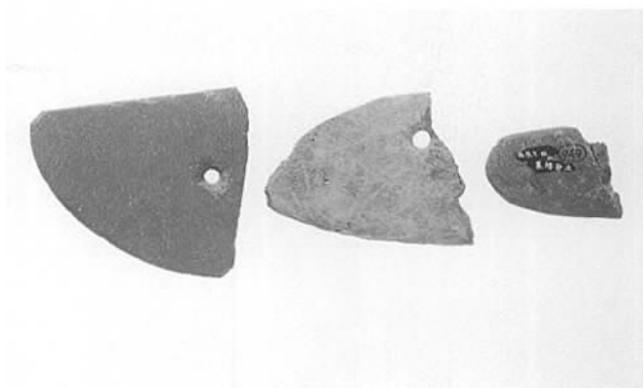
1 出土石製品④



2 I区出土土製品



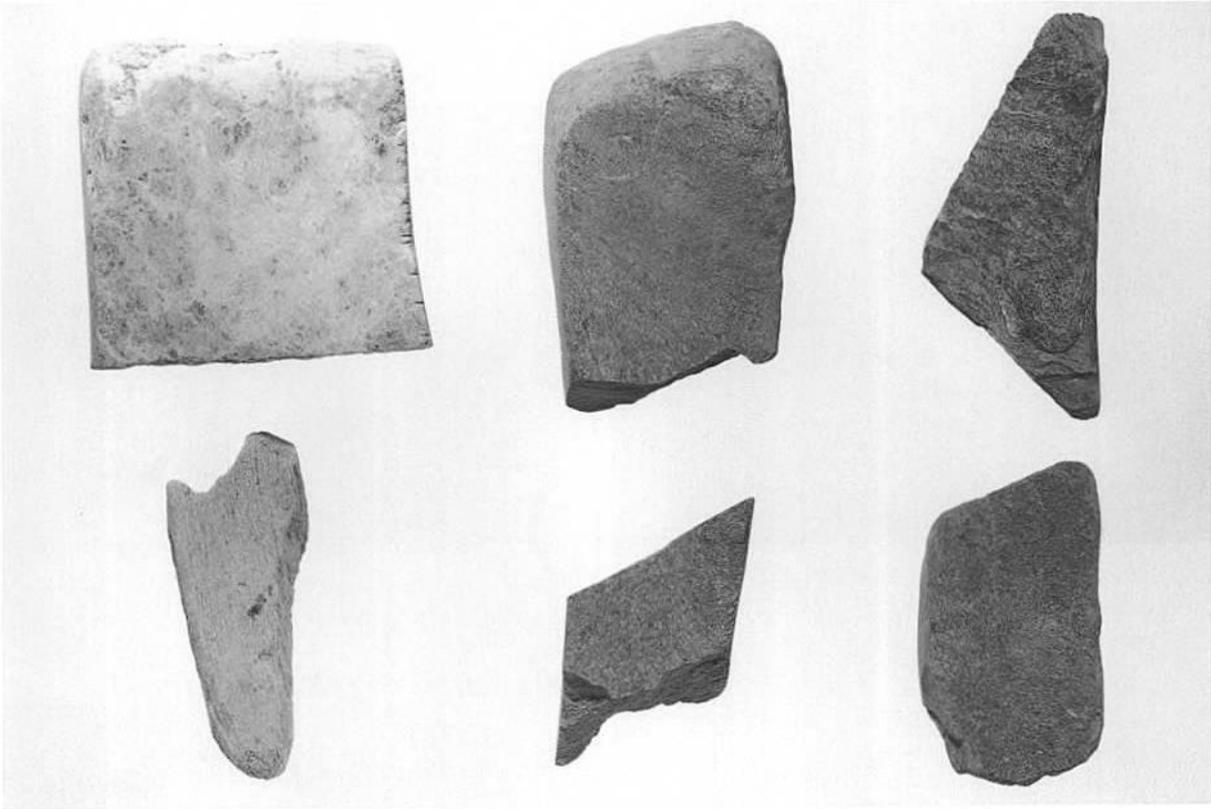
1 I区出土石製品①



2 I区出土石製品②



3 I区出土石製品③



I区出土石製品④

報告書抄録

ふりがな	ふなこしたかはらAいせきさん							
書名	船越高原A遺跡Ⅲ							
副書名	福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在遺跡の調査							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	斎部麻矢・吉田東明・進村真之							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	平成14(2002)年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふなこしたかはら いせき 船越高原A遺跡Ⅲ	ふくおかけんうきはぐん 福岡県浮羽郡 たぬしまるまらのおおあざふなこし 田主丸町大字船越 字高原・字宇和田 字栗田・字小川原 吉井町大字長栖 字前畑他	40829		33° 20' 50"	130° 43' 31"	1995.05.09	10,300㎡	道路建設
						} 1997.03.20		
						・ 1997.08.15		
						} 1998.03.13		
						・ 1998.04.28		
						} 1999.03.19		
						・ 1999.04.02		
						} 2000.03.28		
						・ 2000.04.12		
						} 2000.11.30		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
船越高原A遺跡Ⅲ	集落	弥生時代 古墳時代 中世 近現代	堅穴住居跡 掘立柱建物 土坑 溝 道路状遺構	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器				

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 13	登録番号 4

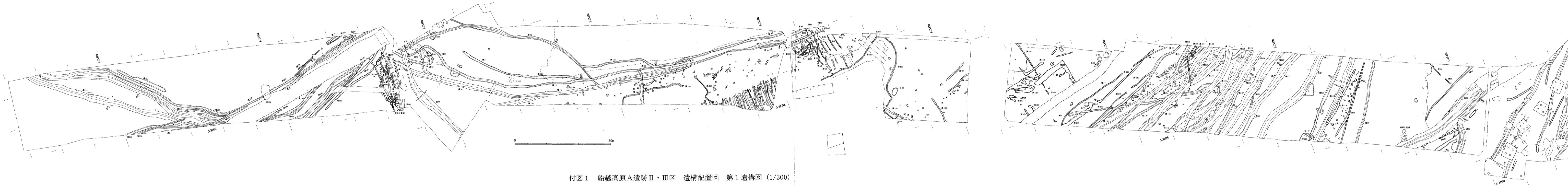
一般国道 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第16集
210号

船越高原 A 遺跡 III

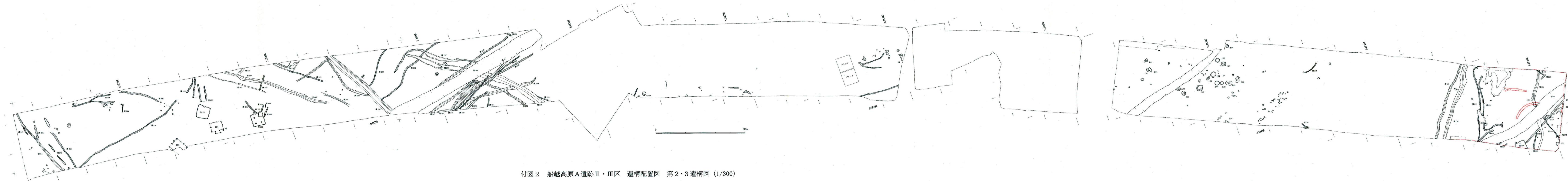
平成14年 3月29日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 松影堂印刷株式会社
福岡市博多区吉塚5丁目13-40



付図1 船越高原A遺跡Ⅱ・Ⅲ区 遺構配置図 第1遺構図 (1/300)



付図2 船越高原A遺跡Ⅱ・Ⅲ区 遺構配置図 第2・3遺構図 (1/300)